

389-83-(2)



1200800927881

鳥い青

作ケンリルテアマ
譯 雄 正 山 楠



始



鳥 い 青

クンリルテアマ

譯 雄 正 山 楠

版 出 社 潮 新

389
83
(2)

おぼえがき

本國のベルジックばかりでなく、今日では劇詩人としてまづ世界第一位とゆるされてゐるモーリス・マートルリンクの名高いお伽劇の全部を譯し出しました。今年から十五年前の一九〇八年九月にはじめてこの芝居がロシアの藝術座で上演せられて近代舞臺藝術上に時代區劃的の藝術的成功ををさめてから、續いてヨーロッパとアメリカの劇場で演ぜられ、原作は各國の國語に翻譯せられて、作者の名は世界の隅々まで傳はるやうになりました。まことに近代劇に於てはじめて「詩と劇場と公衆」とを同時に完全に把握しえた大演劇であり、象徴寓喩劇の作者としてのマートルリンクの思想と技巧の集大成ともいふべきものであります。

さて「青い鳥」といふのは人生の幸福ださうです。その幸福の青い鳥は、この芝居のチルチル兄妹のやうに、犬だの猫だのパンだの砂糖だの大勢の一族郎黨を引きつれて、所々方々と外をたづねまはらなくとも、つい鼻の先の自分の家の平和な爐ばたに在ることを人間は知らないのだといふのがこの芝居の教訓です。



I 種

W



1200800927881

なほ、『青い鳥』から五六年後の一九一四年に、作者は續篇の『婚約』を書きました。これは少年から青年になつたチルチルがお嫁さがしの物語です。『青い鳥』によつてすべての子供の心に善と幸福の高貴な理想ををしへた作者は、『婚約』によつて明るい純眞に睿智的な戀愛と結婚の世界をひらいて見せようとしたのです。

『青い鳥』が日本での初演は大正九年二月有樂座でやつた畑井、岡本君たちの「民衆座」のそれでした。

大正十一年九月

京都にて

譯

者

青い鳥

マアテルリンク作
楠山正雄譯

とろさんのチル
 おばあさんのチル
 おぢいさんのチル
 ピエルロー
 ロベール
 ジャンネット
 マドレーヌ
 ピエレット
 ポーリーヌ
 リケット
 夜眠病幽恐
 と
 と
 陰靈氣死

かあさんのチル
 チルチル
 ミチル
 妖バ
 火水乳砂犬猫光時
 シン
 糖
 問

人
 物
 (登場順)

星の露夜の香氣
 夜の螢火
 夜啼鶯の歌
 樹 (榎、山毛櫨、楡、菩提樹、樅、絲杉、樟、マロニエ、葛、ポプラ、柳等)
 動物 (兎、狼、豚、熊、野牛、牡牛、牝牛、山羊、羊、鶏、馬、驢馬等)
 肥った幸福(贅澤)等
 「幸福」等
 「喜」等
 母の愛
 青い子供等
 守護の天女等
 時
 お隣のおばあさん
 その娘

景

第一景 (第一幕) 樵の小家
 第二景 (第二幕) 妖女の御殿
 第三景 (第二幕) 思出の國
 第四景 (第三幕) 夜の宮
 第五景 (第三幕) 森
 第六景 (第四幕) 幕の前
 第七景 (第四幕) 墓地
 第八景 (第四幕) 幕の前
 第九景 (第四幕) 幸福の園
 第十景 (第五幕) 未來の王國
 第十一景 (第六幕) わかれ
 第十二景 (第六幕) 目ざめ

衣裳

チルチル——ペロールの昔話集の中の、「拇指さん」の衣裳。緋色の小ズボン。淡青色の短い上着。白の靴下。鹿皮の靴または半靴。

ミチル——グレーテルまたは「赤頭巾」の衣裳。

光——「月の色」の女服、即ち緯糸に銀の反射光のある淡金色の女服、光線をあらはしたざらざら光る紗

その他。ネオ・グレシヤ、又はウォルター・クレインのイギリス・グレシヤ風、または多少アンビエール式

——高い腰、露出した腕等。——かぶり物は、寶冠または軽い花冠の類。

妖女ベリリウヌ、お隣のおばあさん——妖女の昔話にある貧乏人の女の古典的な服装。第一幕で、妖女の老婆から王女に變る件は省いてもよろしい。

とうさんのチル、かあさんのチル、おぢいさんのチル、おばあさんのチル——グリムの昔話集にあるドイツの樵と百姓の傳説的な服装。

チルチルの弟妹——「拇指さん」の服装の變形いろく。

時——「時」の古典的な服装。黒又は暗青色の大マント。白い垂れた長髯。大鎌。砂時計。

母の愛——「光」のそれと殆ど似通つた服装、すなはち、しなやかで、ギリシヤの彫像の透明ある、できるだけ白いヴェール。眞珠と寶石類も、全體の純粹な明朗な調和を破らない限り、できるだけ豊富に着ける。

大きな「喜」等——本文にあるやうに、微妙な、甘美な色調をもつた光の服。——薔薇の目ざめ、水の微笑、

琥珀の露、曙の紫などの。

家の幸福等——いろくの色の服、または便宜百姓、羊飼、樵、その他の服装、たゞし理想化され、または童話風に解釋されること。

肥つた幸福(贅澤)等——姿の變る前は、ゆつたり重い赤と黄の錦欄のマント、澤山の大きな寶石その他。變化の後は、コーヒー色又はチョコレート色の肉襦袢メイセー。牛の腸膜でつくつた道化人形の感じを與へる。

夜——神祕らしく星の光をちらした、緯糸に赤褐色の反射光のついた、ゆつたりした黒い着物。暗いけし色のヴェールなど。

隣のみすめ——金茶色の明るいつやをもつた髪の毛、長い白の女服。

犬——赤い燕尾服、白のズボン、漆塗の長靴。蠟ぬりの帽子。服装には多少ジョン・ブル(イギリス風)を思はせるところがある。

猫——金箔を置いた黒の絹の肉襦袢。

この二つの人物の頭は、程よく動物らしくすること。

パン——トルコのバシヤ(總督)の華美な服装。金の縫ひのある深紅色の絹または天鵝絨のゆつたりした服。巾びろのターバン(トルコ頭巾)。彎月形の短剣。太鼓腹。たつぷりふくらんだ赤ら顔。

砂糖——トルコの宮廷の宦官の風俗に似た絹衣裳、砂糖塊の包み紙を表示した青と白のだんだら。トルコ宮廷の宮女監のかぶる頭巾。

火——赤い肉襦袢。反射の光系のついた、金裏朱色のマント。色がはりの火炎の飾毛をかぶる。

水——「驢馬の皮」の昔話の「時の色」の衣裳、すなはち緯糸に透明な反射光のある淡青色または青緑色の服、水の感じの紗。これも同じくネオ・グレシヤ又はアングロ・グレシヤ風、たゞ一層ゆつたり、一層

軽い、水の流れのふはくした感じ。藻または蘆の花の頭飾。

動物たち——賤民または百姓の服装。

樹木たち——緑色のさまざまの變つた色調、または樹の幹の色、それ／＼識別のつくやうな附屬物、葉、または枝。

——第一幕——

第一景 樵ヤシロの小家

舞臺は或樵の小屋の中。質朴で田舎じみではゐますが、ちつともじめ／＼はしてゐません。棚附爐爐の中に燃えさしの薪の火がまだ残つてゐます。いろ／＼の臺所道具、衣類戸棚、パン焼の鍋、振子の下がつた柱時計、糸車、水道の呑口など。卓の上には、ランプがともつてゐます。戸棚の前には、兩端に分れて、犬と猫とが丸くなつて鼻を尻尾の中に突込んで寝てゐます、犬と猫との間には青と白とのだんだらの、大きな塔形の砂糖が置いてあります。壁には丸い鳥籠がつるしてあつて、中には一羽雉鳩が飼つてあります。奥に窓が二つ、中から鎧屏がしめてあります。其の一つの窓の下には腰掛臺が一つ。小家の左手の方に入口の扉がついてゐて、大きなかけ金がかつてあります。右手の方にも、もう一つ扉があります。梯子があつて、そこから家根裏へ行けるやうになつてゐます。右手にはまた子供の寝る寢臺が二つあつて、その枕上には二つ椅子があり、その上に丁寧に疊んだ着物が置いてあります。

幕が上がりますと、兄のチルチルと妹のミチルとが小さな寢臺の上です／＼寝入つてゐます。かあさんのチルは子供の夜着をもう一度掛け直してやつて、しばらく上から覗き込んで子供達の寝つい

た様子を見とどけると、その時扉を半分開けて首だけ出したとらさんのチルに手で合圖をしました。それから唇に指をあて、とうさんに聲を立てないやうに頼んで、明りを消して、そつと爪先で歩きながら、右手の部屋の方に入つて行きました。舞臺はしばらく眞暗なまゝでした。すると、ふと向ふの方が明るくなつたと思ふと、段々明るい光になつて、窓の鎧扉からさし込みました。卓の上のランプもひとりてに、また明りがつきました。けれどもさつきかあさんが消して行つた前とは何だか明りの色が異ふやうでした。やがて二人の子供は眼を醒ましたと見えて、床の上に取り上げりました。

チルチル ミチルかい。

ミチル えゝ。にいさん。

チルチル 眠つてるの、お前。

ミチル にいさんは。

チルチル ううん。眠つてはゐないさ、お話してゐるんだもの。

ミチル ねえ、けふはクリスマスなの。

チルチル ううん、まださ、明日だよ。でもクリスマスのおぢいさんは、今年は何んにも僕たちには持つて来てくれないんだつて。

ミチル どうして。

チルチル だつてかあさんは町にさう言ひに行くひまがなかつたんだつて。でもね、おぢい

さん、來年は來るよ。

ミチル 來年つて遠いの。

チルチル 随分遠いさ。でもおぢいさん、お金持の子供の所へは今夜來るんだよ。

ミチル まあ。

チルチル やあ。かあさんが明りを消すのを忘れてら。よし。いいことがある。

ミチル なあに。

チルチル 起きるんだよ。

ミチル でもいけないことよ。

チルチル 構ふものか、誰もゐやしないもの。おい窓をごらんよ。

ミチル あら、なんて明るいんでせう。

チルチル お祭の明りだよ。

ミチル 何のお祭。

チルチル 向ふのお金持の子供の内さ。クリスマスの樹があるんだ。窓を開けて見よう。

ミチル でも、よくつて。

チルチル いゝともさ。誰もゐないんだもの。ほら音楽をやつてゐる。起きよう。起きよう。

から云つて子供たちは起き上つて一つの窓の下へ駆けて行きますと、腰掛臺の上につて窓の鏡屏を明け放しました。明るい光がぼつと部屋の中に射し込みました。子供たちは食べるやうに外を眺めました。

チルチル やあすつかり見えら。

ミチル 「腰掛臺に足をのせる場所は殆どありませんでしたから」 あたしよく見えないわ。

チルチル 雪が降つてらあ。六頭立の馬車が二臺來たぞ。

ミチル 男の子が十二人下りたわね。

チルチル ばかだなあ。女の子ぢやないか。

ミチル みんな長ズボンを穿いてるわ。

チルチル わかりもしないくせに。そんなに押すなよ。

ミチル あたし、にいさんに觸りやしないわ。

チルチル 「自分ですつかり腰掛臺を占領してゐながら」お前みんな場をとつてしまふんだもの。

ミチル あら、あたしの場なんかちつとも無くつてよ。

チルチル 静かにおしよ。樹を見てるんだ。

ミチル 何の樹。

チルチル 何つてクリスマスツリーの樹さ。何だ、お前壁を見てるのかい。

ミチル えゝ見てゐてよ。だつて場がないんですもの。

チルチル 「妹にほんの少しの場所を惜しまうに分けてやりながら」さあ、それでいゝだらう。何だ、

お前の方がよつほど工合がよくなつたぜ。どうだい、あのすばらしい明りは。

ミチル まあ大へんな騒ぎをして、あの人たち何を爲ようつてんでせう。

チルチル 音楽をやるんだよ。

ミチル あの人たちおこつてゐるの。

チルチル ううん。けど骨が折れるものだから。

ミチル また白い馬の馬車が來たわ。

チルチル 黙つて見ておいでよ。

ミチル あの樹の枝にびか／＼金みたいなのがぶら下がつてゐる。あれは何なの。

チルチル おもちやさ。極つてゐるぢやないか。劍だの、鐵砲だの、兵隊だの、大砲だの。

ミチル それからお人形さんは。お人形さんはなくつて。

チルチル 人形。ばかだなあ。人形なんかつまらないや。

ミチル それからテーブルのまはりに並んでるもの何でせう。

チルチル お菓子だの。果物だの。タルト・アラ・クレームだの。

ミチル あたし小さい時食べたことがあつてよ。

チルチル 僕だつて。パンよりかずつとおいしいけれど、たんと貰へないんだ。

ミチル でも、あそこには随分澤山あるのね。テーブルの上に山盛りあるわ。みんなあれを食べるの。

チルチル あたり前さ。外にどうするもんか。

ミチル なぜすぐと食べないんでせう。

チルチル おなががすいてないんだよ。

ミチル 「びつくりして呆れながら」おなががすかないんですつて、まあどうしてでせう。

チルチル だつて、あの人たち食べたい時には、いつだつて食べられるんだもの。

ミチル 「分からない風で」毎日でも。

チルチル ああ、さうだつてさ。

ミチル あの人たちみんな食べてしまふの。少し呉れるでせうか。

チルチル 誰に。

ミチル あたしたちに。

チルチル だつて僕たちを知らないもの。

ミチル 貰ひに行つても。

チルチル そんな事は出来るもんか。

ミチル 何故できないの。

チルチル そんなことはいけないことだもの。

ミチル 「手を拍きながら」まあ、あの人たち何てうれしさうなんでせう。

チルチル 「夢中になつて」どうだい。おもしろさうに笑ふ、笑ふ。

ミチル 小さい子供たち踊ををどつてゐるわ。

チルチル ああ、ああ。僕たちもをどらうよ。「かう言ひながらうれしさうに腰掛臺の上でとんく足拍子をふみはじめました」

ミチル ああ。おもしろかつた。

チルチル やあ、お菓子を貰つてら。もう手を付けてもいゝんだね。やあ食べてら食べてら。

ミチル 小ちやい子供たちもね。二つ、三つ、四つづつ貰つてよ。

チルチル 「すつかり嬉しいのでほせてしまつて」やあいいなあ。やあいいなあ。やあいいなあ。

ミチル 「お菓子をもらつた積りになつて数をかぞへながら」あたし十二もらつたわ。

チルチル それから僕なんかは十二づつ四度貰つた。お前にも少し分けてやらう。

こんなことを言つてゐる時ふと小家の入口の戸をコツ／＼叩く音がしました。

チルチル 「ふと黙つて、氣味わるさうに」何だらう。

ミチル 「ふるへて」とうさんかしら。

こんな風に二人共ぐ／＼して戸を明けずにゐますと、ぎい／＼と云ふ音がして大きなかき金がひとりでに、すうと上がりました。半分戸が開くと、そこへ緑色の着物を着て赤い頭巾をかぶつた小さなお婆あさんが入つて來ました。お婆あさんはせむしで、びつこで、近眼でした。その鼻の先は長く曲つて、臆とすれ／＼になつてゐました。杖にすがつてよ／＼腰を曲げて歩いてゐました。見たばかりでそれは妖女に違ひありませんでした。

妖女 歌をうたふ草か、羽の青い鳥はないかね。

チルチル 内には草はあるけれど、歌はうたはないよ。

ミチル にいさんは鳥は持つてゐてよ。

チルチル でもあれは上げられないや。

妖女 何故ね。

チルチル だつてあれは僕のだもの。

妖女 それはさうだらう。でもその鳥はどこにあるね。

ミチル 「鳥籠を指しながら」あの籠の中に。

妖女 「目がねを掛けて鳥をながめながら」この鳥はだめだよ。ほんとに青くないからね。お前

たちはこれから行つて、わたしの欲しいその鳥を探して來ておくれでないか。

チルチル でもどこにゐるか僕知らないもの。

妖女 それはわたしだつて知りはしない。それだから探して來て貰ひたいのさ。歌をうたふ草のはうは今がすぐ無くてもまあ濟むが、青い鳥はぜひとも欲しいのだから。たいへん煩つてゐるわたしの小さい娘のためにいるのだから。

チルチル その娘さんはどうしたの。

妖女 よくは分からないがね。つまり娘は幸福になりたいのさ。

チルチル へえ。

妖女 お前わたしが誰だか知つておいでかい。

チルチル お隣のベルレンゴのをばさんに少し似てゐるけれど。

妖女 「急におこつた風をして」何が似てゐるものか。ちつとも似た所はありやしないよ。とんでもないことだ。わたしは妖女のペリリウンヌだよ。

チルチル へえ。さう。

妖女 お前たちはすぐ立たなければいけないよ。

チルチル おばあさんも一緒に来てくれるの。

妖女 とても行かれないよ、今朝スープをかけて出て来たから。一時間でもうつちやつて置くともみんな煮えこぼれてしまふんだからね。「かう言つて煙出しと窓とを順々に指さしながら」お前たちはここから出るか。あすここから出るか。それともあすここから。

チルチル 「ここは戸口の方を指さして」あすこがやはりいゝと思ふけれど。

妖女 「ふとまた怒り出して」そんなことが出来るものか。それが厭なくせなのだ。「かう言つて窓を指して」こゝから出ることにしよう。いゝかい。さあ何をぐづくしてゐるのさ。すぐに支度をおしなさい。「かう言はれて子供たちはあわてゝ着物を着換へ始めました」ミチルはわたしが手傳つて上げよう。

チルチル 僕靴がないや。

妖女 そんな事はどうでもいゝさ。わたしはお前に魔法の帽子を上げるから。とうさんやか

あさんは何處にゐるのだね。

チルチル 「右の方の扉を指しながら」あそこで寝てゐるのさ。

妖女 それからおぢいさんや、おばあさんは。

チルチル 死んでしまつたの。

妖女 それから弟や妹たちは。そんなものはなかつたかい。

チルチル ううん、ううん、弟は三人あつたし。

ミチル 妹も四人あつたわ。

妖女 みんなどうしたね。

チルチル やつぱり死んでしまつたんだ。

妖女 みんなに遭ひたいと思はないかい。

チルチル やあ、遭へるの。すぐに、遭はしてね。

妖女 あいにくかくしに入れて來なかつたがね。だがいゝことがあるよ。お前たちが思出の國を通るときに遭へるだらう。青い鳥をさがしに行く途中だよ。三ばんめの四つ角をひだりに曲つたすぐのところだよ。——さつき戸を叩いたとき、お前たちは何を爲てゐたのだえ。

チルチル お菓子の食べつこをして遊んでゐたの。

妖女 お菓子を持つてゐるのかい。何處にあるね。

チルチル お金持の子供の邸にあるのだよ。ほら来て御覽なさい。随分綺麗でせう。「チルチルはかう言つて妖女を窓の方へ引つぱつて行きました」

妖女 「窓の所で」でもお菓子を食べてゐるのはよその子供ぢやないか。

チルチル ええ、でも見るだけは見られるもの。

妖女 にくらしいとは思はないかい。

チルチル どうして。

妖女 お菓子をみんな食べてしまふからさ。あの人たちがお前たちにもお菓子をくれないのは大へん悪いことだと思ふよ。

チルチル そんなことないでせう、あの人たちお金持なんだもの。ねえ、向ふの内随分綺麗でせう。

妖女 なあに、この内よりちつとも綺麗なことはないよ。

チルチル あ、あんなこといつてらあ。この内なんかくらくつて、狭くつて、それにお菓子なんかありやしない。

妖女 なあにちつとも違つたことはないのだよ。ただお前たちの目が見えないだけさ。

チルチル ううん、見えなくつてさ、僕随分いゝ目なんだもの。お寺の時計臺の針が見えるんだぜ。とうさんには見えないけど……

妖女 「急におこり出して」だめだ。見えないといふのに……ちやあお前、わたしはどう見えるえ。わたしはどんな風をしてゐるえ。「チルチルは困つて黙つてゐました」さあ言つてごらん、言へるなら。ほんとに見えるか見てやるから。わたしは綺麗かい、見つともないかい。

「チルチルは段々黙り込んでしまふので、座が白けて來ました」さあ返事をおし。わたしは若いかえ、年を取つてゐるかえ。わたしの頬はばら色をしてゐるかえ、それとも黄いろく萎びてゐるかえ。多分わたしは瘤があるだらう。

チルチル 「なだめるやうな調子で」ううん、ううん、あつてもそんなに大きくはないよ。

妖女 ふん、お前の顔附を見ただけで、誰だつてそれは随分大きな瘤だと思ふだらう。わたしの鼻は曲つてゐるだらう。左の目は潰れてゐるだらう。

チルチル ううん、ううん、僕そんなこと言はないけど……でも誰が潰したの。

妖女 「ますくぢりくして」何、潰れてゐるもんか、恥しらすのろくでなしめ。左の目の方がよつぽどいゝのだ。その方がずつと大きくもあるし、はつきりもしてゐるし、青空のやう

に澄んでもゐるのだ。それから髪の毛だつて、お前には見えるかい。熟れた小麦よりも黄いろいのだ、まるで純金のやうだといふ。それにあんまり澤山あつて、その重みでいくらか首が上がらない位だ。あんまり長くつて一本々々先が見えない位だ。ほら掌の上で見るがよい。「から言つて氣の毒らしい白髪を二本ぬいて出しました」

チルチル ええ、僕いくらか……

妖女 「おこつた聲で」 何、いくらかだと。束にするほどだ、抱へきれないほどだ。山に積むほどだ。金の波のやうだ。世間には何にも見えないと言ふ者がある。だが、お前はそんな悪い盲目共の仲間ではない筈だ。

チルチル うん、うん、隠れたものでなければ、僕何だつて見えるよ。

妖女 だがその外のものも同じやうにすん／＼見て行かなければいけないのだよ。人間は随分妙だね。妖女と云ふものが世の中から死んで行つてからは、もう何にも見えないのだよ。それでゐて少しも變だとは思はないのだよ。爲合せとわたしはその曇つた眼に光をさづけるために入用な品は、いつでもみんな持つて來てゐる。わたしの袋の中から何が出ると思ふ。

チルチル やあ、随分可哀らしい青帽子だなあ。その徽章のところにはびか／＼光つてるのは

何なの。

妖女 これが人間の目に見えるやうにするダイヤモンドだよ。

チルチル へえ。

妖女 さうだよ。それで帽子をかぶつたらね、このダイヤモンドを少し廻すのだよ。まあこんな風に右から左へと廻すんだよ。いいかえ。するとこのダイヤモンドが、誰も知らない脳天の瘤を押す、それから目が見えてくるのだよ。

チルチル けがしやしないかしら。

妖女 どうして／＼、魔法がしかけてあるのだもの。するとすぐ何でも物の心までよく見えてくる。例へば、パンでも、お酒でも、胡椒でも、その中の精が見えてくるのだよ。

チルチル お砂糖の精でも見えて。

妖女 「ふと意地がわるくなつて」 あたり前さ。役にも立たないことを聞かれるのは、わたしや大きらひだよ。砂糖の精だつて、胡椒の精だつて同じことぢやないか。さあ、お前たちが青い鳥をさがしに行くについて、役に立つだけのものはみんな上げてしまつたよ。それをはめると體の見えなくなる指輪だの、それにのると空をとべる毛氈だの、もつといろ／＼役に立つものもあるんだけど、あいにくしまつておいた戸棚の鍵を無くしてしまつたか

らね。さうく、あぶなく忘れるところだつた。「かう言ひながら、ダイヤモンドを指して」いかえ。これをかう持つたらね、すこし廻すと過去の事が見えるし、また少し廻すと此度は未來の事が見えるのだよ。奇妙でもあるし、實用向でもあるし、この通りちつとも音がしないのだから。

チルチル　とうさんに取り上げられやしないかしら。

妖女　とうさんには見えやしないよ。お前の頭の上にある間は誰にもそれは見えやしないよ。ためして見るといい。「かう言つて緑色の小帽子をチルチルの頭の上にせました」さあ、ダイヤモンドを廻して御覽。一度廻して、それから……

チルチルが一度ダイヤモンドを廻すが早い、そこらのものが何もかも急にびつくりするほど變つてしまひました。妖女のおばあさんはいへん美しい王女に變りました。燧石でできた小家の壁が明るくなつて、サファイヤ(青玉)のやうに青くなり、透き徹るやうになつて、貴い寶石のやうにきら／＼光りました。見すばらしい家具類が生々とまぶしいやうに輝き出しました。松板のテーブルは大理石でこしらへたもののやうに重々しい高貴な風に變りました。柱時計の盤が瞬きをして、深切さうに微笑みました。すると振子のゆすれてゐた扉が開いて、中から少女の姿をした「時間」が大勢とび出しました。みんな手とりあつておもしろさうに笑ひながら、うつとりするやうな音楽につれて舞踏をはじめました。チルチルがびつくりして「時間」の少女たちの方を指しながら、叫び聲を立てたの

も無理はありませんでした。

チルチル　この可哀らしい娘さんたちは誰です。

妖女　こはがることはないよ。あれはお前の一生の「時間」だよ。みんな一時でも自由になつて、目が見えるやうになつたので、うれしがつてゐるのだよ。

チルチル　それからまあ壁がどうしてあんなに明るくなつたんです。あれは砂糖かしら、寶石かしら。

妖女　どんな石だつて皆同じことだよ。皆同じやうに寶石なのだよ。けれど人間はその中のごくわづかしが寶石ではないと思つてゐるのだよ。

かう言つてゐる間に魔法の景色がだん／＼續いて追々に出来上がつて來ました。「四斤パン」の精はパンの皮の栗色をした肉シャツを着た小男の姿で大あわてにあわて、體中粉だらけのままお鍋の中から這ひ出して、テーブルのまはりをちよこまかしました。すると「火」が黄いろと朱の交つた肉捕様の姿で籠の中からとび出して來て、うしろから「パン」をつかまへました。それからしきりと腹がはちけるほど笑ひながら、「パン」を追ひまはしてゐました。

チルチル　この見つともない小男たちは誰です。

妖女　なあにあれは何でもない。「パン」の精だよ。眞實の世の中になつたものだから、さつそく押しこまれてゐたお鍋の中からとび出して來たのだよ。

チルチル それからあのいやな臭ひのする眞赤な大男は。

妖女 しいつ。大きな聲をおしでないよ。あれは「火」で、おこりつばい奴だからね。

こんな話の間にも魔法はだん／＼進んで行きました。戸棚の前に丸くなって寝てゐた犬と猫は同時に大きな叫び聲を立てると、その揚板の下にふと姿をかくしましたが、やがてそこから二人の人間が顔を出しました。その一人はブルドックの顔で、もう一人は牝猫の顔でした。(ブルドックの顔をした小さな男はこれから「犬」と呼ぶことにしますが) いきなりチルチルの方へかけ出して行つて、亂暴に抱きついたり、うるさく舌で嘗めずつたり、鼻面をこすりついたり、すつかりチルチルを閉口させてしまひました。するともう一人牝猫の顔をした小さな女は(これもたゞ「猫」と呼ぶことにしますが)まづ悠々と髪を梳いたり、手水を使つたり、鬘の手入れをしたりしてから、のそ／＼とミチルの方へ出かけて行きました。

犬

「むちやくちやに吠えたり、何と云ふことなしにぶつかり歩いたりして」坊つちやん、坊つちやん、今日は、ごきげんよう。ねえ、坊つちやん、とう／＼とう／＼わたしたちはお話するところができるんです。わたしは随分澤山お話したいことがあるんです。一生けんめい吠えたり、尻尾をふつたりしても、あなたは分かつて下さらなかつたんです。それが今、やつとできるんです。あうれしい、あうれしい。わたしは坊つちやん大好きです。何かびつくりするやうな藝をして見ませうか。おちん／＼ませうか。手で歩いてお目にか

けませうか。綱わたりの舞踏をしてお目にかけてませうか。

チルチル 「妖女に」 犬の頭をしたこの紳士は誰。

妖女 分からないかい。お前が放してやつたチローの精だよ。

猫 「ミチルの前へ出て、片手を差出し、慎んで恭しく」 お嬢さん。今日は。大そう御機嫌でございますこと。

ミチル 御機嫌よう、奥さん。「妖女に」この方はどなた。

妖女 おや／＼お前も分からないのかい。チレットの精が御挨拶を申上げてゐるのではないか。キスしておやり。

犬 「猫をつきのけながら」 わたしもキスして下さい。坊つちやんにはキスして來たんです。お嬢さんにもキスして貰ひます。世界中のものにキスしてもらひます。ああ、實に素敵だ。こんな愉快なことはありません。チレットの奴をおどかしてやらうや。ワウ、ワウ、ワウ。

猫 おや、あなたはどなたでしたつけねえ。

妖女 「杖で「犬」を脅しながら」 これ、静かにおし。でないともたまたもと通し、永久口のきけないやうにしてしまふから。

この間も魔法は續きました。糸車は隅の方で気がちがつたやうに廻りだして、きら／＼する光の糸

を紡ぎはじめました。此方の隅では水道の呑口が大へん高い聲で歌をうたひはじめると、やがて光のある泉にかはつて、眞珠やエメラルド（碧玉）の流を瀑布のやうに流しの上にふき出しました。するとその中から若い女の姿をした水の精が、濡れしをたれた髪をふり亂し、涙を目にためて出て來ましたが、「火」を見るとすぐ喧嘩をはじめました。

チルチル あの水にぬれた娘さんは、誰なの。

妖女 こはがることはない。あれは呑口から出て來た「水」だよ。

この時牛乳の壺がひつくりかへつて、ティーブルから轉がり落ちると、床の上で粉々にこはれました。その乳のこぼれてひろがつた中から一つの白い、恥かしさうな様子の大きな姿がむく／＼と出て、何を見てもこはがつてゐるやうに見えました。

チルチル あの薄い肌着でこはがつてゐる女の人は。

妖女 「牛乳」だよ。壺をこはしてしまつたのだよ。

戸棚の前にゐた砂糖の塔が段々脊が高くなり、體がふくれ出して、上包みの紙を破ると、中からべだ／＼と半分白く、半分青いだんだらの麻の上つ張りを着て厭味な偽善者らしい様子の男がとび出しました。そして唇に聖人ぶつた微笑をうかべながらミチルの方へ歩いて行きました。

ミチル 「氣味わるがつて」この人は何しに來たんでせう。

妖女 何だね、お「砂糖」の精ぢやないか。

ミチル 「安心して」あの人有平糖持つてゐるでせうか。

妖女 かくしに一杯持つてゐるよ。それから指は一本々々……。

この時ランプがティーブルから落ちました。その途端中の炎がとび上がったと思ふと、いひやうもなく美しい光の處女に變りました。處女は長い透き徹るやうな、目のくらむやうなヴェールをかぶつたまま、うつとり立つたなり動きませんでした。

チルチル やあ女王だ。

ミチル 聖母だわ。

妖女 さうではない。「光」だよ。

この時棚の上の鍋がオランダ獨樂のやうに廻り出しました。衣類戸棚の扉がかた／＼鳴つて「月の色」や「日の色」の織物が、五彩まばゆく、繰り出されました。そして同時にこれも同じやうにきらきらしたぼろや、つぎ切れと一緒になつて、屋根裏の梯子から、落ちて來ました。するとその時右手の扉を三度までかなりひどく叩く音がしました。

チルチル 「おどろいて」とうさんだ、聞えたんだ。

妖女 ダイヤモンドをお廻し。左から右に。「チルチルは大急ぎでダイヤモンドを廻しました」そんなに早く廻すんぢやない。しまつた。間に合はない。あまりせか／＼廻しすぎた。みんな

なもとの場所へ歸るひまがなくなつた。とんでもないことになつた。

三〇

かう云ふ時妖女はまたもとのおばあさんになり、小家の壁には光がなくなりました。「時間」は柱時計の中に戻り、糸車はせはしく廻ることをやめました。けれどもその外は大抵、大あわてにあわて、めちやく／＼な騒ぎになり、「火」は氣ちがひのやうに部屋中驅けて煙出しの穴を探しはり、「四斤パン」の一つは鍋が一杯でもぐり込むことが出来ないので、泣き聲になり、こはがつて唸りこゑを立てました。

妖女 どうしたといふのだえ。

パン 「涙をぼろ／＼こぼしながら」 お鍋の中にもう入る所がないんです。

妖女 「鍋をのぞきながら」 なあにさ、あるとも、あるとも。「かう言ひながら外の「パン」を押し込むと、皆やつともとの場所に還りました」 さあ／＼早く、みんな行儀よく。

扉を叩く音がまたしました。

パン 「あわて、鍋の中に入らうともがきながら」 入れません。わたしは食べられてしまひます。

犬 「チルチルのまはりをとび廻りながら」 坊つちゃん、わたしまだこゝにゐます。お話も出来ます。まだ抱きつくこともできます。まだ、まだ、まだ、……

妖女 おや。お前もかえ、まだゐるのかえ。

犬 占めた。口の利けないもにかへるには、もう間に合はない。揚板は、早くしまります

ぎた。

猫 わたしもさうだよ。これからどうなるだらう。何かこはいことがあるでせうか。

妖女 いやはや、わたしはほんとのことを言はねばなるまい。この二人の子供たちのお供をして行くものは、みんな旅がはてると死ななければならぬよ。

猫 お供をしないものは。

妖女 しばらく生きてゐられるよ。

猫 「犬に」 さあ、揚板の下に歸つて行かう。

犬 だめだ、だめだ、おれはいやだ、おれは坊つちゃんと一緒に行く。いつまでも坊つちゃんとお話がしたいんだ。

猫 ばか。

扉口を叩く音がまだ聞えました。

パン 「熱い涙を流しながら」 わたしも旅がすむと、死ぬのはいやだ。もう一度もとのお鍋の中に歸りたいなあ。

犬 「何もしないでたゞ氣ちがひのやうに部屋を駆けまはつて、おこつてぶつく／＼いひながら」 どうも煙出しが見附からん。

水 「呑口の中へ入らうとして、入れないので」わたしも呑口の中に入られないわ。

砂糖 「包み紙のまはりをとびまはりながら」おれは包み紙を破つてしまつた。

乳 「ぐづく」と齒切れわるく」誰かがわたしの小さい壺をこはしたのよ。

妖女 やれ／＼何といふ馬鹿どもだらう。馬鹿な上に臆病なんだもの。ではお前たちは子供たちのお供をして青い鳥を探しに行くよりか、むさくるしい箱の中や煙出しや、揚板や呑口の中でぐづく生きてゐる方がいゝのだらう。

一同 「犬」と「光」との外は」さうです。さうです。さあ今すぐに歸して下さい。呑口を下さい。お鍋に入れて下さい。煙出しだ。揚板です。

妖女 「この時までこはれたランプのかけらを、ちつと夢みるやうな目で見てゐた「光」に向ひ」それから

「光」お前さんはどうするえ。

光 わたしは子供衆と一緒に行きたいと思ひますの。

犬 「うれしくなつて吠えながら」わたしもです。わたしもです。

妖女 それでよろしい。それでもう今更もとへ還らうといつても、誰も、もう還れなくなつたのだよ。もう外にどうすることもできない。みんなわたしたちについて旅に出なければならぬ。だが「火」や、お前は誰の傍へも寄つてはいけない。「犬」や、お前は「猫」をいぢ

めてはなりません。それから「水」や、お前も小じつかりして、さうだらしなくどこへでも流れ出してはいけないよ。

右手の扉をばげしく叩く音がまた聞えました。

チルチル 「耳を立てながら」またとうさんだ。此度は起きたんだ。歩いてくる音がする。

妖女 わたしたちは窓から出ることにしよう。お前たちはみんな一度わたしの内までおいで、動物も、物の影もそれ／＼いゝやうに旅の支度をさせてあげるから。「パン」に向つて」お前は青い鳥を入れる籠を持つておいで。お前に預けることにするから。早くおい。早くおい。もう時間がないから。

窓がふと扉のやうに大きくひろがりました。みんながそこから出て行つてしまふと、扉はもとのままの形で何ごともなかつたやうに閉ぢてしまひました。部屋の中はまた、暗くなつて、二つの子供の寢臺は暗の中に消えました。右手の扉が細目に開いて、その隙から、とうさんのチルと、かあさんのチルの頭が現れました。

とうさんのチル 何でもないよ。蟋蟀が泣いてゐるだけだ。

かあさんのチル 子供たちはゐますか。

とうさんのチル ああ。よく寝てゐるよ。

かあさんのチル 寝息が聞えますね。

扉がまた閉りました。

一 幕 一

三四

— 第二幕 —

第二景 妖女の御殿

妖女ベリリウソムの御殿の表車寄のきらびやかな建物です。てらくする大理石の圓柱の頭は金と銀で飾られてゐます。其の外には階段だの、柱廊だの、欄干など。

奥の右手の口から贅澤に着飾つた「猫」と「砂糖」と「火」とが出て來ました。その出て來た部屋からは火がばつと外に差しました。そこは妖女の衣裳部屋なのです。「猫」は黒い絹の肉襦袢の上に軽い紗をつけてゐます。「砂糖」は白と青とのだんだらの絹の着物、それから「火」はいろいろの色の毛の頭飾、金裏緋色の長マントを着てゐました。一同は廣間を通つて舞臺の前まで歩いて來ました。「猫」は先だちになつて右手の柱廊の下へ皆を並ばせました。

猫 どうぞこちらへ。わたしはこの御殿の案内は隅から隅まで知つてゐます。これはもと

「青髯」(譯者註——青髯といふのはフランスのシャルル・ペロール(一六二八—一七〇三)の書いた童話集中の有名な話で、青い髯を生やした鬼で、金持のくせに非常に残忍な大男が幾人も若い妻をもつては飽きると殺してしまつた。最後に妻になつたアンといふ女が「青髯」の留守の間に禁制を破つて、秘密の室の鍵を開けて「青髯」の殺した女達の死骸を發見した。そこへ「青髯」が歸つて來て、アンも危く殺されようとする所へ女の兄弟達が駆けつけて「青髯」を刺殺し、その莫大な財産がその手にのこつた。「青髯」の

「財蔵」といふの)から妖女のペリリウンヌに傳はつた財産なんですよ、子供たちや「光」がちやうど妖女の小娘の所へ見舞に行つてゐる間、わたしたちのため最後にのこされた自由の時間を、どうか利用したいと思ひます。それで皆さんにお集りを願つて、わたしどもの現在の位置について、腹藏のない御意見を交換したいと思ふのでございます。皆さん、お揃ひですか。

砂糖 「犬」が妖女の衣裳部屋から出て来たやうだ。

火 全體あの男は何を着て来たのだい。

猫 あれはサンドリヨン(譯者註—サンドリヨンといふのは、やはりペロールの童話集の中の話で、イギリスではシンデレラがつてゐて、五百以上も類話のあるといはれる名高い童話の女主人公である。サンドリヨンといふのは、酒説とか燃えさしとかいふ意味で、繼母と腹ちがひの妹たちにいぢめられて塵所の灰の香ばかりさせられてゐた娘が、妖女の助けで王様の舞踏會に出て、王子に見初められて、出世することを作つてある。その舞踏會に行つた時には、南瓜の馬車を鼠のお)の馬車の馬丁の一人馬に引かして、サンドリヨンが乗つて行く。その馬車のことをサンドリヨンの馬車といふのである。がむかし着た法被を着てゐるんだよ。あいつにちやうど似合つた着物だ。あいつは下郎根性の男だからね。だが欄干のかけに隠れませう。わたしはどうもあいつに信用がおけない。これからわたしの云ふことを、あいつには聞かれない方がいゝだらうから。

砂糖 もう間に合はない。あの男は我々を見附けた。ほら、おまけに「水」も衣裳部屋から出て来た。いやあどうもすばらしく綺麗だな。

「犬」と「水」とが仲間に入つて来ました。

犬 「跳ね廻り乍ら」どうだ、どうだ、綺麗だらう。まあ、このレースと、この刺繡かひじりを見てくれ。ほんたうの金だ、嘘ぢやあないんだ。

猫 「水」に」これは「驢馬の皮」(譯者註—「驢馬の皮」も「ペ」)の中にある「時の色」の衣裳ですよ。何だか見おぼえがあるやうだから。

水 ええ、これがわたしに一番よく似合ふんですよ。

火 「小聲で」ふん、「水」の奴雨傘がないんだ。

水 何ですつて。

火 何でもないよ、何でもないよ。

水 わたしました、いつか見た大きな鼻赤男の話をしてゐるのかと思つたよ。

猫 まあ〜喧嘩はしばらくお預りにませう。差當り大事な用がありますから。そこで後は「パン」だが、何處へ行つたでせうね。

犬 あの男は衣裳の見立で際限なしに憂身をやつしてゐるんだ。

火 ふん、あの阿呆面をして、腹つぶくれのあの男が、やり切れないな。

犬 とう〜あいつトルコ服がお氣に召して、寶石で飾つたり、短劍を吊したり、頭巾をか

ぶつたりさ。

猫 ほうやつて来ました。「青髯」の「一等い」衣裳を着ましたよ。

「パン」が今の話にあつた衣裳を着て出て来ました。絹衣裳が大きなお腹の上ではあきれさうになつてゐます。片手に帯革で吊した短剣の柄を握り、片手には青い鳥を入れる筈の鳥籠を抱へてゐます。

パン 「高慢らしく、よたくと歩きながら」 どうだ、この風は。

犬 「パン」のまはりを跳ね廻りながら「立派だねえ、阿呆だねえ、立派だねえ。立派だねえ。」

猫 「パンに」子供達は支度が出来たかい。

パン あゝ、チルチル君は、「拇指さん」(拇指さん—これもベロールの童話集にある名高い樵の七人あつた末子で、拇指の大きさが一寸法師のくせに習性が遅く、度々兄達の難儀を救ふ、その姿に描かれた服装は赤の上着に青ズボンである。)の赤い上着を着て、白靴下に青ズボン、ミチルさんはグレーテル

(グレーテル—これはドイツの童話集で名高い樵の子供のヘンゼルとグレーテル)の着物でサンドリヨンの上靴

(サンドリヨンの上靴—前に書いたサンドリヨンの舞踏會に穿いて行くガラスの上靴である。舞踏會から家へに)をはい

(グレイテルが森の中で道に迷つて魔法つかひの女に逢ふ話の中の妹の名がグレイテルである。)をはい

(上げて歸る途中あわて、この上靴を片足階段の上のこして行つたのが手が、もになつて王子との縁が結ばれる。)をはい

猫 どうして。

パン 妖女は、あの女は生地のままでももう立派すぎるほど立派だといつて、まるで着物を着せたがらないのだ。そこで我輩は重要にして且最も尊敬すべき元素たる我々の權威の

名の下に抗議を申込んでやつたのさ。そして最後に、かくの如き條件の下に在つては、我輩は彼女の同行者たることを拒むものであると宣言してやつた。

火 なにあいつにはランプの笠でも買つてやりやよかつたんだ。

猫 すると妖女は何て答へたの。

パン 彼奴は杖でわしの頭と腹を叩きをつた。

猫 それからどうしたえ。

パン わしは早速降参した。だがとう／＼「光」は「驢馬の皮」の寶物庫の箱の底から「月の色」の衣裳を出して着ることになつたよ。

猫 さあ、そこらでおしやべりは止めて下さい。時間が迫りました。事件は我々の未來に關することです。既にお聞きの如く、妖女が先頃もさういつた通り此度の旅行の終る時は即ち我々の生命も終る時だと云ふのでせう。それ故その期間を出来るだけ長く引きのばすことは我々の爲事だと思ふんです。それにかう云ふこともあります、我々は自分たちの種族の將來や、我々の子供たちの運命と云ふことも考へてやらなければなりません。

パン ヒヤ、ヒヤ、「猫」の云ふ通りだ。

猫 まあ聽いて下さい。こゝに御列席の皆さんは、動物も、物も、元素も、皆夫々精靈をも

つておいですが、人間はまだそれを知らないのです。おかげでまだしも昔からの自由の名残だけでも保存してゐるのです。ところでもし人間が一度青い鳥を探し出して宇宙一切の秘密を知つてしまつたならば、人間はすべてを知り、すべての物の奥底まで見きはめて、我々は一切その心のまゝにされてしまふでせう。これはわたしが古い友達の「夜」から聞いたことなので、この女は昔から此の世界の不思議を見られないやうに、見張番をしてゐるのでございます。それ故どうしても青い鳥の見附からぬやう、一生けんめい邪魔をすることは大切な爲事で、そのためにはあの二人の子供たちの一命にかゝはることが出来ても、それを厭つてはゐられまいと考へます。

夫 「憤慨して」 何を言やがる。何だと。もう一度言つて見ろ。聞き違ひだかどうだか試してやるから。

パン 静肅に、あなたはまだ發言を許されません。我輩は此の會議の議長だ。

火 誰が議長にしたんだ。

水 お黙り、お前が出る幕ではない。

火 おれは出たい幕にはいつでも出る。貴様などに世話は焼かれん。

砂糖 「中に入つて」 失禮ですが、まあ喧嘩は止さうぢやありませんか。今は大事な場合です

から、我々は何よりもまづ、それにはいかなる手段を取る可きかを一同で定めなければなりません。

パン 我輩も全然「砂糖」と「猫」に同意する。

犬 馬鹿らしいや。人間と云ふものがある。それがすべてだ。我々は人間に服従し、人間の言ふ通りにする義務がある。それがたつた一つの眞實だ。おれは人間以外には誰も認めない。人間萬歳だ。生きるも死ぬも人間のためだ。人間は神様だ。

パン 我輩は全く「犬」に賛成である。

猫 「犬」に」でも理由だけは言つて下さい。

犬 理由なんかない。おれは人間が好きだ。それだけのことだ。お前たちがもし人間に反抗すれば、おれは第一にそいつの喉首をしめ上げて、それから行つて人間に話をするつもりだ。砂糖 「甘たるい聲で仲に入つて」 え、失禮ですが、むづかしい議論はまあ止さうぢやありませんか。或點から見ればあなたがお二人とも正しい。どちらにも理窟は立つのですから。

パン 我輩は全く「砂糖」に賛成だ。

猫 我々はすべて、「水」でも、「火」でも、そんなこといふ「パン」や「犬」でも、すべて言語道

断な暴政の犠牲ではありませんか。あの暴君のまだ来ない以前、われ／＼が地上で自由に遊び廻つた時代のことを、あなた方はおぼえてゐますか。「火」と「水」とだけが世界の主人でありました。それが今はどんな有様です。まして我々力の強かつた野の獣たちのあはれな子孫に至つてはどうです。あつお氣をつけなさい。何でもない風してゐて下さい。妖女と「光」がやつて来ました。「光」は人間の味方をしてゐます。あの女が一ばん悪い敵ですよ。そら来た。

右手に妖女、「光」、續いてチルチルとミチルの兄妹が出て来ました。

妖女 おや何だね。お前達は隅つこにかくれて何をしておいでだえ。謀反をたくらんでゐるのではないかえ。もう出かける時刻だよ。「光」を頭かしらにたのむことにしたからね。お前たちはわたしだと思つて、「光」の云ふことをきかなければいけないよ。そのつもりで魔法の杖を預けてある。子供たちは今晚は亡くなつたおぢいさんとおばあさんを訪ねに行くのだから、其の間お前たちは遠慮して残つてゐた方がいい。晩は久しぶりで子供たちがむかしの家の人たちのふところに抱かれるのだよ。其の間にお前たちはゆつくり明日の旅の支度をするがいい。何しろ長い旅のことだから。さあ、みんな行つて、てん／＼自分たちの爲事にかゝるがよいよ。

猫 「偽善者らしく」え、え、只今もさうするやうに皆さんに申してゐた所なんでございます。わたくし皆さんに、本氣になつて勇ましく、お互ひの義務を果さうぢやないかといつて勵ましたのでございますが、どうも困つたことには、「犬」が邪魔ばかりいたしましてねえ。

犬 何をいやがる。やい待つてろ。

「犬」が「猫」とびか／＼としますと、チルチルはその様子を見て威しつけて止めさせました。

チルチル よせチロー。氣をつける。そんなことするときかないぞ。

犬 坊つちゃん、あなた御存じがないからですよ、あいつは第一……

チルチル 「威しつけないがら」 止せつたら。

妖女 まあ／＼それでよろしい。「パン」は今晚だけ、籠をチルチルに預けるがよい。青い鳥は事によると過去の國のおぢいさんたちの所へ行つてゐるかも知れないから。ともかくどんな機會でも見のがしてはならないから。これ「パン」や鳥籠を。

パン 「重々しく」妖女の奥さん、失禮ですがしばらく。「辯士が演説をするやうに」我輩は御列席諸君の御證認を求めまして、こゝに委託せられました銀の鳥籠をば……

妖女 「中途で逃つて」もういよ。演説には及ばない。子供たちはこゝから出してやつて、わたしたちはあそこから行くことにしよう。

チルチル 「心配さうに」 僕たち二人つきりで行くの。

ミチル おなかが空いたわ。

チルチル 僕も空いた。

妖女 「パンに」 お前そのトルコ服の前をあげておなかを一片切つておやり。

「パン」は上着をあげ、短剣をぬいて、大きな腹を二片切つて子供にやりました。

砂糖 「子供たちの傍へ来て」 わたしも有平糖を折つて上げませう。「かう言つて左の手の五本指を一本一本折つて子供たちにやりました」

ミチル あの人どうするの。みんな指を折つてしまつて。

砂糖 「愛想よく」 さあ召しあがれ。うまいですよ。本當の有平ですからね。

ミチル 「指を一本しやぶりながら」 まあ、うまいわ。あなたまだ澤山あるの。

砂糖 「おとなしく」 へいへい、いくらでも御用の節は差上げますよ。

ミチル 指を折つたら痛いせう。

砂糖 いゝえ少しも痛みません。それに折ると却つて大變よろしいのですよ。折るすぐ後から出来ますから、おかげでいつでも新しい綺麗な指をしてられるのでございます。

妖女 もうお止し、子供たち、あんまり有平糖を食べすぎても毒だよ。今晚はおちいさんとお

ばあさんと一緒に御飯をたべることを忘れてはいけないよ。

チルチル おちいさんたちこゝにゐるんですか。

妖女 あゝ、すぐに逢へるよ。

チルチル でもおちいさんたち死んでしまつてゐるのに、どうして逢へるの。

妖女 どうして死んでゐるのさ。おちいさんもおばあさんも、お前たちの思出の中で立派に生きてゐるぢやないか。人間は何にも知らないから、そのわけさへわからない。爲合せとお前たちはダイヤモンドのおかげで、死んでも思ひ出される人は、死なない前と同じやうにやはり幸福にくらしてゐることが分かるのだよ。

チルチル 「光」は一緒に来てくれるの。

光 いゝえ、今晚は家内の方だけで行く方がほんたうですもの。わたしは此處で待つてゐて上げますよ。お客に呼ばれないのに出て行くことは失禮に當りますよ。

チルチル どつちから行くんだらう。

妖女 そこをすぐ出ればいゝ。もう思出の國の入口に来てゐるのだから。お前はそこでダイヤモンドを廻せば、一本の大きな木が目の前にあらはれて、其の上に札がかゝつてゐる。それを見れば思出の國へ来たことが分かる。だが忘れずに、九時十五分前までには歸つて

おいでよ。それはぜひ大切なことなんだからねえ。氣をつけて時間をまちがへない様におし。少しでもおくれると、みんな駄目になつてしまふのだから。では行つてお出で、「猫」「犬」「光」等呼んで」こゝから出て行くのだ。子供たちはあちらから。

妖女は「光」や動物たちをつれて右手から出て行きました。子供たちは左手から出て行きました。

幕

第三景 思出の國

濃い霧が一面に下りてゐます。其の中から大きな櫛の幹が、ずつと前方右手寄りに立つてゐるのが見えます。樹の上には札が打ちつけてありました。乳色の曇つた光がどことはなしにぼうつと漂つてゐます。

チルチルとミチルの兄妹は櫛の樹の下に立つてゐます。

チルチル こゝに樹があらあ。

ミチル 札もあるわ。

チルチル 讀めないなあ。お待ち、この根の上につて見るから。わかつた、「思出の國」と書いてある。

ミチル こゝからはひるの。

チルチル うん、矢が出てゐるもの。

ミチル あらさう。おぢいさんとおばあさんどこにゐて。

チルチル 霧にかくれてゐるんだよ。今にわかるよ。

ミチル まだ何にも見えないわ。自分の足も手も見えないわ。「べそをかきながら」あたし冷たいわ。もう行くのがいやになつたわ。お内へかへりませうよ。

チルチル よせ、いつも泣く奴があるもんか。「水」の奴みたいに。恥かしいと思はないかい。大きな赤ちやんだなあ。御覧、霧がだんく／＼上がつて来たから。これで向ふが見えるだらう。

本當に霧がだんく／＼に動き出しました。少しづつ薄くなり明るくなり散つて蒸發しました。やがてだんく／＼にはつきりしてくる光の中から、緑の葉で葺いた丸屋根の下に蔓の一杯からんだ楽しさうな百姓の小家が見えて来ました。「窓も扉も開け放したまゝ」でした。庇の下には蜜蜂の巣があり、窓の敷居の上には花の鉢が置いてあり、轆を入れた鳥籠がつるしてありました。扉口の傍に長い腰掛が置いてあつて、其の上に年をとつた百姓の夫妻が腰をかけたまゝよく寝入つてゐました。これがチルチル兄妹のおちいさんとおばあさんでした。

チルチル 「ふとおちいさんたちを見附けて」 あゝおちいさんだ、おばあさんだ。

ミチル 「手を叩きながら」 えゝ、えゝ、さうだわ、さうだわ。

チルチル 「少しまだ附におちない顔をして」 お待ち。おちいさんたち一體動けるのかしら。樹のかげにかくれて見てやらう。

いふ中におばあさんはばちんと眼を開きました。首を上げて、のびをして、ためいきを一つすると、お

ちいさんの方を見ました。おちいさんもそろ／＼眼がさめたやうでした。

おばあさんのチル 今日あたり、まだ生きてゐる孫たちが逢ひに来てくれるやうな気がしますね。

おちいさんのチル きつと孫たちはわたしたちのことを思ひ出してくれたのだ。何だかそんな気がするし、足がしく／＼痛むから。

おばあさん きつともうすぐ傍に来てゐるに違ひない。目の中で嬉しい涙が踊ををどつてゐますよ。

おちいさん うんにや、どうしてまだなか／＼遠いやうだ。わしはまだなか／＼元氣がつかない。

おばあさん いゝえ、たしかに来てゐます。わたしはもうこの通りしつかりしましたよ。

チルチルとミチル 「この時樹のかけから駈出して来て」僕たちこゝにゐるよ。あたしたちこゝにゐてよ。おちいさん。おばあさん。僕たちだよ。あたしたちだよ。

おちいさん ほら、御覧、わしが言つた通りだ。今日は孫たちがきつと来ると言つたから。

おばあさん まあチルチル。まあミチル。お前だね。あの子ですよ。あの子たちですよ。「迎へに駈けて行かうとしましたが」駈けられない。またリニューマチがおこつたのだよ。

おぢいさん 「同じやうにびつこをひきながら」わしも駄目だ、何しろ櫛の大木から落ちて足をくちいてから、いつも木の義足をはめてゐるのだから。

おぢいさん、おばあさんと子供たちは狂氣のやうに抱き合ひました。

おばあさん チルチル、お前まあ随分大きく丈夫さうにおなりだねえ。

おぢいさん 「ミチルの髪をなでながら」それからミチルも、御覽この子を、いい髪の毛ぢやないか。可愛い目附ぢやないか。それにいい香ひがするな。

おばあさん もう一度わたしにキスをしておくれ。さあ膝の上におのり。

おぢいさん これ／＼わたしにはどうしたのたえ。

おばあさん いゝえ、いゝえ、まあ先へわたしの方へおいで。とうさんかあさんとはどうおしだえ。

チルチル 達者だよ、おばあさん。僕たち出て来た時にはよく眠つてゐたよ。

おばあさん 「子供達をながめたり、頬をこすりつけたりして」まあよくねえ。小さつぱりと綺麗にしてゐるねえ。かあさんがお洗濯してくれるのかえ。靴下にも孔一つあいてゐないしねえ。前にはわたしがよく繕つてあげたものだよ、覚えておいでかえ。どうして、もつとたびたび来てくれないのさ。来てくれるとほんたうにうれしいんだよ。もう幾月も幾月もみんなわ

たしたちを忘れてしまつてゐたんだよ。だから誰にも遭へないぢやないか。

チルチル 来た／＼つても来られないのなもの、おばあさん。今日は妖女のおばあさんが、よこしてくれたんです。

おばあさん いゝえ、わたしたちはいつでもこゝにちゃんとして、いつでも生きてゐる人たちのちよい／＼遭ひに来てくれるのを待つてゐるのだよ。だがほんのたまにしか来ないのなもの。此の前お前たちの来た時はと、さうさね。あれはいつだつたつけね。さう／＼十一月一日の萬聖節だつた。お寺の鐘が鳴つてゐたから。

チルチル 萬聖節ですつて。嘘だあ、僕たちあの日は大變風を引いて、どこへも出やしなかつたもの。

おばあさん さうかい、でもお前たち、其の日はわたしたちのことを思ひ出したらう。

チルチル ああ。

おばあさん ねえそら、お前たちが思ひ出してくれれば、いつでもわたしたちは目がさめて、またおまへたちに逢へるのだよ。

チルチル 何だ、それだけでいゝのか。

おばあさん でもまあお前その位なことは知つておいでだらう。

チルチル ううん、知らないよ。

おばあさん 「おぢいさんに」まあおどろきますねえ、あちらではみんなまだ知らないんです。さ。ぢやあみんな何にも分からないのかしら。

おぢいさん わたしたちのゐた時分と變りはないな。生きてゐる人間によその世界のことを話させると随分馬鹿なものだからなあ。

チルチル おぢいさんたちはいつでも眠つてゐるの。

おぢいさん うん、うん、よく眠るよ。眠つてゐる中に生きてゐる人間がわたしたちのことを考へてくれると、すぐ目がさめる。いやもう、人間の世の中をおしまひにしてしまつてからゆつくり眠るのはいいものだよ。だが時々目をさますのも楽しみだよ。

チルチル ぢやあ、おぢいさんたちほんとは死んだんぢやないの。

おぢいさん 「びつくりして」 お前何をいふのだえ。此の子は何をいつてゐるのだなあ。どうもわたしたちにもうわからなくなつてゐる言葉を使ふのだ。それは新らしい言葉かな。新發明かな。

チルチル 「死ぬ」つて言葉が。

おぢいさん さうだよ。その言葉だよ。それはなんのことだな。

チルチル だつて、人間がもう生きてゐなくなることなんでせう。

おぢいさん 馬鹿だなあ、あちらの人間は。

チルチル こゝはいい所。

おぢいさん あゝ、悪くはないよ、悪くはないよ。たゞみんながお祈をしてくれるともつといいのだが。

チルチル でもとうさんがもうお祈をしないでもいいと言つたよ。

おぢいさん さうかな、さうかな。お祈をするので思ひ出すのだがなあ。

おばあさん さうだよ、さうだよ。何もかもこゝは都合がいいのだよ。ただちよいとくお前達が来てくれさへすればいいのだよ。チルチル、お前覚えておいでかえ、一ばんおしまひにわたしがおいしい林檎のタルトを焼いて上げたのを。お前はあんまり喰べすぎて煩つたつけねえ。

チルチル でも僕去年から林檎のタルトはちつともたべないよ。今年は林檎がとれないし。

おばあさん 馬鹿をお言ひでない、此處にはいつでももあるよ。

チルチル 随分ちがつてゐるんだなあ。

おばあさん え、ちがつてゐるつて。どうしてさ。何もちがつてゐやしないぢやないか。こ

の通りキスして上げることも出来るし。

チルチル 「おばあさんとおぢいさんの顔を順番に見て」あゝ、おぢいさん變らないねえ、ちつとも變つてはゐないよ。それからおばあさんもちつとも變つてゐないや。でも先よりかすつと綺麗だよ。

おぢいさん さうだらう、それは工合がいゝのだからな。わたしたちはもう年をとらなくなつたのだ。だがお前は大きくなつたなあ。どうしてなかくしつかりしてゐるわい。ごらん、あすこの扉の上にこの前つけた印しがある。あれは萬聖節の時に測つたのだ。どれ／＼眞直に立つて御覽。「チルチルが扉の前に立ちました」指四本だけ。これはえらい。「ミチルも同じやうに扉の前に立ちました」それからミチルはと、どうしてこれは四本半だけ高くなつてゐる。いやはや、草がのびるやうなものだ。どこまで大きくなるつもりだ。

チルチル 「そこらを見廻してうれしきうに」ほんたうに何にも變つたものはないんだ。何もかもむかしのまゝなんだ。たゞみんな先より綺麗になつてゐるね。あゝ大きな針の時計があらあ、あの針の尖を僕折つたつけなあ。

おぢいさん それからこのスूप皿のふちもお前が缺いたのだぞ。

チルチル それから扉の上の孔があら、錐をさがし出した時僕があげたんだ。

おぢいさん どうしてお前は仲々いたづら小僧だつたからなあ。それからわしがゐない留守に、よく木のぼりをした梅の樹もこゝにあるぞ。矢張紅い實が綺麗に生つてゐるだらう。

チルチル でも先よりかもつと綺麗だなあ。

ミチル それからこゝにもう先せんゐた鶴がゐてよ。まだ歌をうたふでせうか。

かう言つてゐる時鶴は目をさまして、ありつたけの聲で歌を唄ひ出しました。

おぢいさん ほら御覽、思ひ出してやるとすぐこの通りだ。

チルチル 「見ると鶴が眞青なのでびつくりして」おや、この鳥は青いぜ。ああ、これだよ、これが妖女の所へ持つて行く青い鳥なんだよ。それだのに誰も此の鳥のゐることを話してくれないんだもの。おゝ、青い、青い、青い。青玻璃ガラス玉のやうに青いや。「ねだるやうに」おぢいさん、おばあさん、此の鳥僕に下さいな。

おぢいさん ああ、よからう、よからう。なあ、おばあさん。

おばあさん いゝとも、いゝとも、わたしたちが持つてゐたつて爲方がない。それは眠つてばかりゐるのだからねえ。歌なんかもう歌つたことはないのだよ。

チルチル 僕籠の中に入れてやらう。おや、籠はどこへ行つたらう。さう／＼樹の蔭へ忘れて来た。「樹の下へかけて行つて籠をとつて来て、鳥を中へ入れました」ではほんたうに此の鳥僕

にくれるの。妖女のおばあさんがどんなにうれしがらう。それから「光」もきつと喜ぶだらう。

おぢいさん だがの、鳥はどうなるか知らないぞ。鳥ももう騒々しい世間に出てゐることが出来なくなつてゐるかも知れないから。こつちの方へ吹く風があれば、それについて早速歸つてくるかも知れない。だがまあ、ためして見るがよい。さあ、鳥はしばらくさうして置いて、此度は牝牛を見せて上げよう。

チルチル 「蜂の巢を見附けて」それから蜂はどうしてゐるの。

おぢいさん あゝ、達者だよ。あちらの言葉では、もう生きてはゐないのだが、いつもせつせと働いてゐるよ。

チルチル 「蜂の巢の所へ立つて行つて」あゝ、あゝ、蜜の香がすらあ。蜂の巢は随分重たいだらうな。花はみんな綺麗に咲いてゐるなあ。それから死んだ妹たちも皆ゐるの。

ミチル それからお墓に埋つてゐる三人の弟たちは。

かう云ひますと、大ききのちがつた七人の子供たちが、パンの神の笛のやうに、一人々々小家から出て來ました。

おばあさん ほら出て來た。ほら出て來た。お前たちが思ひ出してやつたり、噂をしてやれ

ばすぐに小僧さんたちみんな出てくるのだよ。

チルチルとミチルとは子供たちの方へ駈けて行きました。子供たちはお互ひにぶつかつたり、押しつこしたり、巴のやうにくるく廻つて、嬉しがつてキャツ／＼と聲を立てました。

チルチル やあ、ピエロー「二人は髪を掴みあふ」ねえ、また先のやうに喧嘩しようか。それからロペールだね。おい、ジャン、お前獨樂はどうしたい。マドレーヌに、ピエレットにポーリーヌ、それからリケットもゐる。

ミチル まあリケットちゃん。リケットちゃん。この子はまだ這ひ／＼してゐるのね。

おばあさん あゝ、あれつきり大きくならないのだよ。

チルチル 「小犬が子供たちのまはりできやん／＼言つてゐるのを見つけて」やあキキだ。ポーリーヌの缺で尻尾を切つてやつたつけな。こいつもちつとも變らないや。

おぢいさん 「宣告をするやうに」さうだ。ここでは何も變らんのだ。

チルチル それからポーリーヌの鼻の上のおできもまだあるぜ。

おばあさん ああ、あれはとれないよ、どうしてやりやうもないのだからね。

チルチル でもみんな元気な顔をしてゐるなあ。随分肥つて、てか／＼して、はち切れさうな頬べたをしてら。うまいものをたべてゐるのだなあ。

おばあさん あの子たちは生きることや止めてからずつとよくなつたのだよ。もう何にもこはいことはないし、決して病氣にかゝることはないし、心配なんてものがなくなつたのだからね。

小家の中の時計が八時をうつ。

おばあさん 「びつくりして」おやどうしたのだらう。

おぢいさん さあ、わしにも分からないぞ、あれは時計の音にちがひない。

おばあさん そんな筈はないがねえ。あれは打つたことがないのだから。

おぢいさん それといふのがわたしたちはもう少しも時間といふことは考へないからだ。

誰か時間のことを考へた者があるかい。

チルチル ああ、僕考へた。何時でせう。

おぢいさん さあ、たしかにはいへない。時間の習慣を忘れてしまつたから。何でも八つ打つたから、あちらの人が八時といふのぢやなかつたかと思ふ。

チルチル 「光」が僕を九時十五分前まで待つてゐるんだ。それは妖女のおばあさんの言附なんです。時間を大切に守らなければならぬのだから。僕歸らう。

おばあさん まあそんなことを言はずに、お夕飯の支度ができてゐるからねえ。さあ、急

いでテーブルを表へ並べませう。うまいキャベツのスープもあるし、おいしい梅のタルトもあるし。

皆してテーブルを出し、大皿や小皿を並べて扉口の外へお夕飯の支度をしました。

チルチル ほんとに僕青い鳥はもらつたし。それにキャベツのスープなんか、もう随分久しくたべないんだ。しばらく旅に出てゐたものだから。そんなもの宿屋では出さないし。

おばあさん そら、もうできたよ。お坐り、子供たち。急ぐんだと云ふんだから、ぐづぐづしてゐてはゐけない。

ランプをつけてスープをならべました。おぢいさんとおばあさんと子供たちは夕飯のテーブルを囲んですわり、お互ひに押しつこしたり、臂で突きつこしたり、うれしさうに笑つたり、きやあ〜といったりました。

チルチル 「宿なしのやうにがつくしながら」ああ、うまい、ああ、うまい。お代りを下さい。もつと。「と言ひながら匙をふりまはしてお皿を叩いたりしました」

おぢいさん これ〜静かにしなさい。お前は相變らず行儀が悪いの。お皿をこはしてしまふぞ。

チルチル 「腰掛の上で半分立ちかけながら」僕もつと欲しいんだ、もつと。「かう言ひながらスープ

のお皿をつかんで手許に引き寄せようと思いますと、手がすべつてお皿をひっくり返しました。スープがテーブルの上にとぼれて、流れ出して、皆の膝にかゝると、皆あつがつてきやつくと叫びました。

おばあさん ほら御覧な、言はないことぢやない。

おぢいさん 「チルチルの頬をびしやり平手でたゝいて」それ、これをやらう。

チルチル 「打たれてちよいとよろしくしました、うたれた頬に手をあてようれしさに」 ああ、おぢいさん、生きてゐた時分よくこんな風に僕を打つたけな。おぢいさん、僕なんだかい、心持でしやうがない。おぢいさんにキスしたくなつた。

おぢいさん よしく、よけりやもつと打つてやらう。

この時時計が八時半を打ちました。

チルチル 「はつとしてとび上がりながら」八時半だ。「匙を投げ出して」ミチル、もう時間だよ。

おおさん まあ〜。もう少しいゝやね。お前たちの家が火事ぢやないのだよ。めつたには逢へないんだから。

チルチル ううん、もうだめだよ。「光」は随分深切なのだから。だから僕約束して来たんだ。

さあミチル、行かう。

おぢいさん いやはや、生きてる人間といふものは小ぜはしない、うるさいものだ。

チルチル 「鳥籠を抱へて忙しくみんなに接吻をしてまはつて」おぢいさんさよなら。おばあさんさ

よなら。みんなさよなら。ピエルローも、ロペールも、ポーリーヌも、マドレーヌも、リケットも、それからキキお前にもさよなら。僕たち、もうゐることが出来ないやうな氣がするんだから。泣くんぢやないよ、おばあさん、僕たちまたちよい〜来るからね。

おばあさん 毎日でもお出でよ。

チルチル ああ、ああ、來られるだけ來るよ。

おばあさん お前たちが思ひ出して逢ひに來てくれるといふことは、わたしたちのたつた一つの楽しみだし、それは何より嬉しいことなのだからね。

おぢいさん わしたちは外に慰めはないのだ。

チルチル 早く早く。僕の籠は。僕の鳥は。

おぢいさん 「籠を渡してやりながら」いゝかな、わしは請合ひはしないぞ、鳥の色が變つても。

チルチル さよなら。さよなら。

姉妹等 さよならチルチル、さよならミチル、有平糖を忘れないで頂戴。さよなら。またいらつしやい。またいらつしやい。

みんなはハンカチを振りました。此の間にチルチルとミチルはそろ〜出て行きました。

けれどもまだお別れの言葉をみんな言ひ切らない中に、この幕のはじめと同じやうに濃い霧が一面に下りて来て、聲がだん／＼遠くなり、やがてみんな霧の中に分らない様になつて、幕が下りる時、チルチルとミチルとだけがまた柵の樹の下に出て來ました。

チルチル ミチル、こゝだよ。

ミチル 「光」はどうしたのでせう。

チルチル どうしたらう。「鳥籠の中の鳥をのぞきながら」やあ、鳥はもう青くはなくなつた。

黒くなつてしまつた。

ミチル にいさん手を引かれませうよ。あたしこはいわ。あたし寒いわ。

——幕——

——第三幕——

第四景 夜の宮

怖ろしいやうな大きな廣間。一口に立派といつても嚴めしい、かん／＼と硬い金屬製のやうな、墓場のやうな、エジプトかギリシヤの古いお寺のやうな感じで、圓柱や軒縁や敷石や裝飾一切は黒大理石だの黄金だの黒檀だのでした。廣間の形は不規則な方形になつてゐました。三段になつた玄武岩の階段が廣間の横幅一杯にひろがつてゐて、舞臺を三段に爲切つてゐて、段々奥へ行くほど高くなつてゐます。左右とも圓柱と圓柱との間に、陰氣な青銅の扉がいくつもついてゐます。奥には記念碑のやうな眞鍮の大きな扉が立つてゐます。其の黒大理石と黒檀の柱が、ほんのり鈍く光つてゐる外には、このお宮には光らしいものもありませんでした。

幕が上がりますと、「夜」が大變美しい女王の姿で長い眞黒な上衣を被つたまゝ、二段目の階段の上に坐つてゐます。その兩傍には二人の子供がゐました。一人は全身、まる裸な愛の神のやうな風で、深い眠の中から笑顔をしておりました。もう一人は頭から足の爪先までヴェールを被つてちつと動かずに立つてゐました。——右手の方から「猫」が舞臺の前へ出て來ました。

夜 誰、そこへ行くのは。

猫 「大理石の階段の上につたり倒れて」わたしですよ。「夜」のおかあさん。わたしもうすっかり参つてしまひました。

夜 どうしたのお前。何だか眞蒼な、ひよろ／＼した風をして、髭まで泥をはね上げてさ。また雲のふる中の雨叩きで、喧嘩でもしたのだらう。

猫 どうして雨叩きどころの騒ぎではない。わたし達の大秘密にかゝはる事ですよ。いよいよ最後が近づいたんですよ。内々あなたにお知らせしようと思つて、ちよいとの所で逃げて来たんですが、でも、もうとてもだめだらうと思つて心配でなりません。

夜 まあ、どうしたといふんだね。

猫 此の前、あの樵の子供のチルチルのことと、その子が魔法のダイヤモンドを持つてゐるお話をしましたらう。いよく／＼その子供が、青い鳥をとりこゝへやつて来るんですよ。

夜 まだ青い鳥はとられやあしないよ。

猫 いゝえ。その中に何か奇蹟をやらないと、青い鳥はすぐとられてしまひますよ、それは、かういふわけです。あの「光」がね。子供の案内役に立つて、わたし共の仲間に裏切りをしましてね、今ではすつかり人間の味方になつてしまつたのです。所で日の光の中で生きて

ゐられるほんたうの青い鳥は、月の光の中に生きてゐて、日の光を見るとすぐに死んでしまふ夢の青い鳥の中に交つて、このお宮にゐることを、その「光」が知つてゐるのです。でも「光」は、このお宮の敷居をまたぐことを止められてゐるので、代りに子供をよこしたのです。ところで人間を抑へて、秘密の扉をあけさせないやうにする力があなたにはないのだから、一體、この先はどなるのだらうと思ひますよ。どちらにしても、運わるく、ほんたうの青い鳥が子供たちの手に渡つたが最後、わたしたちは消えてなくなる外はないでせう。

夜 おやく／＼、なんと云ふ時節になつたことだらう。わたしはもう一刻だつて、安心は出来なくなつたよ。二三年この方、わたしにはもう人間が分からなくなつたよ。一體何を人間は企らんでゐるのだらう。人間は飽くまで物を知らうとするのかしら。これまででも、人間はもうわたしの秘密の三分の一までは知つてしまつたぢやないか。「恐」はもう、こはがつてこゝから出ては行かないし、幽霊は逃げ出してしまつたし、病氣は大抵動けないでゐるし。

猫 全くですよ。「夜」のおかあさん。世の中が、むづかしくなつたのです。わたしどもはもういはば獨り身で人間に向はなければならなくなりました。だが、さういふ中に子供達が

やつて来たやうです。まあ、わたしの見るところでは、方法は一つしかない、それは何と
いつても、高が子供のことですから、うんとおどしてつけてやつて、強情をはらせないや
うにして、月の鳥の入つてゐる奥の大扉を開けさせないやうにするんですね。大抵外の洞
穴の中の秘密を見せただけで、おどろいて、気が遠くなつてしまふでせうよ。

夜 「外の音に耳を立てながら」 おや、何の音だらう。大勢なのかい。

猫 なに、何んでもないんです。わたし達の仲間の「パン」と砂糖です。「水」は気分が勝れな
いし、「火」は、「光」と親類なので来られないでゐます。「犬」の奴だけが、我々の味方では
ないんですが、あいつをなかく退ける工夫はありませんから。

これはく右の方からチルチルとミチルと、「パン」と「砂糖」と「犬」とが無臺の前へ出て来ました。

猫 「つとチルチルの方へ駆けていつて」 さあどうぞ。坊つちゃん、どうぞこちらへ。わたしは
「夜」にさう申しましたら、坊つちゃんのお出でを大層喜んでをりますのですよ。でも御免
下さいね。少し気分がすぐれないので、お迎へに出られないさうですから。

チルチル 今日は、「夜」の奥さん。

夜 「おこつたやうな聲で」 「今日は」だと。そんな言葉は聞いた事がないよ。「今夜は」とか、
せめて、「今晚は」とか言つてもらひたいものです。

チルチル 「困つて」 御免なさい、奥さん。僕、知らなかつたものだから。「二人の子供を指さして」

あの人、あなたのお子さんなの。大へん可哀らしい子ですね。

夜 あゝ、これは「眠」だよ。

チルチル どうして、あんなに肥つてゐるの。

夜 よく眠るからさ。

チルチル それからもう一人かくれてゐる子供は。どうしてヴェールをかぶつてゐるの。加減
がわるいの。名は何といふの。

夜 あれは「眠」の妹だよ。名前は言はないほうがいい。

チルチル なぜ。

夜 名前を聞くと厭になるから。まあ、何か外の話をしようよ。「猫」の話では、お前さんた
ちは、こゝへ、青い鳥を探しに来たんださうだね。

チルチル え、奥さん。すみませんけれど、青い鳥がどこにゐるか教へて下さいな。

夜 知りませんよ、わたしのたしかに言へることは、こゝにはゐないと云ふことだけだ。そ
んな鳥なんか、わたしは見えたこともないから。

チルチル でも、でも。「光」が、青い鳥は、こゝにゐるといつてゐましたよ。「光」は間違つ

た事はいはないんです。鍵を貸して下さいね。

夜 まあ、お前、わたしのいふ事をお聞き、わたしは、初めて来た人に鍵などをうかく貸して上げることはできないよ。わたしは、世界の秘密一切の番をしてゐるのだ。わたしには責任があるのだから、誰にだつて決して渡されるものではない。まして子供になんかどうして渡されるものかね。

チルチル あなたは、人間から求められたら、それを拒む権利がないんです。僕、それは知つてゐるんだ。

夜 誰がさういつた。

チルチル 「光」がいひました。

夜 また「光」か。何でも「光」だ。全體どうしてさうおせつかいなのだ。

犬 坊つちゃん、力づくで取つてやりませうか。

チルチル おだまり。静かに、行儀よくしてゐろ。「夜に」さあ奥さん、どうぞ鍵を渡して下さい。

夜 せめて、しるし位、もつておいでだらうね。どこにあるえ。

チルチル 「帽子に手をかけて」ダイヤモンドを見て下さい。

夜 「爲方がないとあきらめて」では勝手におし。これが廣間の扉をのこらすあける鍵だ。氣をつけて不爲合な目にあはないやうにおし。わたしは知らないから。

パン 「大層心配らしく」あぶないんですか。

夜 危い。危いどころか、この青銅からねの戸の奥は底しれない深い淵だ。それを開けて見るがい。わたしにだつて、どうしやうもないのだ。廣間のぐるりにある玄武岩の洞穴の中には、世界が始まつてこの方、人間の世をなやましたありとある悪事だの、禍だの、病氣だの、恐怖だの、災難だの、不思議だのが入つてゐる。わたしは、「運命」に手傳つてもらつて、やつとこのこととみんなそれをこの中に押しこめたのだ。この行儀のわるい者どもを、おさへつけ、それ／＼の間に筋道をつけてやるのは、容易な骨折ではなかつたのだ。その中の一つでも逃げ出して地の上に現れると、どんな騒ぎが起るか、お前達も知つてゐる筈だ。

パン わたしは、年長で、経験に富んでをるし、忠誠でありますから、自然、二人の子供の保護者となつてゐるのであります。さう云ふわけでありますから、「夜」の夫人。わたしに一つの質問を許されたい。

夜 勝手におし。

パン では、危険の場合に於て、逃路は、どちらでありますか。

夜 逃路なんかない。

チルチル 「鍵をもつて第一の階段に上がりながら」こゝから、はじめよう。この青銅からかねの扉のうしろは何です。

夜 そこは幽霊だつたと思ふよ。久しく扉を明けないし、中からも出て来ないから。

チルチル 「鍵穴に鍵をさし込みながら」見てみよう。「パン」に向つて」青い鳥を入れる籠は。

パン 「がたく、齒をふるはせながら」わたしはこはいとは思はない。しかし扉は、明けない

方がいゝやうに思ふ。鍵穴から、のぞいて置いた方がいゝやうに思ふ。

チルチル お前のお世話にはならないよ。

ミチル 「ふと、泣きだして」あたし、こはいわ。お砂糖はどうして。あたし、お内へ歸りたいわ。

砂糖 「まじめ心らしく、へい／＼しながら」こゝに居ります。へい、お嬢さん。お泣きなさいます

な。わたしが指を折つて有平糖にしてあげますからね。

チルチル それ、やるぞ。

かう言つて鍵をまはして、そつと扉を開けました。とすぐ、いろ／＼の異形な幽霊が五つ六つ逃げ出して方々へ散りました。ミチルはおびえて叫びごゑを立てました。「パン」もふるへ上がつて鳥籠を抛り出したまゝ、廣間のうしろの方へ行つてかくれました。この間「夜」は幽霊の後を追ひかけながら

チルチル に向つて呼びかけました。

夜 早く、早く、扉をお閉め、扉をお閉め。みんな逃げ出してしまつて、もう捉つかまらなくなつてしまふよ。せつかく人間が幽霊といふものをまじめに扱はなくなつてから、みんなあの中にひつ込んで退屈してゐる所なのぢやないか。「かう言つて「夜」は幽霊の後を追ひながら、蛇で編んだ鞭をふつて、せつせと牢の中へ追ひ込んでしまひました」お手傳ひ、そら、そこだ、こゝだ。

チルチル 「犬」に「チロー。それ、加勢して追ふんだ。

犬 「とび上がつて吠えながら」はい、はい、はい。

チルチル それから「パン」は。「パン」はどうした。

パン 「廣間のうしろで」こゝですよ。幽霊どもが出て行かないやうに、扉の所で番をしてゐますよ。

幽霊の一つが、「パン」のゐる方へ動いて行くと、「パン」はキャツと叫び聲を立てながら、足に任せ

て逃げて行きました。

夜 「三つの幽霊の襟上をつかまへて」こいつら、こつちへこい。「チルチル」に「扉を少しお明け。「幽霊を洞穴の中へ押し込む」さあ、これでよし。「犬」がもう二つの幽霊をくはへて来ました」おやまだ二つ。さあ入れ、早く。お前たちがよろ／＼とび出すのは、萬聖節はろわいだけと極つて

「おるのぢやないか。「扉をしめる」

「もう一つの扉の方へ行きながら」この扉の中は何です。

「いけないく、ろくなものではないよ。青い鳥は決して、こゝにはゐないといつたぢやないか。まあくお前さんのいゝやうにおし。明けたけりや、扉を明けるがいゝ。それは「病氣」だよ。

「鍵穴に鍵をさし込む」用心して明けないといけないの。

「なあに、なんでもないよ。可哀さうなものさ、極く静かにしてるよ。みんな爲合せではないのだからね。この節は、人間がひどい勢で「病氣」たちに戦をしかけてゐるのだからね。とりわけ微菌が発見されてからは、病氣もみじめだよ。明けてごらん。」

「チルチルは、すっかり扉を開けましたが、何にも現れません。」

「チルチル 出て来ないのかしらん。」

「夜 ほらごらん。「病氣」はみんな弱つてすっかり意氣地がなくなつてゐるのだよ。お醫者達が随分邪見に扱つたからね。ちよいと中へ入つて見るがいゝ。」

「チルチルは言はれて洞穴の中へ入つて見ましたが、すぐに出て来ました。」

「チルチル 青い鳥はゐないや。この「病氣」たちは随分ひどくわるさうだね。まるで頭さへ上げ

「ないんだもの。「かういつてゐる時一人上靴を穿いて、寝間着を着て、木綿の寢室帽子を被つた、小さな「病氣」がふらく洞の中から出て、廣間の中をひよこく跳ねまはりました」おや。小さな奴がにげ出した。何だらう、あれは。」

「夜 何でもない。「病氣」の中でも極く小さい方だよ。「風邪」だよ。病氣の中でも一番いぢめられない方なので、あゝして達者でゐるのだよ。「風邪」に向つて聲をかけました」これく、お前さん、まだ出るのは早いよ。もう少しだ、春までお待ち。」

「「風邪」は嘘を一つして、喉をして、涕をかんで、またのそく穴の中へ入りました。チルチルは後から扉を閉めました。」

「チルチル 「次の扉を明けかゝつて」此度は、これを明けて見よう。此の中には何が入つてゐるの。夜 お氣をつけ。そこは「戦争」だよ。昔から見ると、まだずつと、亂暴にもなつてゐるし、手強くもなつてゐるのだからね。その中の一つでもとび出さしたがいい、それこそ、どんな事になるかしたのものぢやない。爲合せな事には、奴等はどちらか云へば體が重くてのろくしてゐる。だが、みんな總がかりで、しつかり扉を押へておいで。ちらつと中を見たら、すぐ扉をしめるのだよ。」

「かう云はれたので、チルチルは、おつかなびつくり、扉をほんの目でのぞけるだけ開けて見て、す

ぐ扉を背中て押へてどなりました。

チルチル 早く早く。みんな押ししておくれよ。みんな、僕を見たんだ。みんな出て来さうにするんだ。扉を、押し開けようとしてゐるんだ。

夜 さあ、みんなどうした。一生懸命に押すのだよ。「バン」、お前は何をしてゐるの。みんな押さないか。なんと云ふ力だらう、ああ、やつとしまつた。奴等、さすがに閉口したらしい。やつと間に會つた。お前さん、見たかえ。

チルチル えゝえゝ、みんな恐ろしい大きな奴ばかりだつた。あんなものが、青い鳥を持つてゐる筈がないや。

夜 さうだともさ。鳥がゐたら、すぐ喰べてしまふよ。さあ、これでお前も、たんのうしたらう。もう外にすることはないだらう。

チルチル 僕は、何もかも見なければならぬ。「光」がさう云つたんだ。

夜 「光」がさういつたと。さうさ、自分は、こはがつて、引込んでゐるくせに、いふことだけは何でもいふのだね。

チルチル さあ、次の扉にかゝらう。こゝは何が入つてゐるんです。

夜 そこは、「陰」と「恐」を入れて置いた。

チルチル あけていゝでせう。

夜 いゝとも。極く、おとなしいよ。「病氣」のやうなものだよ。

チルチル 「半信半疑で扉をあけて中をのぞきました」中にはゐないや。

夜 「中を代つてのぞいて」こゝら「陰」、お前たちは何をしてゐる。少しの間出て来て元氣をつけるがいゝ。それから「恐」だつてさうだよ。何もこはいことはないのだから。「かういはれて二人の「陰」と「恐」とが、どちらも女の形をしてゐますが、「陰」の方は黒いヴェール、「恐」の方は緑がかつたヴェールをかぶつて、とぼくと洞穴の外へ出て来ました。ところが、チルチルがその時身動きをする、と、びつくりしてすぐ逃げ込んでしまひました」何だね。こはがることはないよ。子供ぢやないか。何もしやしないよ。「チルチルに」みんな随分臆病だよ、たゞ一人うしろの方にゐる大きいだけがさうでないのだよ。

チルチル 「穴の底を覗いて」やあ、随分恐ろしい風をしてゐる。

夜 あれらは鎖でつないであるのだよ、人間を何とも思はないのは、あれらだけだよ。けれど扉をおしめ、おこり出すといけないから。

チルチル 「次の扉へ行きかけながら」おや此方はもつと暗いや。何、こゝは。

夜 そこには、いろんな「不思議」がしまつてあるのだよ。どうしても見たいといふならあけ

でもいゝが、中へ入つてはいけないよ。すつかり用心して「戦争」の時と同じに、よく扉を押へてゐなければいけないよ。

チルチル 「扉を細めに開け、一生懸命に用心をして、こはく首を突つ込みました」おや、何て寒いんだらう。眼がひり／＼する。早くしめろ。おい押ししてくれ。押し返されちまふ。「夜」、「犬」、「猫」、「砂糖」總がかりて扉をお返ししました」あゝ僕見た。

夜 何があつたえ。

チルチル 「どきまぎして」何だか分からない、こはい奴。みんな目のない化物みたいな風で坐つてゐるんです。僕を攫まうとした大男は何。

夜 多分「無言」だらう。あれが扉の番をしてゐるのだよ。きつと、びつくりしたのだらう。

お前まだ眞蒼な顔をして、ぶる／＼ふるへてゐるぢやないか。

チルチル えゝ。僕あんなものがゐるようとは思はなかつたもんだから。あんなもの見たことがない。それに手がすつかり凍つてしまつた。

夜 この位で止よさないと、もつとひどい目にあふよ。

チルチル 「次の扉に行きかけて」それからこれは。これもひどい奴。

夜 いゝえ、そこはいろんなものを少しづつ入れてあるんだよ。用事のない「星」だの、わた

しの自分の香氣だの、わたしに附いた光りもの、例へば「鬼火」だの「光蟲」だの、「螢」だの、それから「露」だの「夜啼鶯の歌」だの、そんなものを、こたく／＼と入れてあるのだよ。

チルチル さう。「星」だの「夜啼鶯の歌」だのつて、ぢや「青い鳥」もこゝに居るかも知れない。夜 明けたきや、明けてごらん。何にも悪いものはゐないから。

チルチルが扉を、すつかり開けました。すぐ「星たち」が美しい、若い女の姿でいろ／＼の色のきらきら光るヴェールをかぶつて牢屋の中から飛び出しました。やがて廣間の四方へ散つて階段の上や、柱のまはりに、頭から、半分陰をもつた光をあびながら、優美なまろい輪を作りました。殆ど形の見えない「夜の香氣」は「鬼火」だの「螢」だの、透きとほる「露」だのと一緒に、「星」の仲間に入りました。すると「夜啼鶯の歌」が、洞穴の中から流れ出して、やがて夜のお宮一杯にあふれました。

ミチル 「嬉しがつて手を拍きながら」まあ何てきれいなねえさん達でせう。

チルチル 踊がうまいなあ。

ミチル いゝ香がすることね。

チルチル いゝ聲で歌ふぢやないか。

ミチル ねえ、あすこに、何だか、よく見えないもの、なんでせう。

夜 それは、わたしの「影の香ひ」だよ。

チルチル それからあすこにゐる玻璃ガラスの織絲のやうなものは。

夜 あれは、森と野の「露」だよ。だがもういゝだらう。あれらは止めつこはないのだから。一度をどりだしたら、それを止めさせるのは大變だよ。「両手を叩きながら」さあ〜「星」たち早くお入り。踊ををどる時刻ではないよ。御覽、空が曇つて、眞黒な雲が出てゐるぢやないか、さあ、早くお入りといつたら。入らないと、行つて日の光を連れてくるよ。

「星」や「香」は皆慌て、中へ逃遁しました。扉がすぐに閉りました。「夜啼鶯」の歌も一緒に止まりました。チルチル 「いよ〜奥の扉にかゝつて」さあ眞中の大きな扉だ。

夜 「おこそかな聲で」その扉は明けてはならないぞ。

チルチル なぜいけないの。

夜 禁制の扉だ。

チルチル ぢやあ青い鳥はこゝにゐるんだ、「光」がさういつたもの。

夜 「母親が子供をすかさやうに」子供たち、よくお聞き。わたしはもう随分優しく深切にして上げたのだよ。お前たちのために誰にもゆるさないことをしてあげたのだよ。わたしの秘密をみんな見せてあげたのだよ。わたしは、お前たちが好きだし、子供で何にもしらないと思つて、してあげたのだよ。まるでおかあさんのやうにやさしくしてあげたのだよ。だ

からね、わたしのいふことを安心して聞いて、もう探すのは止めにおし。この上、運をためすやうな事は止めにおし。ね、いゝかえ、この扉は決して明けるのではありませんよ。チルチル 少し氣の毒になつて でも、どうして。

夜 お前の身を亡すのが、可哀さうだからさ。いゝかえ、あの扉を毛程の隙間でも明けて見たものは、あつと思ふ間に、もう二度と生きて日の目は見られないのだからね。地の上で人のいふどんな恐ろしいものをもつて來ても、この洞の中の一番おとなしい奴にだつて、比べものにはならない。そんな奴でも、人間の目が、この名のつけやうのない底なしの淵をのぞいたが最後、とびかゝつてくるのだよ。こんなに言つても、あくまで強情を張るなら、待つておくれ、わたしは、あの窓のない塔の中にかくれるから。こゝは、お前よくわかつてもらはないと困るよ。よく考へて見るところだよ。

ミチルは斯うきくと、眼に一杯涙をためて、聞き取れない恐怖の叫びをあげながら、一生懸命にチルチルを引つぱりました。

パン 「齒をがたく〜言はせながら」坊つちやん。お止しなさいよ。「膝をついて頼みながら」わたし達を可哀さうだと思つて下さい。この通りお願ひです、ねえ「夜」のいふ通りなんですから。痛 あなたは、わたしたちみんなの命を犠牲にするんですね。

チルチル 僕は扉を明けなければならぬ。

ミチル 「泣いじやくりながら、足をばたく踏んで」 あたし、いやだわ。いやだわ。

チルチル 「砂糖」と「パン」とはミチルの手を曳いてあつちへ逃げておいで。僕は扉を明けるんだから。

夜 命の惜しいものはお逃げ、早く〜。今の中だよ。「逃げる」

パン 「夢中になつて逃げながら」 まあ、待つて下さい。向ふのすみに行くまで。

猫 「これも逃げながら」 お待ちなさい。お待ちなさい。

一同は廣間の片隅の圓柱のうしろにかくれました。チルチルと「犬」とだけが後に残つて、大扉の前に立つてみました。

犬 「むりに、こはいのを我慢して、はつく〜と喘いだり、しゃつくりしたりしながら」 おれはゐる。

おれはゐる。おれはこはがらないぞ。おれはゐるんだ。おれは坊つちちゃんについて残つてゐるぞ。おれはゐるぞ、おれはゐるぞ。

チルチル 「犬」の背をさすりながら」 チロー、その通りだ。僕をキスしておくれ。お前と僕と二人きりだ。さあ、いゝか、あけるぞ。

かう言つて鍵を穴の中に突込みました。わあつといふ叫びが逃げて行つた連中のゐる隅の方から起

りました。やがて鍵が扉にさはつたかと思ふと、すうつと、高い幅のひろい扉が真中から左右にあいて、見る／＼あつい壁の中に滑り込んで、消えてしまひました。そこには俄かに大きな花園が、嘘のやうな、果てしのない、意外とも何ともいひやうのない夢の花園が、月の光にひたつてゐました。大小の星の群の中にあつて、魔のやうな青い鳥が、寶石から寶石へ、月の光から月の光へと、たえずとびまはりながら、觸るものは、何といふことなしに、きら／＼と光らせました。そして行儀よく調子をそるへて、幾千萬とも数しれない鳥が目の届くかぎり舞ひ翔つてゐるのが、風のやうにも、藍色の空のやうにも見え、またその不思議な花園の本體のやうにさへ見えました。

チルチル 「目がくらんで氣がとほくなつて光の花園の中に立ち乍ら」 あゝ、大變。「逃げて行つた皆の方に向つて」早くおいでよ。ゐるよ、こゝに、これだよ、これだよ。とう／＼捉まへたよ。何百萬と云ふ青い鳥だ。何千萬だ。何億萬だ。あんまり澤山ゐすぎる位だ。ミチル、早くおいでよ、チロー、お出でよ。みんなお出で。みんな來て手傳つておくれ。「鳥の群の中にとび込んで行きながら」抱へ切れないほど、とれらあ。臆病ぢやないよ。僕たちをこはがつてはゐないよ。そら、そら。「ミチルはその他の皆とあけて來ました。みんな目のくらむ花園の中へ入りました。入らないのは「夜」と「猫」だけでした」ほら、随分澤山ゐるだらう。手の中にとび込んで來るよ。ごらん、月の光を喰べてゐるよ。ミチル、お前何處にゐるの。随分澤山な青い羽だ。あんまり澤山羽が落ちて來て、何にも見えやしない。啣へるんぢやないよ、チロー。傷を

つけてはいけないよ。なるたけやさしくしておやりよ。

ミチル 「青い鳥を山のやうに抱へて」 もう七羽とれたわ。まあ、こんなに羽ばたきして。つかまへてゐられないわ。

チルチル 僕もさうだよ。あんまりとりすぎたんだ。やあ逃げて行つた。やあ、また、かへつて来た。チローもとつたな。鳥に曳きずられさうだよ。曳きすつて空までも連れて行かれさうだよ。早く、こゝから出よう。「光」が待つてゐるんだから。まあ、どんなに「光」が喜ぶだらう。こゝから、こゝから。

みんなは、花園の中から外へ出ました。両手にばたくいふ鳥を抱へて、廣間を突つ切つて、青い羽のうづを巻いて飛んでゐる中をぬけて、初め入つて来た右手の口から出て行きました。後からは何にも鳥をつかまへない「パン」と「砂糖」とがついて行きました。「夜」と「猫」とだけは後にのこつて、舞臺の奥の方へ戻つて、心配さうに、花園の中をのぞき込んでゐました。

夜 鳥はとられたかい。

猫 なあに。あすこの月の光の上におますよ。手がとどかなかつたのでせう。ずつと高い所にゐたもんだから。

幕が下りました。

すぐ幕の前に、左からは「光」、右からはチルチルとミチルと「犬」とが捉まへた鳥を抱へ切れぬほど

かゝへて、両方から出て来ました。けれど鳥はもうみんな首も、羽も、がつくり使れて、死骸のやうに見えてゐました。

光 どう、鳥は捕まつて。

チルチル えゝ、えゝ。いくらでも欲しいだけ。何千萬て居るんだもの、さあこれ、ね御覧。

「鳥を「光」に見せようとするともう死んでゐるので」やあ、死んでら。どうしたんだらう。ミチル、お前のもかい。チローのもかい。「おこつて、鳥を抛り出したがら」何だ、ほんとにひどいや。誰が鳥を殺したんだらう。あゝ、僕、ほんとに情ない。「顔を両腕の中にうづめて、體に波を打たせながら、すゝり泣きをはじめました」

光 「おかあさんらしく、チルチルを抱きしめながら」いゝ子だから、お泣きでないよ。明るい日の下で、生きてゐられる鳥が捕まらなかつたのですよ。その鳥は、何處か、他へ飛んで行つたのだらう。だからまた探しに行きませうね。

犬 「死んだ鳥をながめながら」この鳥、食べられるかしら。

みんなは左手から引込みました。

幕

第五景 森

八四

或森の中。夜。月が照つてゐます。いろ／＼の古い樹が立つてゐます。中でも榎だの、山毛櫨だの、榆だの、ポプラだの、樅だの、絲杉だの、菩提樹だの、マロニエ(栗)だのが頭だつたものでした。そこへ猫が出て來ました。

猫 「ぐるつと一つ一つ樹にお辭儀をして」皆さん、今晚は。

樹の葉のさゝやき 今晚は。

猫 今日と云ふ今日は、大變な日ですよ。いよくわたし達の敵がやつて來て、皆さんの精を抜きとつて、それを改めて自分の手で皆さんに渡さうと云ふのです。敵といふのは、これまで、さん／＼あなた方をひどい目に合はした樵の息子のチルチルです。その子は、あなた方が、世界の始めから人間にかくして持つてゐる青い鳥をさがしてゐるのです。青い鳥だけが、わたしたちの秘密を知つてゐるのですものね。「樹の葉がさやく」云ふ「え、何とおつしやつたの。あゝポプラさんですね。さうです。その子はちよいとの間、吾々を自由にするダイヤモンドをもつてゐるんですよ。その子は、青い鳥を吾々の手からとり上げる

ことが出来るんですよ。さうなれば、吾々は否應なしに人間の自由になるんですよ。「樹の葉がさやく」云ふ」ものを仰しやつたのはどなたですか。あゝ、榎さんですね。どうなすつたの。「樹の葉の葉が、さやく／＼いふ」相變らず、風ひきですか。甘草はもう利きませんか。リユーマチも相變らずですね。それはきつと、苔のせみですよ。あんまり苔を足につけてゐるから冷えるんですよ。青い鳥はやはりお手元にありますか。「樹の葉がさやく／＼いふ」え、何ですつて。さうです、もうぐづ／＼してゐるところではありません。好い機會です。子供をやつつけてしまふ時ですよ。「樹の葉さやく／＼いふ」え。何、よくわからないんですよ、あ、さうです／＼。妹と一緒にです。これもやつつけてしまひせう。「樹の葉がさやく／＼いふ」さうです。「犬」もつれてゐます。あいつを、どける工夫がないのです。「樹の葉がさやく／＼いふ」何とおつしやるの。賄賂をつかへつて。だめ／＼。それはわたしも随分いろ／＼やつて見たいんですよ。「樹の葉がさやく／＼いふ」あゝ、あなた樅さんですね、さうです。板を四枚たのみますよ。さう／＼外に「火」と「砂糖」と「水」と「パン」がゐるんですよ。でも、これはみんなわたしたちの味方です。まあ「パン」が少しあぶないんですがね。「光」だけが人間の味方ですよ、あれは、ついては來ないでせう。わたしは子供たちをそゝのかして、「光」の寝てゐる間に、そつとぬけてくるやうにしておきましたから。だから、こんないい機會はまた

とはありません。「樹の葉がさやくいふ」あゝ此度は山毛櫛さんの聲ですね。さう、おつしやる通りです。獸たちにもしらせないといけませんね。兎が太鼓を持つてゐましたつけね。何、こゝに來てゐますか。ちやあ、いゝ、すぐ太鼓を叩いて召集してもらひませう。さあみんなやつて來ました。

兎の召集の太鼓が聞えて、だんく〜とほくなつて行きました。——チルチルとミチルと、犬とが入つて來ました。

チルチル　こゝかい。

猫　「子供たちを迎へに飛んで行つて詔ふやうな、甘たるい、熱誠らしい調子で」おや、いらつしやいまし、坊つちやん。今晚はなんといふいゝ御機嫌で活潑な御様子に見えるでせう。わたし、あなたのお出でを、みんなにしらせておかうと思つてひと足お先にまゐりましたのですよ。何もかも好都合にまゐりました。今夜はきつと青い鳥がお手に入りますでせう。わたしは、今しがた、兎をやつて國中の主だつた獸たちがすぐ集るやうに太鼓を叩いてふれさせました。もうそろ／＼森のなかへ出て來たやうです。ほらね、みんな少し臆病で、すぐには出てまゐりません。「この時いろ／＼な獸、牡牛だの、豚だの、馬だの、驢馬だのの聲が聞えました。「猫」はチルチルを傍に呼んで内證でいひました」あなた、まあどうして、「犬」を連れて

いらつしたの。わたし申上げたでせう、あいつは誰とも仲がわるくつて、樹とさへ喧嘩してゐるのだからつて。きつと、あいつのために何もかもいけなくしてしまやしないかと思ひますわ。

チルチル　あいつから、はなれることはできないんだもの。「犬」に向つて威すやうに「畜生、あつちへ行け。」

犬　誰です。わたしですか。どうしてです。何を、わたしがしたでせう。

チルチル　いゝから行けつていふに。お前なんか用はない。それだけの事だよ。つまり邪魔なんだ。

犬　わたしは何も、口を利きますまい。遠くの方からお供をして行きます、みんなに見えないやうにしてゐます。おちん／＼しませうか。

猫　「そつとチルチルに」あんなわがまゝをいふのを、ゆるしてお置きになるの。鼻づらをスツッキでぶつておやんなさい。ほんとにがまんのない奴です。

チルチル　「犬」を打ちながら「さあ、これでちつとは性がついたらう。」

犬　「吠えながら」ウー、ウー、ウー。

チルチル　どうだ、きさま。

犬 あなたが打つたから餘計キスして上げなけりやあ。「チルチルに亂暴に接吻したり、抱きついたりしました」

チルチル さあ、止せ、もう澤山だ、あつちへ行け。

ミチル いやよ、いやよ。ゐる方がいゝわ。「犬」がゐないとあたしこはいわ。

犬 「とび上がつて、ミチルを夢中で亂暴に接吻して、あぶなくミチルを引つくり返しさうにしました」ええ、ええ、さうですとも、お嬢さん。あなたは何て可哀らしいんでせう。何て深切なんでせう。ほんとに綺麗です。ほんとにやさしい。キスしずにはゐられない。もう一遍、もう一遍、もう一遍。

猫 何と云ふ馬鹿だ。さあ、始めませう。いつまでかうしてはゐられない。ダイヤモンドを

お廻しなさいな。

チルチル 僕、何處にゐよう。

猫 この月の光のつたところに。よく見えますよ。さあ、しづかにお廻しなさい。

チルチルはダイヤモンドを廻しました。すると、長く引つ張つた、さらさらいふ音が樹の葉をも枝をも動かしました。一番古い、一番立派な樹の幹たちが口をあいて、てんてんの持つてゐる精たちの出る道を開けてやりました。これらの精たちの姿は、それらの樹の姿や性質によつて違つてゐました。例へば、楡の精はぶく／＼肥つて、お腹のふくれた意地のわるさうな小人でした。菩提樹の

精は、やさしい人好きのする、愉快さうな様子をしてゐましたし、山毛櫨の精は優美で快活でした。樺の精は、色が白く、はにかみやで、落着かない風だし、柳の精は、いちけて、どろ／＼した髪の毛をして、悲しさうな風でした。樺の精は香が高くつて瘦せて無口で、絲杉の精は悲壯な風。マロニエ(栗)の樹の精は氣取つてゐて、おしやれらしく、ポプラはせか／＼して、うるさく、おしやべりだといつた風でした。その中、或者は、のろ／＼と樹の幹から這ひ出して来て、ゆう／＼と伸びをしたりして、まるで百年もおし込められてゐたか、眠つてでもゐた人のやうでした。さうかと思ふと勢よく夢中になつて飛び出して来るものもありました。そして、皆はよつて来て、子供たちをとりまきました。そのくせ、自分たちの出て来た樹の中へいつてもまた、飛び込めるやうに、なるだけ、その近くへ近くへと陣どつてゐました。

ポプラ 「先に立つて驅け出して、ありつたけの聲を張り上げて」人間だな。しかも、小さな、人間だな。おれたちは人間と話をすることが出来る。もうだまつてゐるのもおしまひだ。それはもう止したんだ。人間どもは何處から来たんだ。何者だ。「落着きはらつてパイプをふかしながら出て来た菩提樹に向つて」知つてますか、菩提樹のおとつさん。

菩提樹 どうもわしは見おぼえないよ。

ポプラ でも、でも、そんな筈ないでせう。あなたは、人間をみな御存じの筈だ。いつだつて、人間の家のまはりを、ぶら／＼してゐるんだから。

菩提樹 「子供たちの様子を見ながら」いゝや、たしかに知らないよ。まだ随分若いからね。わたしの知つてゐるのは、月のいゝ晩に、わしをたづねてくる戀人たちや、わしの樹の下でビールを飲んで騒ぐ人たちだけだから。

栗 「氣どつた風で片眼鏡を直し乍ら」誰だね、あれは。田舎から来た貧乏人の子供ぢやないか。

ボブラ いや栗の紳士、近頃はあなたにも大都會の大通の外は(栗の一種のマロニエは、ベリーでは、主な街路樹になつてゐます。——譯者註)とんとお目にかゝりませんなあ。

柳 「木の靴を穿いて出て来て泣き聲を出しながら」おや、おや、あの子たちは、またわしの頭や腕を伐つて薪にしようつて来たのだよ。

ボブラ 靜かに、柳の大王がお宮からお出しました。今夜は大へん、御様子がよくないやうだ。大そう歳をとつたとは思はないかい。幾つになるだらうな。縦の樹の話では、四千年だつて云ふけれど、これはあの男の法螺にちがひない。聽かう、あの人から何かの話を聽かう。

柳の樹がのそく^{ガクン}と出て來ました。嘘のやうに年とつてゐて、寄生木の冠を頭に冠り、長い昔で縁をとつた緑色の長袍^{ガクン}を着てゐました。盲目で、白い鬚は風に吹かれてゐました。片手は節くれ立つた枝にすがり。片手は手引役の若柳に引いてもらつてゐました。青い鳥はその肩の上にとまつてゐました。柳が近くにくると、外の樹たちは道をゆづり、丁寧に辭儀をしました。

チルチル やあ、あの人、青い鳥をもつてゐる。早く、早く。さあこゝへ。それを僕に下さ

す。

樹たち 靜かに。

猫 「チルチルに」帽子をおとんなさい、柳の大王です。

柳 「チルチルに」お前は誰だね。

チルチル 僕、チルチルと言ひます。青い鳥はいつ頂けるでせうか。

柳 チルチルと、樵の息子だな。

チルチル さうです。

柳 お前のおやぢは我々に澤山悪い事をした。わしの一家だけで數へても、息子が六百、小父と小母が四百六十五、甥と姪とが千二百、嫁が三百八十、曾孫が一萬二千も殺された。

チルチル 僕、ちつともそんなこと知らないんです。おとうさんもつひしたんです。

柳 お前は何しにこゝへ來た。何と思つて我々樹の精を、住みから追ひ出した。

チルチル あなたの邪魔したら勘忍して下さい。「猫」が青い鳥のありかを、あなたが御存じだといつたものですから。

柳 さうだ。わしはお前が青い鳥をさがしてゐることを知つてゐる。それはつまり、萬物と

幸福の大秘密をさぐり出して、人間がこの上にも残酷に我々を追ひ使はうといふのだ。
 チルチル いゝえ、いゝえ、さうちやないんです。妖女のベリリウヌの小さい女の子が大變悪いものですから。

壽 「身振でチルチルに黙れと命令しながら」もういい。獸たちの聲がしないな、みんな何處へ行つた。これは、我々同様獸たちに關係のある事なのだ。我々の精ばかりが、こゝに課せられた重大事件に對して責任を負ふべきものではない。これから我々の執らうとする手段を、いよいよ實行したことが人間に知れた曉には、どんな恐ろしい復讐を受けるかもしれない。それだから協定は満場一致で、一同はかたく沈黙を守らなければならぬ。

樞の樹 「外の樹たちの上から向ふをながめ渡して」獸たちがやつて來ました。兎が先に立つてゐます。馬だの、野牛だの、牡牛だの、牝牛だの、狼だの、羊だの、豚だの、鶏だの、山羊だの、驢馬だの、熊だの、いろんなものの精が、やつて來ました。

動物の精たちが樞の樹が數へ上げたやうな順で進んで來て、樹たちの間に坐りました。たゞ山羊の精だけが、そこらをのそく歩きまはり、豚は樹の根をかぎまはりました。

樹 みなさん、お揃ひですか。

兎 牝鶏は卵を抱いてゐて離れることができません、野兎は外へ遊びに出てゐますし、鹿は角が痛むし、狐は加減がわるいさうです。こゝに醫者の診断書もあります。鷓鴣はまるで分けるがわからないし、七面鳥はぶんぶんおこつてゐました。

樞 さう缺席者の多いのは非常に残念です。しかしまあ、定員だけはあるから、はじめませう。さて、皆さん、事件の性質は御存じであります。只今そこにゐる子供は、地のいろいろの力から盗み出した護符のおかげで、青い鳥を手に入れることが出来るやうになつたのであります、我々が開闢以來もちつたへた秘密を、我々の手から奪ひとらうとしてゐるのであります。さて、人間が一度、この秘密を手握るや否や、我々に對し、どんな手段をとるであらうか、それはこれまでの經驗でお互ひに知りすぎるほど知つてゐる筈です。それゆゑ此の際一切の躊躇は愚昧でもあり、罪惡でもあると思ふ。重大な時ですぞ。今の中に子供たちを片付けてしまはないと、とんだ事になりますぞ。

チルチル あの人、何をいつてるんだらう。

犬 「樞のまほりをうろく歩いて牙をむき出して見せながら」やい、この齒を見ろ。このよい／＼爺め。

樞 「おこつて」 あいつは大王に失禮を働くぞ。

樞 「犬」だ。追ひ出してしまへ。我々の仲間うち裏切者がゐてはならぬ。

猫 「傍をむいてチルチルに」「犬」を追ひ出しておしまひなさいよ。なかに誤解なんですから。わたしに任せて下さい。いゝやうにしますからね。でも「犬」は少しも早く追つばらふ方がいい。

チルチル 「犬に」あつちへ行かないか。

犬 あんな痛風病みのおいぼれなんか、あいつの苔靴を噛み裂いてくれませうよ、おもしろいから。

チルチル お黙り。行つておしまひ。行けといつたら。このいけない畜生。

犬 はい、はい。行きますよ。御用が出来れば、すぐとんで歸つて來ますから。

猫 「内證でチルチルに」縛つておく方がいいんですよ。それでないと、またわるさをしますから。樹がみんな怒つてゐますから、今に困つたことになるでせうよ。

チルチル どうしよう。紐をなくしてしまつた。

猫 あそこへ葛が丈夫さうな繩をもつてやつて來ましたよ。

犬 「唸りながら」歸つて來るぞ、歸つてくるぞ。ふん痛風病の、喘息やみめ、おいぼれの背むしめ、おいぼれの古根つこめ。みんな猫の奴の差金なんだ。きつと、爲返しはしてやるぞ。貴様たち何をこそそ言つてゐるんだ。このユダヤ人め、この虎め、この謀反人め。ワ

ウ、ワウ、ワウ。

猫 ごらんなさい。誰にでも毒づくんです。

チルチル ほんたうだ。たまらない奴だ。やかましくつて何にも聞えやしない、葛さん、どうか。あいつを縛つてしまつて下さい。

葛 「こはこは犬の傍へ寄つて」噛み付きはしないかしら。

犬 「唸りながら」どうして、どうして、あべこべにおれはお前をキスしてやらうと思つてるんだ。見る、嘘ぢやあないぞ。出て來い。出て來い。このおいぼれめ。ひよろ／＼糸め。

チルチル 「杖でおどしながら」チロー。

犬 「チルチルの足許にからみついて尾をふり立てながら」坊つちやん、わたしはどうすればいいんです。

チルチル 腹ん這ひにねろ。葛の云ふことを聞くんだ。おとなしく縛らせるんだ。さもないと……

犬 「口の中で吠えてゐますと、その間に葛は「犬」を縛りました」ひよろ／＼糸め。首く／＼りの繩め。犢の綱め。豚の鎖め。ごらんなさい、坊つちやん。こいつがわたしの前足をねちるんです。わたしの喉をしめるんです。

チルチル だめだ。自分がわるいんだ。黙つてゐろ。おとなしくしてろ。たまらない奴だ。

犬 何と言つたつてあなたは間違つてゐますよ。あいつらは悪事を企らんでゐるんです。お氣をおつけなさい、坊つちゃん。ああ、こいつがわたしの口をふさいだ。もう物が言はれない。

薫 「犬を荷物のやうに縛つてしまふ」 こいつを何處へおきませう。うまく口輪をはめてやつた。これで、ぐうの音も出やしませんよ。

樹 そいつを、わしの樹のうしろの根へつないでおけ。そいつをどう處分したら一番いいか、後できめるから。

薫とポプラとが「犬」をかついで樹の樹のうしろへつれて行きました。

樹 濟んだかな。さて我々はこの厄介な證人、この謀反人の邪魔者を拂ひましたから、さてこれからは、正義と眞理の命する所に従つてゆるく御相談をいたませう。何もかも腹藏なく申上げるが、わしは深い悲痛な感慨にうたれてゐる。これは實に我々が改めて人間を裁き、人間をして我々の勢力を感じさせる一大事の場合なのである。これ迄人間が我々に加へた害悪や我々を苦しめて來た恐るべき不法に思ひ至ると、彼の上に下さるべき判決に

ついて微塵の疑問もない筈である。

樹と動物一同 ない、ない、ない。疑問などはない。絞罪だ。死刑だ。不法が甚だしすぎた。暴戻がひどすぎた。長くつゞきすぎた。叩き潰せ。喰つてしまへ。すぐに。すぐに。

チルチル 「猫に」 みんなどうしたいといふの。おこつてゐるの。

樹 心配しないでもいいんですよ。みんな少し春の來ようが遅いと云つて、ぶつ／＼いつてゐるんです。わたしに任せてお置きなさい。いゝやうにしますから。

樹 只今、満場一致の賛成を得ましたのは當然であります。そこで我々の次ぎに決定しなければならぬ問題は、人間の復讐を避けるためには、いかなる形式の處刑を用ひるのが最も實際的であり、最も容易であり、最も迅速で且最も確實であつて、よし森の中に轉つてゐる子供らの死骸を人間が発見しても、そこに何の痕跡ものこらないやうにする事ができるかと云ふ事である。

チルチル みんな何の話をしてるんだらう。何處へ行かうといふんだらう。僕もう飽き／＼してしまつた。あの人は青い鳥をもつてゐるのだから、早く渡してくれるといふんだがなあ。野牛 「前に進んで」 最も實際的で且最も確實な方法は、この角で一つき臍の上をづぶりやすることだ。一つついてやらうかな。

樹 誰だ、ものをいつてゐるのは。

猪 野牛です。

牝牛 あの人、黙つてりやいゝぢやないかね。わたしこんなことにかゝはりたくはないよ。御覽、あそこの青い月の光のあつたつてゐる野原に、甘さうな草がたと生えてゐるぢやないか。あれが喰べたいよ。わたしは、する用がたとあるんだ。

牡牛 おれもさうよ。だがおれは何にでも初めから賛成だ。

猪 首をしめるんなら、わたしの一番高い枝を貸しませう。

鳥 それからわたしは首くゝりの縄の圈をね。

縦の樹 小さい棺をこしらへるなら、四枚板を削りませう。

絲杉 ではわたしは墓地の永代保証に立ちませう。

柳 一番手輕な方法は、わたしの領分の河のどれかへ溺らせればいゝのです。その役を引きうけませう。

菩提樹 「仲裁に入つて」 まあ、まあ、そんなにまでする必要が實際あるでせうか。まだ極く子供なんだからなあ。どうですね。子供らのまはりに垣を結つてとち籠めておいたら。もう何もわるさはできないでせう。その垣はわたしがやりますよ。

樹 しやべつてゐるのは誰だ。菩提樹の甘つたるい聲のやうだつたが。

縦 さうです、菩提樹です。

樹 では裏切者は獸の仲間だけではない。吾々の仲間にもあるんだな。我々はこれまで、果物の樹の不義を残念に思つてゐたのだが、しかしあいつらは元來眞の樹の仲間ではないのだから、まだしもだ。

豚 「小さな眼を食慾さうにくりく動かしながら」 わしは、まづあの小娘から先きに喰べたい。きつと柔かくつておいしからう。

チルチル あいつ何を言つてるのかしら。やい、待て、こん畜生。

猫 どうしたといふんですかねえ。でも、何だか様子がいけなくなるやうですね。

樹 靜かに。我々の決定すべきことは、我々の中の誰が最初に人間の子を撲りつける名譽を荷ふかといふことだ。誰が人間の誕生以來我々を脅し來つた危難中の最大危難を、我々の頭上から追ひのける名譽を荷ふかといふことだ。

縦 この名譽は當然我々の大王であり、長老であるあなたの上に落つべきです。

樹 今、物を言つたのは縦だな。いやはや、とんだことだ。わしは年をとりすぎたよ。目は見えないし、體は働かないし、腕はしびれて、いふことをきかぬ。何かといふより、これは

あなたに願はう。いつも、青々して、いつも眞直ぐで、達者さうなあなたに、大抵の樹は誕生の初めから知つてゐるあなたに。どうかわしに代つて、この名譽をうけて頂きたい。我々の救済といふこの高尚な行爲に對する名譽をうけて頂きたい。

縦 いや、どうも御老人ありがたう、だがわしは既に二人の犠牲を埋葬する名譽を引きうけてゐますから、その上には仲間たちの嫉妬をおこす懼れがありませう。そこで我々に次いで、一番年長でもあり、名譽もあり、上等な棍棒をたづさへてゐられるのは山毛樺君だと思ふ。

山毛樺 御承知でせうが、わたしはすつかり蟲に食ひ込まれて、棒はもう役に立ちません。しかし楡君と絲杉君は有力な武器を持つて居られます。

楡 御推薦を頂いて何より有りがたいが、困つた事にわたしは、眞直に立つてゐるのがやつとだ、といふのは今晚土龍に足の親指を嚙られましたね。

絲杉 わたしのところは甚だ結構ですが、兄弟の縦君と同様子供らを埋葬する特權はないにしても、墓地の上で泣いてやる役は、どうしてもわたしでせうし、それだと一人で何もかも引きうけることになつて不公平でせう。一つポプラ君に聞いて下さい。

ポプラ 何わたしに。まじめで言つてゐるんですか、だつてわたしの樹は子供の肉より柔か

ですよ。それに、どうしたのだから知らないが、熱で體がふるへてしかたがないのです。まあこの葉の様子を見て下さい。どうも、今朝明け方風をひいたに違ひない。

楡 「とう／＼痲癩を起して」 君たちは、人間がこはいのだ。こんなひとりぼつちで、武器もなんにも持たない子供でも、奇妙にこはい。それだ。その奇妙なこはさで、人間はこれまで我々を奴隷にしてゐたのだ。どうだ、違ひなからう。よろしい。どうせかういふ事になつて來たのだし、またとない好機會なのだから、よろしい、この通り、年は寄つて跛で體は利かぬし、目も見えないが、わしは一人で先祖代々の怨敵に向つてゆく。子供はどこにゐる。

かう云つて楡の大王は杖の先でさぐりながらチルチルの方へ向つて行かうとしました。

チルチル 「かくしから、ナイフを出して」 あのおいぼれが大きな杖をふりまはしてくるのは、僕に向ふ氣なんだな。

樹たち一同 「奇妙に逆らへないやうなナイフの光を見ると、きゃつと悲鳴をあげて、みんな、わり込んで行つて楡の大王を引き止めました」 ナイフです。お氣をつけなさい、ナイフです。

楡 「身をもがきながら」 離せ。何だ、かまふことがあるものか。ナイフだらうが斧だらうが。引つぼるのは誰だ。何だ。みんなそこにゐるのだな。みんな逃げたいのだな。「杖を抛り出して」よし、勝手にしろ。恥をしれ。獸たちの中誰かに加勢してもらはう。

野牛 よし来た。おれが引きうけよう。この角で一突きだ。

牡牛、牝牛 「尻尾をつかまへて止めながら」何を餘計なお世話だよ。ばかなまねをおしでない。いけないことだよ。困つたことになるぢやないか。爲かへしをうけるのはわたしたちだよ。うつちやつてお置き。そんな事は悪い獣のすることだよ。

野牛 うんにやく。おれのする爲事だ。まあ見てゐろ。氣をつけろ。止めたりなんかするとひどい目に逢はせるぞ。

チルチル 「きい／＼叫び聲を立ててゐるミチルに」こはがることはないよ。僕のかげにかくれておいで、ナイフをもつてゐるのだから。

鶏 小僧さん、なか／＼元氣があるなあ。

チルチル よし、いよく／＼みんな僕にかゝつて來ることにきめたんだな。

驢馬 さうともさ、ちびめ、それが今迄わからなかつたのかい。

豚 お祈でもいふがい。最後の時が來たのだぞ。だが小娘をかくすことはならないぞ。おれが目の保養にするのだから。おれはまづあれから先に食べようと思ふ。

チルチル 僕はお前たちに何もしやしないぢやないか。

羊 何もしないと、この小僧。わしの弟に妹が二人と、をちさんを三人、をばさんと、おぢ

いさんとおばあさんまで食べておきながら。待つてる、待つてる。お前が叩き倒されれば、はじめてわたしにも齒のあることが分かるだらう。

驢馬 おれにも蹄があるぞ。

馬 「威張つて地を踏でこつ／＼やりながら」眼に物を見せてやるぞ。齒で噛みさいてやらうか。脚で蹴とばしてやらうか。「これ見よがしにチルチルの方へ向つて行きますと、チルチルはナイフをふり上げて、あべこべに向つて行きました。馬は急にこはくなつて、背中をむけて一生懸命かけ出しました」こら。だめだ。それは違ふ。そんな法つてあるもんか。あべこべに向つてくる奴があるもんか。

鶏 「思はず感嘆して」誰が何といつたつて、小僧さん、勇氣があるなあ。

豚 「熊と狼に」みんな、一緒にかゝらうよ。わしはうしろから加勢しよう。二人を叩き倒して、女の子が倒れたら分けて食べよう。

狼 君たちは前からかゝれ、おれはぐる／＼まはりをやつてやる。「狼はチルチルのぐるりをまはりました。そしてうしろから殆どチルチルを引き倒しかけました」

チルチル ユダヤ人め。「片膝で起上がつて、一生懸命ナイフをふりまはしながら、悲鳴をあげてゐる妹をかばつて闘ひました。けれどだん／＼疲れて危くなつた様子を見ると、獸も樹ものこらず集つて來

て、打ち倒さうとしました。急に暗くなりました。チルチルは夢中になつて、加勢を呼びました」加勢しろ、加勢しろ。チローや、チローや。「猫」は何處にゐるんだ。チロー。チレット、チレット。来てくれ〜。

猫 「遠くにはなれてゐて偽善者らしく」行かれませぬ。前足を折られました。

チルチル 「打つてかゝる奴を拂ひながら、一生懸命防戦して」加勢しろ、チロー、チロー。もうとても防ぎきれない、あんまり大勢なんだもの。熊だ。豚だ。狼だ。驢馬だ。縦だ、山毛棒だ。チロー、チロー、チロー。

やつと噛みきつた繩をうしろに引きずつたまゝ、「犬」は櫛の根から驅けて出て、樹や、獸たちを蹴て押しつけながら、チルチルの足もとに轉がるやうに飛んで来て、はげしく防ぎ闘ひました。

犬 「手あたり次第に噛みつきながら」さあ〜坊つちゃん、こはいことはありません。みんなやつつけてやりませう。わたしの齒がどんなに利くか見て下さい。それ熊め、その肥つた向ふ脛に一つ行くぞ。さあ、此度は誰だ、噛まれたい奴は。それ豚に一つ。それ馬に一つ。それから野牛の尻尾にも。やい見ろ、山毛棒のズボン破いてやつた。櫛の袴を裂いてやつた。縦の奴、ほう、逃げだしたな。何しろあつた。

チルチル 「弱つて」僕もうだめだ。絲杉の奴、うんと頭をなぐりやつた。

犬 やつ。柳の畜生め、前足を折りやつた。

チルチル みんな引つ返して来た。みんなかたまつて来た。此度は狼だ。

犬 待つてらつしやい。あいつに一つ噛みついてやるから。

狼 馬鹿だな。おい兄弟、あの小僧の親父は、お前の子狗を七匹まで川で殺したんだ。

犬 その通りだ。だが、結構さ。あいつらは、みんな、お前に似た面をしてゐたんだから。

樹、獸一同 裏切者、馬鹿、謀反人、悪黨、阿呆、ユダヤ人。うつちやつておけ。子供は、どうせ殺されるんだ。此方の仲間に入れ。

犬 「いよく熱誠を現して」だめだ、だめだ、おれはひとりでお前たちに向つて見せる。いやなことだ。いやなことだ。おれは神さまに仕へるのだ。一番えらいものに、一番大きな者に仕へるのだ。「チルチルに」お氣をおつけなさい。熊ですよ。野牛に用心なさい。あいつの喉笛に食ひついてやらう。あつ、蹴つたな。驢馬の奴齒を二枚折りやつた。

チルチル チロー、僕やられた、あつ痛い、楡の奴が撲つた。ほら、手から血が出てゐる。狼か、豚の奴だ。

犬 お待ちなさい、坊つちゃん。キスして上げませう。そらなめて上げますよ。これでいいんですよ。わたしのうしろにかくれていらつしやい。もうかゝつて来やしません。え、ね。

やあ、また引つ返して来やがった。此度は大變だぞ。しつかりしなきやならないぞ。

チルチル 「地べたに倒れて」いけない、もうだめだ。

犬 「耳を立てながら」おや、誰か来る、音がしますよ、匂ひがしますよ。

チルチル 何處に、誰がさ。

犬 ほら、ほら、あすこに。「光」です。「光」が見つ付けてくれました。もう大丈夫ですよ。坊つちやん。キスして下さい。助かりましたよ。ごらんなさいね。みんなさわいでゐます。退きかけました。こはがつてゐるのですよ。

チルチル あゝ「光」だ。「光」だ。早く来て下さい。大いそぎで。みんな謀反したんです。みんなでかゝつて来たんです。

「光」が出て来ました。「光」が進んでくると、曙が森の上へのぼりかけて、そこらが明るくなって来ました。

光 どうしたの。何が始まつたの。まあ、馬鹿だねえ。気がつかつなかつたの。ダイヤモンドをお廻しなさいな。みんな静かになつて、くら闇に消えて行つてしまひますよ。そしてあれらの腹の中もわからなくなりますよ。

チルチルはさういはれてダイヤモンドをお廻しました。すると樹の精たちはのこらず幹の中へ逃げ込んで、後はびつたりしまつてしまひました。獸の精たちも、姿をかくしました。たゞ平和な牝牛や、

羊が遠くの方で草を喰べてゐるだけで、森の中はまた静かな昔に戻りました。チルチルは呆れた顔をしてそこらをなぐめました。

チルチル みんな何處へ行つたの。一體どうしたと云ふの。気が違つたのかしら。

光 いゝえ。いつでも、みんなあゝなのさ。たゞお互ひに見えないから知らないだけさ。だから言つたでせう。わたしのゐない時にあれらの目をさませるのは危いからつて。

チルチル 「ナイフを拭きながら」何にしても、「犬」がゐないで、このナイフがなかつたら大變だつた。僕、みんなが、あんなに意地がわるいとは思はなかつた。

光 分かつたでせう。人間はこの世の中では、いつもたつた一人で萬物と闘つてゐると云ふ事が。

犬 坊つちやん。怪我をひどくしやしませんか。

チルチル 大したことはないよ。ミチルにはなほさら觸らせもしなかつたよ。けれどチロー、可哀さうに、お前は口中血だらけにして、前足を挫いたぢやないか。

犬 なあに、何でもありませんよ。明日になれば痕ものこりやしません。だが随分ひどい戦ひでしたね。

猫 「藪の中から跛ひきく出て来ました」ほんとにさうでしたね。牛の奴、角でお腹を、いやと

いふほど突いたんです。痕は見えないでせうが、随分痛むんですよ。その上、櫛には前足を折られるしね。

犬 どつちの足だ、見せて貰ひたいや。

ミチル 「猫」を撫でながら「可哀さうに、チレットや、さうだつたのかい。お前何處にゐたの、あたし見えなかつたわ。」

猫 「偽善者らしく」お嬢さん。わたしね。はじめにあのそら、お嬢さんを食べようとしてゐた豚がゐましたね。あの畜生をやつつけてやらうとした時にひどくやられましたね。それから、櫛にうんとひつばたかれて、目をまはしてしまつたのですよ。

犬 「猫」に向つて小聲で「やい、きさまには今に言つてやりたい言葉が二つあるんだ。覺えてゐやがれ。」

猫 「ミチルに向つてかなしさうに」お嬢さん、チローがわたしをいぢめるんですよ。わたしをひどい目にあはせようとしてゐるんですよ。ごさいますよ。

ミチル 「犬」に「お前、おかまひでない。ほんとにいけな畜生だよ。」

みんな出てゆきました。

——幕——

——第四幕——

第六景幕の 前

チルチル、ミチル、「光」、「犬」、「猫」、「パン」、「火」、「砂糖」、「水」、乳が出て来ました。

光 妖女のペリリウンヌのところから、事によると青い鳥はこゝにゐるかも知れないと言つて来ましたよ。

チルチル 何處に。

光 こゝにさ。その塀のうしろの墓地にさ。墓地の中にある死人の中で、隠してもつてるものがあるらしいのだよ。誰だか一つ探して見よう。一通り調べて見よう。

チルチル 調べるんですつて。それはどうするの。

光 極く何でもないことさ。眞夜中にあんまり死人たちをひどくおどかさないうちに、ダイヤモンドを廻すのさ。お墓の中から出て来る所を調べるか、出て来ない者は、お墓の中を

調べて見るんだね。

チルチル おこりやあしないかしら。

光 そんな事はないよ。まるで気がつかずにゐるのでせうよ。死人は騒がれるのは嫌ひだが、どうせ眞夜中すぎには、出て歩くのがくせになつてゐるんだから、何とも思やしないんですよ。

チルチル どうして「砂糖」と「パン」と「乳」はあんなに蒼い顔してゐるんだらう、どうして物も言はないんだらう。

乳 「ひよろ／＼しながら」わたし倒れさうな気がしますわ。

光 「小聲で、チルチルに」うつちやつてお置き。みんな死人をこはがつてゐるんだから。

火 「せかく／＼歩き廻りながら」おれは死人なんかこはくはない。おれは死人を焼きつけてゐる。昔は死人をのこらず焼いた時もあった。あの時の方が今よりかよつぽどおもしろかつた。

チルチル それからチローもどうしてふるへてゐるんだね。お前もこはいのかい。

犬 「齒をカチ／＼やりながら」わたしがですつて。ふるへてなんか居ませんよ。ちつともこはくはありませんよ。あなたがいらつしやるならわたしも行きますよ。

チルチル それから「猫」は何にも言ふことはないんだね。

猫 「神祕めかして」わたしにはわかつてゐますからねえ。

チルチル 「光に」あなたは来てくれるでせう。

光 いゝえ。わたしは皆と一緒みんなに墓地の門口で待つてゐる方がいゝのよ。さういふ時がまだ來ないのだからね。「光」はまだ死人たちの中へ入はいつては行けないんですよ。だからあんたはミチルと二人だけ、こゝに残つてゐるのですよ。

チルチル チローも一緒にのこつてゐちやわるいの。

犬 さうです、さうです、わたしはこゝに居りますよ。どこでも坊つちやんと御一緒にゐたいんです。

光 いけない、妖女からかたく言ひつかつたんだから。それに何もこはい事はないんだよ。犬 よろしい、よろしい。なあに何でもありませんよ。坊つちやん、もしか死人どもがいちの悪いことをしたら、これだけやればいゝんです。「口笛を吹く」さうすればすぐ出て來ますよ。森の中の時と同じことですよ。ワウ。ワウ。ワウ。

光 さあ、それでは子供たち、さやうなら。わたしはさう遠くは行きませんがね。「子供たちを接吻する」わたしを愛してくれる人や、わたしの愛してゐる人には、いつでもわたしは

逢へるのだよ。「品物や獣たちに」お前たちはみんな、こちらへ。

品物や獣たちは一緒に出て行きました。子供たちは舞臺の真中にのこりました。幕が上がりますと第七景がそこにはあらはれました。

第七景墓 地

夜、月の光、或田舎の墓地。お墓だの、草の生えた土饅頭だの、木の十字架だの、墓の墓石だのが
ごたくと並んでゐました。

チルチルとミチルとは石碑の側に立つてゐます。

ミチル あたしこはいわ。

チルチル 「少し氣味の悪い様子で」僕ちつともこはかない。

ミチル ねえ、死んだ人、悪い人でせうか。

チルチル どうしてそんなことがあるものか。生きてはゐないんだもの。

ミチル にいさん。死んだ人見たことがあつて。

チルチル あゝ先に一度見たことがあるよ。極く小さかつた時に。

ミチル ねえ、どんな風をしてゐて。

チルチル 眞白でね。それは静かに、すっかり冷たくつて。口を利かなかつたよ。

ミチル あたしたちこれからそれを見るの。

チルチル それはさうさ。「光」がさう言つたらう。

ミチル どこにゐるんでせうね。

チルチル こゝにゐるんだよ。草の下か、あの大きな石の下に。

ミチル 一年中あそこゐるんでせうか。

チルチル あゝ。

ミチル 「平たい臺石を指して」これ、死んだ人たちのお内の戸なの。

チルチル あゝ。

ミチル お天氣がいゝと出て歩くの。

チルチル 夜だけしか出られないんだよ。

ミチル どうして。

チルチル だつて肌着だけしか着てゐないんだもの。

ミチル 雨がふつても出るの。

チルチル 雨がふれば内にゐるんだよ。

ミチル お内の中綺麗でせうか。

チルチル 大へん狭苦しいんだつて……。

ミチル 小さい子供もゐるんでせうか。

チルチル そりやあさうさ。死んだものはみんなゐるんだよ。

ミチル さうして、何を食べて生きてゐるんでせう。

チルチル 木の根を食べてるのさ。

ミチル それ、今見られるの。

チルチル あたり前さ。ダイヤモンドを廻せば何でも見えるよ。

ミチル 何ていふでせうね。

チルチル なあに何にも言はないさ。話なんかしないんだから。

ミチル どうしてお話しないんでせう。

チルチル 何にも言ふことがないんだよ。

ミチル どうして言ふことがないんでせう。

チルチル うるさいなあ……。

しばらく無言。

ミチル いつダイヤモンドを廻すの。

チルチル 「光」がいつてたらう。夜中になつてなるだけ死んだ人たちの邪魔にならない時分に廻すのだつて。

ミチル 夜中になると、どうして邪魔にならないんでせう。

チルチル その時分になると息をしにみんな外へ出て来るんだ。

ミチル まだ夜中にはならないの。

チルチル お寺の時計が見えるかい。

ミチル えゝ小さな針まで見えてよ。

チルチル それ夜中の時計が打つところだ。ほらね、聞えるだらう。

時計が十二時を打つ。

ミチル あたし歸りたいわ。

チルチル まだだよ。これからダイヤモンドを廻すんだから。

ミチル いゝえゝいけなわ。あたし歸りたいわ。あたし恐いわ。にいさん。あたしこはいわ。こはいわ。どうしませう。

チルチル 何にも危いことはないんだよ。

ミチル あたし死んだ人見るの厭。あたし見るの厭。

チルチル よし〜見ないでもいゝんだよ。目をふさいでおいで。

ミチル 「チルチルの着物につかまりながら」にいさん、あたしみるの厭。ほんとにあたしだめよ。だめよ。あれ、みんな土のなかから出て来てよ。

チルチル そんなにぶる〜することはないよ。死んだ人、ちよいとの間出てくるだけだから。

ミチル でもにいさんだつて、ふるへてゐるわ。きつとこはいわ。

チルチル さあ今だ。ぐづ〜しちやあゐられない。

チルチルはダイヤモンドを廻しました。誰も無言で立ちすくんだまゝ、氣味のわるい時間がしばらくたちました。やがてだん〜に十字架がよろ〜して、土饅頭の口が開いて、お墓の臺石が上に持ち上がりました。

ミチル 「チルチルに寄りかゝつて身を屈めながら」出てくるわ。出てくるわ。

その時口を開いた墓の、そこからもこゝからも水蒸氣のやうな花の精氣が、はじめは弱々しくいぢけたやうに上がつて来ました。それから眞白なうひ〜しい花の苔になり、だん〜に繁つて高さもつて、数もずつと殖えて、ぐん〜そこらのものをばすべて蔽ひかくすやうに墓地一杯にひろがつて、不思議な楽しい天國の花園のやうな景色に變へてしまふと、やがて朝の光が上つて来ました。

露がきら／＼と光り、花は一度に開き、風は木の葉の中でさ／＼やき、蜜蜂は唸り、鳥は目をさまして太陽と生命によせる讚美の聲を空にあふれさせました。びつくりして魂をなくしたやうに、チルチルとミチルは手を携へて花の中を歩きました。そしてお墓のあつた跡をさがして見ました。

ミチル 「草の中をのぞきながら」死んだ人はどこに居て。

チルチル 「これも同じくのぞきながら」死んだ人なんかいないんだ。

——幕——

第八景 美しい雲を描いた幕の前

チルチル、ミチル 「光」「犬」「猫」「パン」「火」「砂糖」「水」「乳」が出て来ました。

光 わたし此度こそは青い鳥をつかまへたと思ひますよ。全體もつと前からそれを思ひつく筈だつたのだがねえ。ところが今朝やつと、ちやうど曙の中で氣力をとり返した時に、まるで空から光がさし込むやうにこの考がさし込んで來たのさ。わたしたちは今魔法の園の入口にゐる。そこでは「運命」が人間一切の「喜」と一切の「幸福」の番をしてゐるのだよ。チルチル それは澤山ゐるの。とれるかしら。みんな小さいの。

光 小さいのもあるし、大きいのもあるよ。肥つたのもあるし、やさしいのもあるよ。——それは綺麗ながあるかと思ふと、もう見るも厭なものもあるのさ。でも極く見つともないのだけは、とうの昔園の中から追ひ出されて、今では不幸の棲へ遁げ込んでゐるのさ、でもね、その不幸といふのは、つひお隣の洞穴の中に住んでゐてね、幸福の園とはいはば蒸氣のやうな、薄い幕のやうなもので爲切がついてゐるだけだし、それも始終「正義」の峯や「永遠」の谷から吹いてくる風のために、吹きまくられてゐるといふことを忘れてはなら

ないのよ。そこでわたしたちは、すつかり身ごしらへをして、十分用心をして出掛けなければいけない。當り前からいふと、「幸福」は極く人の善いものなだけけれど、でもやはり中には一番大きな「不幸」よりも剣呑な、不實な奴があるのだからね。

パン わたしはいゝ考がある。そいつらがけんのかな不實な奴だといふのですと、わたしたちはいつそみんなこの門口で待つてゐて、いざ子供さんたちが遁げ出さなければならなかつた場合に、すぐ加勢に駆けつけるといふことにしちやあどうですね。

犬 だめだ、だめだ、おれはどこへでも坊つちやんについて行くのだ。こはがる奴は外で待つてゐろ。おれたちはそんな臆病者や「とパン」を見て「謀反人なんぞに「と猫」の顔を見る」用はないんだ。

火 おれは行くぞ。何でもひどくおもしろいさうだから。しよつちゆう舞踏をやつてゐるといふからな。

パン 何かやはり食物がありますか。

水 「嘆息の聲で」わたしはまだ極く小さな「幸福」だつて知らないんだよ。やつとまあそれが見られるんだわ。

光 みんなお黙り。誰がお前さんたちの意見を聞きました。わたしはかう極めたのだからね、

「犬」と「パン」と、「砂糖」は、子供たちと一緒においで。「水」はあんまり冷たすぎるから外に待つておいでなさい。「火」はあんまり喧しやだからいけない。「乳」も物に感じやすい人だから、ぜひ門口にゐて貰ひたい。それから「猫」だが、これはまあ、どうでもいゝやうにおし。

犬 あいつはこはいんだ。

猫 わたしはちやうどいゝ序でだから、「幸福」のお隣にゐる昔馴染の「不幸」を訪ねてやりませわ。

チルチル それから。「光」さん、あなたは。あなたは来てくれるの。

光 わたしはこのまゝでは「幸福」のところへは行かれないのよ。あの連中は大抵わたしと向き合つたらとてもがまんができないでせう。でもかういふ厚いヴェールがあるから、これを深く被れば、幸福な人たちのところへも行けるのだよ。「長いヴェールをかぶり、隙間なくすっぽりかぶつてしまふ」わたしの靈魂の光がちよつとでもあの人たちに射してはならぬのだよ、あの人たちの中にはびく／＼恐がつてゐて、幸福でないものがあるのだからね。ほらね。かうしてしまへば、あの中で一番見つともない、一番肥つた下等なものでも、ちつともこはがることがないのだから。

幕が開いて第九景があらはれる。

第九景 幸福の園

1111

雲の幕が上がると、園の前方に、高い大理石の圓柱からできた大廣間のやうなものがあらはれます。柱と柱とのあひだには金色の網を通した紫色の幔幕が重苦しく下がつてゐて、背景一切をかくしてゐます、建築はヴェネチヤ派又はフランドル派の文藝復興期美術の就中肉感的な豪華な時代（ヴェロネーゼやルーベンスの時代）を想ひ起させる感です。花飾だの、いろ／＼の角だの、飾總だの、甌だの、像だの、鍍金細工だの、ごたく／＼と秩序なく散亂してゐます。廣間の眞中には、花紋石に銀の鍍金をしたお伽噺めいた大きなテーブルがあり、その上には蠟燭立だの、玻璃杯だの、金銀の皿だののびつくりするほど御馳走がごたく／＼のつてゐます。テーブルのぐるりには、この地球の上で一番肥つた「幸福」「贅澤」たちが、歌の肉や、不思議な果物や、水壺や、ひつくり返つた鼎やなどの間で、食べたり、飲んだり、きやつきやつ騒いだり、歌をうたつたり、ぶつかつたり、よろけたり、眠りこけたりしてゐます。みんなびつくりするほど、とてもほんたうと思へないほど肥りかへつてゐて、眞赤な顔をしてゐて、天鵞絨や錦にくるまり、金だの、眞珠だの、寶石だのを頭にいつぱいつけてゐます。美しい女奴隷がたえずお飾りをしたお皿や、泡の立つ飲物を運んでゐます。野卑な、それは騒々しい、野蠻じみた音楽のなかに、銅板を打合せる音が耳立つてきこえます。舞臺は重く、らしい赤い光を浴びてゐます。

チルチルとミチルと「犬」と「パン」と「砂糖」と、はじめ入つて来た時少し場うてがしてみんな右手の前方へ、「光」をとりまいてかたまつてしまひました。「猫」は一言も口を利かず、これも右手の方の奥へ向つて歩いて行つて、黒い幕を上げて、姿をかくしてしまひました。

チルチル あんなにうまいものを澤山食べてうれしさうにしてゐる肥つた人達は誰だらう。

光 あれがこの世の中で一番肥つた、誰でも肉眼で見える「幸福」どもだよ。どうもあんまり當てにはならないけれど、青い鳥だつてことによると、ちよいとでもこの人たちの仲間に迷ひ込んでゐないとも限らない。だからダイヤモンドをまだ廻してはいけけないのだ。ほんの形だけでも、廣間の此方の方をさがして見ようよ。

チルチル わたしたちあそこへ行つてもいゝの。

光 いゝともね。あの人たちは下等でもあり、大抵はまあ育ちの悪いものだけれど、人は悪くはないのだよ。

ミチル 何て綺麗なお菓子でせうね。

夫 それにあんなに肉がある。腸詰もある。小羊の脚に犢の肝臓もある。「叫びながら」何がうまいといつて、何が素敵だといつて、何がうれしいといつて、犢の肝臓にかなふものはないからなあ。

パン 上物の麥粉でこしらへた四斤パンをのけてはね。そのすばらしいのがあるなあ。いかにもうまさうだなあ、うまさうだなあ。わたしよりよつほど大きい。

砂糖 御免、御免、眞平御免。どうかねえ、どうかねえ。わたしはどなたの氣を悪くもしたかないんですよ、だがお前さんたちは、あの砂糖菓子も忘れてゐるんぢやありませんか。あの通りテーブルの光榮になつてゐる、いつて見れば、莊嚴華美この廣間の何物をも壓してゐる、いや何處の何をも壓してゐるあの砂糖菓子を忘れたのぢやないかな。

チルチル あの人たちが随分愉快さうな、幸福さうな顔をしてゐるなあ。あれ、きやつ／＼いつてゐる、笑ひこけてゐる、歌をうたつてゐる。何だかあの人たち此方を見たやうだ。

とう／＼一番「肥つた幸福」がテーブルをはなれて、大きなお腹を兩手に抱へて、大儀さうに子供たちの方へやつて來ました。

光 こはいことはないよ。愛想のいゝ人たちだからね。きつとお前さんたちを御馳走に呼ばうといふんだらう。それをうけてはいけない、何もうけてはいけないよ、でないと肝心な用向を忘れてしまふからね。

チルチル どうして。小ぢやなお菓子もいけないの。あんなに上等な、あんなに新しくつてお砂糖の衣が被つてゐて、甘い果物が一杯ついてゐて、クレームがはみ出す程入つてゐて。

光 みんな劍呑だよ、お前の志を挫いてしまふよ。人といふものは、自分のしなければならぬ務めのためには、何かしら犠牲にする心がなければならぬものですよ。丁寧に、しかしきつぱりとおことわんなさい。

一番大きな肥つた幸福 「チルチルの方へ手を差出しながら」チルチルさん、ごきげんよう。

チルチル 「びつくりして」え、あなた僕知つてるの。あなたどなたです。

肥つた幸福 わしは幸福仲間で一番肥つた、「お金持であることの幸福」です、で、わしはわしの兄弟達の名代として、あなたと御家族の人たちを、このはてしない饗應に御招待したいと思つて來たのです。此の世のほんたうの、肥つた幸福共の中でも選りぬきの連中に、あなたはとりまかれることになるでせう。失禮ですがその中の主なものを御紹介しましょう。これがわしの婿の「地面持である幸福」で、梨のやうなお腹をしてゐます。これが「満された虚榮の幸福」で、この通り立派なふくれ上がった顔をしてゐます。「満された虚榮の幸福」鷹揚にうなづく「この連中は、「喉の乾いてゐない時に物を飲む幸福」と「腹の空らない時に物を食べる幸福」で、二人は双生兒で、二人とも足は鰹鮓です。「よろ／＼しながらお辭儀をする」これは「何にも知らないといふ幸福」で、皆魚同様聾だし、「何にもわからないといふ幸福」は、蝙蝠のやうに目が見えない。この方は「何にも爲ないといふ幸福」、この方

は「必要以上に眠るといふ幸福」でね、二人とも手はパンの心だし、目は桃のジュリーさね。さて一番しまひに、こゝにゐるのは「はちきれさうな笑」で、口は耳から耳まで裂けてゐるし、誰もそれに立向ふものはないのですよ。「はちきれさうな笑」が腹をかゝへながら、おじぎをしました」

チルチル 「少し横つちよの方に立つてゐる一人の幸福を指して」それからあの、仲間にはひらないで、背中をむけてゐるのは誰です。

肥った幸福 あの男のことは聞かんがよろしい。あれは少し偏屈な男で、子供さんたちに紹介するのはむづかしい。「チルチルの手を握りながら」まあお出で。みんなまた宴會のやり直しをするとこだ。これで今朝から十二度めです。わしたちはたゞもう、お前さん方を待つてゐたのだ。あの通り騒ぎやどもが、お前さん呼び立ててゐるではないか。わしはとでも一々紹介してはゐられん、何しろ夥しい数だからね。「二人の子供に手を出しながら」さあどうぞ、お二人のためにお正客の席がとつてありますよ。

チルチル いゝえ、どうもありがたう、「肥った幸福」さん。僕はほんとに濟みませんが、ちよいとの間も行かれないんです。わたしたちは大へん急いでゐるんです。青い鳥を探してゐるんです。多分あなた、あの鳥何處にかくれてゐるか御存じないでせうね。

肥った幸福 青い鳥とね。はてな。さう／＼思ひ出した。誰だかいつかそんな話をしてゐたつけ。何でも、食べてはうまくない鳥だつてぢやないか。とにかく、そいつは、つひにわし共のテーブルに上つたことはないやうだ。といふのは、その鳥をあまり上等と思はんからだ。だがまあよろしいさ、もつといひものがありますよ。われ／＼の生活の仲間に入つて、われ／＼の爲る所をみんな見るがいゝのさ。

チルチル 何を爲るんです。

肥った幸福 そりや君、始終何も爲ないことにかゝつてゐるのさ。われ／＼は一瞬間の休みもない。飲む、食べる、眠る、な。いやはやそれは目がまはるやうだ。

チルチル それが面白いの。

肥った幸福 そりやあさうさ。面白くない筈がないさ、それがこの世の中にある一切だもの。

光 あなたはさう思ふの。

肥った幸福 「光」を指しながら、傍をむいてチルチルに「あの育ちの悪い若い女は何だね。

こんな話をしてゐる間に、第二級の「肥った幸福」どもは、せつせと「犬」と「砂糖」と「パン」を説きつけて、躁宴の中に引きずり込んでしまひました。チルチルがふと見ると、彼等は主人たちと仲よくテーブルに就いて飲んだり、食べたり、亂暴にそこらを跳ねまはつてゐました。

チルチル おや「光」さん、こらんよ。あいつらはテーブルに坐り込んでゐるよ。

光 お呼返し、でないと今に困ることになるから。

チルチル チロー。こら、チロー。おい、来いといふに聞えたかい、それから「砂糖」と「パン」の奴、誰が行けといつた。人のゆるしもうけないで、何をそこで爲てゐるんだ。

パン 「口中一杯物を入れていふ」行儀のいゝ言葉をつかつてもらひたいものだね。

チルチル 何だと。「パン」のやつ、生意氣をいふつもりだな。こら、何がきさまについたんだ。それから「犬」の奴、それで貴様、素直にしてゐるといふのか。さあ、すぐ来い、膝ついて来い、膝ついて。さつさとしろ。

犬 「ぶつ〜いひながら、テーブルの隅で」物を食べてゐるときにや、誰にもかまつちやゐられませんか、何にもきこえやしません。

砂糖 「お上手らしく」ごめん下さいまし、どうもせつかくお招きをいたゞきながら、さうあつたふたお暇することもできませんでしてねえ。御立腹になりますよ。

肥つた幸福 ほら見たまへ。みんなが君に例を見せてゐるぢやないか。さあ、みんな君を待つてゐるのだ。おことわりは承知せんよ。一つ溫和なる暴力に訴へることにするかな。おい、「肥つた幸福」ども、来て手つたへ。みんなで力づくにテーブルへ押し出して、厭でも

幸福にしてしまはうぢやないか。「肥つた幸福」共皆々歡喜の叫びごゑを上げ、できるだけ輕快に跳ねながら、いやがる子供たちを引きずつて行かうとしました。その間に「はちきれさうな笑」は「光」の腰の邊を力まかせに押へました。

光 ダイヤモンドをお廻し、今だよ。

チルチルは「光」の言附に従ひました。すぐと、舞臺は、言葉にいひつくせぬほど純い、神々しい蔷薇色の、調和もあり、輕快な光輝にてらされました。前景の重苦しい飾や、厚ぼつたい赤い幕などはばら〜にほどけて消えてなくなり、そこに輕快平靜な、昔話めいた甘い平和の園があらはれました。それは一種遠近の調和のある緑の宮殿で、勢の盛んな、光りかゞやく樹の葉の茂りが、繁茂はしてゐるが手入がよく行きとゞいてゐました。花たちの純な陶醉と、いたる處へ走つたり、流れたり、噴き出したりしてゐる水の、楽しい冷たさが、地平線の果まで、いやが上に幸福の悅樂をひろげてゐるやうに見えました。――

宴會の食卓は痕跡も残らず消え失せてしまひ、「肥つた幸福」共の天鵝絨や、錦や、花飾は園の中に吹き入る輝かしい風のためにまき上げられ、ばら〜にちぎれて、齒をむき出した假面と一緒に酔つぱらひ共のびつくりしてゐる足の下に落ちました。彼等は破れた風船玉のやうに見る〜魂をぬかれてしまひ、互ひに目と目を見あひ、目のくらむ不思議な光の中で目をばち〜させてゐました。到頭彼等は自分の本相、即ち素裸で、醜怪で、萎びて、情ないほんたうの姿を見つけて、恥かしくも、がっかりした悲鳴をあげました。その中で「はちきれさうな笑」の聲がはつきり耳立つて聞えしました。「何にも分らないことの幸福」は、一人すました顔をしてゐましたが、外の仲間、夢中で駆

けまはつたり、逃げ出さうとしたり、暗い隅があればかくれようとしたりしました。けれどきらきらと輝きわたった園の中には、陰影といふものがありませんでした。そこで多くの者はやけになつて、脅すやうに垂れてゐる幕の向ふに入つて行かうとしました。それは右手で角になつて、不幸の洞穴の戸をふさいでゐるのでした。彼等の一人々々が、物に襲はれたもののやうに、カーテンの縁を持ち上げると、恐ろしい洞穴の底から、さまざま、侮辱や罵詈や呪咀の聲が嵐のやうに起りました。「犬」と「パン」と「砂糖」とは、首をうなだれながら、子供たちの群に歸つて来て、こそ／＼とうしろに小さくかくれました。

チルチル 「肥つた幸福」共の逃げて行くのをちつと見つめながら「おや／＼何て見つともないさまだらう。みんな何處へ行くの。」

光 どうもあの連中は頭がどうかしてしまつたのだと思ふよ。みんな不幸の所へ逃げ込んでしまつて、あれで末々いゝことはない筈だからねえ。

チルチル 「そこらを見まはして驚きに打たれて」やあ、何て綺麗な園だらう、何て綺麗な園だらう。何處に來たのかしら。

光 同じところにゐるんだよ。違つたやうに思ふのは目のせゐですよ。わたしたちはやつと物の眞實を見るのだよ。ダイヤモンドの光にたへられる幸福の精を見るのだよ。

チルチル まあなんて綺麗なんだらうなあ。それに、お天氣のいゝこと、どうだい。まるで

眞夏のやうだなあ。いゝなあ、大勢僕たちと話しに出て來たやうだ。

ほんたうに、園は長い眠からぬけ出して來た天使のやうな形をしたもので一杯になり、調和よく樹と樹の間にすべり込みました。みんなきらく／＼する、やはらかな、細かい色調をもつた着物を着てゐます。それは例へば薔薇の目ざめ、水の微笑、曙の紫、琥珀の露などといふやうなものです。

光 可愛らしい、奇妙な「幸福」たちがやつて來た、わたしたちの案内にやつて來た。

チルチル あの子たちを知つてゐるの。

光 あゝ、みんな知つてゐるよ。わたしは自分を誰とも知らさずに、よくあの子たちの所へ行つたものだ。

チルチル まあ何て澤山ゐるんだらう。方々から集つてくるのだな。

光 もとはもつと澤山ゐたものだよ。それを「肥つた幸福」共がひどい目に逢はしたのだよ。

チルチル でもいゝや。あれだけでも残つてゐればいゝや。

光 ダイヤモンドの力が部屋中にひろがるほど、まだ澤山外にも見られるよ。この世の中には、人間が思ふよりもつと澤山「幸福」はあるのだから。けれど普通の人間にはそれが見つけられないのだよ。

チルチル 小さい子がやつて來た、駈けて行つて逢はうよ。

光 むだなことだよ。わたしたちに用のあるものはどうせこつちを通るのだから。外の者に

まで逢つてゐるひまはないよ。

小さい「幸福」の群、ふざけたり、笑ひこけたり、縁の圓の奥から駆け出して来て、子供たちのぐるりに環になつて踊る。

チルチル まあ何て可哀らしいんだ、何て可哀らしいんだ。何處から出て来たんだらう。誰なんだらう。

光 あれは「子供の幸福」ですよ。

チルチル 話をしてもいゝの。

光 むだだよ。あれらは歌をうたつたり、踊ををどつたり、笑つたりするけれど、まだお話はいできないのですよ。

チルチル 「跳ねまはりながら」ごげきんはいかゞ。ごげきんはいかゞ。まあ、あの肥つた子の笑ふことどうだい。何て可哀らしい頬ぺたをしてるんだらう。何て可哀らしい服を着てゐるんだらう。此の邊ではみんなお金持なの。

光 何の、こゝだつて、どこだつて、やはりお金持より貧乏人の方がすつと多いんだよ。

チルチル 何處に貧乏人がゐるの。

光 それを見分けることはできないよ。子供の幸福といふものは、地でも、天でも一番美し

いものに装はれるのだからね。

チルチル 「がまんがでなくなつて」僕あの子たちと踊りたいなあ。

光 それはどうしてもいけませんよ、もう時間がないのだからね。あの子たちが青い鳥を持たないことは分かつてゐるのだからねえ。それに、あの子たちは大いそぎにいそいでゐる。ごらん、もう行つてしまつた。やはり時間が惜しいのだよ。何しろ子供の時代は極く短いのだからね。

まだもう一つの「幸福」の群、前のよりは少し脊の高いのが、廣間の中へ駆け込んで来て、ありつたけの聲を張り上げて、「みんなゐる、みんなゐる、此方見た、此方見た」を歌ひ、子供たちをとりまいて、陽気な舞踏をやりました、それがおしまひになると、中の一人が、此の小樂隊の頭らしい一人が、進んで来て、チルチルに手を差しのべました。

幸福 チルチル、ごきげんはいかゞ。

チルチル また僕を知つてゐる子がゐる。「光」に僕は何處へ行つても段々人に知られて来るね。「幸福」に向ひ「君は誰なの。

幸福 君、僕を知らないの。こゝにゐる誰も知らないなんて、そんなことどうしてあるものですか。

チルチル 「少し困つて」だつて、ほんとに、僕知らない。逢つたおぼえがないんだもの。

幸福 おい、みんな聞いたかい。聞いたらう、きつと。この人まだ僕たちに逢つたことがないんだつてさ。「外の「幸福」どもどつと笑ひくづれる」だつて、チルチルさん、あなたの知つてゐるのは僕たちだけですよ。僕たちはいつだつて、あなたのぐるりにゐるんですよ。僕たちはあなたと一緒に食べたり、飲んだり、目をさまして、息をして暮らしてゐるんですよ。

チルチル あゝ、まあさうなの、僕わかつた、思ひ出したよ。でも君たちの名前を聞かしてくれたまへな。

幸福 あなたはやつぱり何にも知らないんですね。僕はあなたのお内の幸福の頭ですよ。それからこれはみんな「お内にゐる幸福」どもですよ。

チルチル 僕の内にも「幸福」はゐるの——。

「幸福」たちみなどつと笑ふ。

幸福 みんな聞いたかい。この人の内に「幸福」がゐるかつてさ。まあ、君は随分お馬鹿さんだなあ、扉や窓の破れるほど一杯「幸福」でつまつてゐるぢやあないの。僕たちは笑つたり、歌をうたつたり、壁を叩き落し、屋根を持上げるほどの喜をこしらへてゐるんですよ。でも僕たちが何をして見せても、君には何にも見えないし、何にも聞えないんだな

あ。まあ、どうぞこれからは、もう少しお利口さんになつて下さいよ。それはさうと僕たちの中の少し名前のあるものと握手して下さい。さうすれば、これから君が家へ歸つてからも、もつとわけなく、僕たちが見つかるでせう。そして一日のいゝ日の終つた時、君はあれらをどう微笑を以て奨励するか、どう面白い言葉で感謝するか、分かるでせう。まづたくあれらは君の生活を気軽に愉快にするためには、ありつたけの力を出して働いてゐるのですよ。まづ第一に、僕自身を紹介します、僕はあなたに仕へる「健康であることの幸福」です。僕は一番綺麗ではないが、一番大切なものです。此度逢つたら分かるでせうね。これは「純い空氣の幸福」で、殆ど透明です。これは「両親を愛することの幸福」で、鼠色の着物を着て、いつでも少しかなしさうでゐるのは、誰もふりむいてくれないからです。これは「青空の幸福」で、勿論青い色の着物を着てゐますし、「これは森の幸福」で、勿論緑の着物を着てゐます。窓へ出ればいつでもこの幸福たちは見られます。またこれは「日向の幸福」で、ダイヤモンド色の着物を着てゐますし、これは「春の幸福」で、きらきら光る碧玉の色をしてゐます。

チルチル そしてみんないつでもあんなに綺麗でゐるの。

幸福 えゝ、えゝ、さうですとも。人があれらの目を開けてやれば、毎日でも、どの家でも

日曜です。それから夕方になると、これが「日ぐれの幸福」で、世界中の王様のこらすよりも立派で、お供には「星の出を見ることの幸福」が、昔の神さまのやうな金びかな着物をしてついであります。それからお天気が變ると、これが「雨の幸福」で、眞珠を一杯つけてゐますし、それから「冬の火の幸福」は、凍えた手のために、綺麗な紫いろのマントを開きます。それから僕はまだ仲間うちの「一等い」のを紹介しませんでした、それは今ほどなくやつてくる明るい「大きな喜」の兄弟分見たやうなものだからです。その名は即ち「無邪氣な者の幸福」です、それは僕たちの仲間です。それからこれは、いや、全く大勢のすぎますね。もうそれは止ませう。何よりまづ「大きな喜」のところへ呼びにやりますせう。もうすぐしろの、天國の門口に来てゐるんですから、でもまだあなたの來たことは知らないんです。仲間うちで一番足の早い、「素足で露の中を駈ける幸福」を呼びませう。「跳ねまはりながらとび出して來た」素足で露の中を駈ける幸福に「すぐ行つて。

この瞬間に、黒の内襦袢を着た一種の魔の子が、聞きとれない叫び聲を立て、やたらと何かにつかりながら、チルチルに近づいて來ました。鼻を指で弾いたり、平手で叩いたり、せはしなく足で蹴つたり、狂氣のやうに跳ねまはりました。

チルチル 「びつくりして、ひどくおこつて」この亂暴な奴一體何だい。

幸福 何さ。あれは不幸の洞穴から逃げて來た「がまんにならない愉快」ですよ。あれは閉ちこめて置く所がないのさ。何處からでもぬけ出して行つて、「不幸」たちももうあれの番は爲たがらないんですよ。

魔の子はしばらくチルチルにからかつてゐました、チルチルも防ぎきれないで困つてゐましたが、ふと、元氣のいい聲で笑つて、來た時と同じやうに、ぶいと消えてしまひました。

チルチル あいつどうしたんだらう、少し氣が變なのかしら。

光 「チルチルに」どうだかね。きつとあんたも賢くならない前はあゝだつたらう。それはさうと待つてゐる間、青い鳥のことを聞いてごらん。お前の「お内の幸福」の頭がそれを知つてゐるさうなものだからね。

チルチル 何處にあるの。

幸福 あの人、青い鳥のゐるところを知らないんだつてさ。「内の幸福」一同、どつと笑ふ

チルチル 「いらくして」さうだ、僕は知らないんだ。何も笑ふことはないぢやないか。「また大笑ひ」

幸福 まあ、怒りたまふな。みんなまじめになれよ。この人は知らないんだよ、なあ、それを望むのはむりだよ。この人も世間の氣勢と同じやうに分からずやなんだ。光が「素足で露

の中を駈ける幸福」が「大きな喜」たちに話をしたと見えて、皆やつて来た。

春の高い美しい、天使のやうなすがたが、きら／＼光る着物を着て、そろ／＼とやつて来ました。

チルチル 何てまあ綺麗なんだらう。なぜあの人たち笑はないの。あの人たち、幸福ではないの。

光 人がほんたうに幸福なのは、笑ふ時ではないんですよ。

チルチル あの人たち誰なの。

幸福 あれは「大きな喜」ですよ。

チルチル 君、あの人たちの名前知ってるの。

幸福 勿論。僕たちはよく一緒に遊ぶんだもの。まづ第一に言はなければならぬのは、「正しくあることの大きな喜」で、不正が報復された時に、いつもにつこりしてゐます。でも僕はまだ若いからあの人々の笑ふ所を見たことがない。そのうしろにゐるのは、「善人であることの大きな喜」で、一番幸福なのだが、一番かなしさうです。あれが「不幸」に行くのを止めることはなく／＼むづかしいので、何しろ「不幸」を慰めてやるのが好きなんです。さういふわけであれにうつちやられると、わたしたちは「不幸」そのもののやうにみじめなものになつてしまふんですからね。右の方には「爲事を爲上げる喜」が「考へるこ

との喜」の隣にゐます。そのうしろに、「物の分かる喜」が立つてゐますが、あれはいつでも兄弟の「何も物のわからぬことの肥つた幸福」をさがしてゐるんです。

チルチル だつて僕その兄弟に逢つたよ。「肥つた幸福」たちと一緒に、不幸の仲間に入つてしまつた。

幸福 そりやあさうでせう。あれは悪くなつてしまつたのです。悪い仲間とつきあつてゐたものだから、全く腐つてしまつたのですね。でもそれを妹に云つてはいけません。するとあの女はさがしに行きたがつて、つまり僕たちの仲間から、一等美しいものがゐなくなつてしまふわけですからね。さてここに、「一番大きな喜」の中に、「美しいものを見る喜」がゐます、それは毎日僕たちを照らす光に二つ三つづつ新しい光線を加へて行くのです。

チルチル それからあそこの遠い遠い、金色の雲の中に、爪の先で立つてやつと見える位のところにある人は。

幸福 あれは「愛することの大きな喜」ですよ。まあどう君がやつて見たつて、あれをすっかり見るにはまだ小さすぎますよ。

チルチル それからあそこに、すつとうしろの方に、ヴェールをかぶつたまゝで、ちつとも出て来ないのは。

幸福 あれは人がまだ知らずにゐる「喜」たちだ。

チルチル 何を外の人たちは爲ようとしてゐるの。なぜ横つちよを向いたまゝでゐるの。

幸福 今來ようとする新しい「喜」を迎へてゐるのですよ。その「喜」は多分こゝでの一番純潔なものでせう。

チルチル 誰、それは。

幸福 あなたあの女の人を知らないの。まあよくごらんなさい、君の二つの目を魂のどん底におちつけて、よくごらんなさい。あの人君を見た、君を見た。手をひろげて此方へ駈けて來る。あれが君の「かあさんの喜」だ、「くらべるものもない、かあさんの愛の喜」だ。

方々から駈けよつて來た「喜」たちは、「母の愛の喜」を喝采して迎へました。そしてまた黙つてその前に退いてゐました。

母の愛 チルチルや、それからミチルや。まあお前たち、こゝに、ここにゐたのかえ。思ひもかけなかつたよ。わたしけふお内にゐて、それは寂しかつたよ。それなのにまあお前たちは天國まで上がつてゐたんだね。みんなの母親の魂が喜にかゞやく天國に上がつてゐたんだね。でもまあキスしておくれ、どつさりキスしておくれ。二人ともかあさんにお抱か
り、何が幸福だといつてこれほどの幸福は世の中にはないのだから。チルチル、お前笑つ

てゐるんぢやないの。お前もかい、ミチル。お前たちは見てゐても、かあさんの愛が分かん
らなかつたのだね。まあ、よくごらん、これはかあさんの目ぢやないか。唇ぢやないか、
腕ぢやないか。

チルチル うん、うん、僕おぼえてゐるよ。けれど分からないんだ。あなた、かあさんに似
てゐるけれど、でもずつと綺麗なもの。

母の愛 そりやさうともさ、わたしはもう年をとることがないのだからね。その上毎日新しい
力と、若さと、幸福とが増すのだよ。お前たちのにつこりする度に、年々わたしは若くなる
んだよ。内にゐると、それが見えない、けれどこゝでは何もかも見えて、眞實なんだからね。
チルチル 「驚きにうたれて、交るくちつと「母の愛」を見つめては、接吻して」それにこの綺麗な着
物はまあ、これは何でこしらへたの。絹なの、銀なの、それとも眞珠なの。

母の愛 いゝえ、これはキスと、いい顔と、抱つことと織つたのですよ。お前がキスするたん
びに、わたしには月の色なり日の色なりの光が増すのだよ。

チルチル おもしろいなあ。僕またかあさんがそんなお金持だとは知らなかつた。いつもそ
れをどこへしまつて置くの。それはとうさんが鍵をかつたあの戸棚の中に入つてゐるの。
母の愛 いゝえ、いゝえ、わたしはいつだつてこの着物を着てゐるのよ、けれど人間には見え

ないのさ、人間といふものは目が閉ぢてゐると何にも見えないのだからね。母親は誰だつて、子供を可愛がる時には、お金持なんですよ。もう貧乏なかあさんもなければ、器量のわるいかあさんもない、年をとつたかあさんもない。かあさんたちの愛はいつも喜の中でも一番美しい喜なんですよ。それにかあさんたちが、それは悲しさうな顔をしてゐる時でも、キスをしてもらうか、キスをしてやるかすればいい、すぐとその涙は目の底で星になつてしまふんですよ。

テルテル 「びつくりして「母の愛」の顔をながめ」ああ、さうだ、ほんたうだ、かあさんの目の中には一杯星がある。それはほんとに、かあさんの目だけれど、すつと綺麗だなあ。それからこれもかあさんの手だ。小さな指環をはめてゐる。おまけにいつかの晩ランプをつける時に火傷をした痕まであらあ。でもすつと色が白いなあ。それに肌がすつとやはらかだよ。その中から光が流れ出すやうだよ。内にゐる時のやうに、爲事しないの。

母の愛 いいえさ、それは同じことだよ。まあ、お前見たことはなかつたかい、この手でお前にかまつてゐる時は、いつだつてこんなに白くなつて、光がさすのだからね。

テルテル ふしぎだなあ。かあさん。聲までそつくりだよ。でもお内にゐる時よか、すつとお話がうまいなあ。

母の愛 お内にゐるとね、あんまり御用が多すぎて、ひまがないんだよ。でも何にもいはないでも、やはりみんな聞えるのだからね。さあ、これでお前わたしに逢つたのだから、明日また小家のお内へ歸つて、わたしがぼろ／＼の着物を着てゐても、分かるだらうね。

テルテル 僕内へかへりたくないや。かあさんこゝにゐるんなら、かあさんのゐる間、僕ここにゐたいや。

母の愛 でもそれは同じことですよ。わたしも下へ行くのですよ。わたしたちはみんな下へ行くのですよ。お前がこの上まで上がつて来たのは、つまりこれから下へ歸つてから、どういふ風にわたしといふものを見るか、それをはつきりおぼえるためだからね。わかつたかえ、テルテルや。お前は今だけ天國に来てゐると思つてゐるけれど、お前とわたしとがキスしあふ時は、いつでも天國にゐるんですよ。かあさんに二人はないのだしね、外にかあさんにはりはないのだよ。どんな子だつて、一人きりのかあさんなのだ。それはいつだつて同じかあさんで、いつだつて一番美しいかあさんなのだからね。たゞお前はかあさんをよくおぼえて、大事にすることを知らなければいけないよ。でもお前どうしてこゝまで上がつて来られたの。人間が地の上に住み着いてからこの方、始終たづねあぐんでゐる道がどうして分かつたの。

チルチル 「つゝましく片側に少し退いてゐる「光」を指さしながら」あの人が連れて来てくれたの。

母の愛 あの人誰なの。

チルチル 「光」さ。

母の愛 わたしあの人見たことがなかつたよ。あの人はお前たち二人を可哀がつて、大へん深切にしてくれるさうだね。でも何であゝ顔をかくしてゐるのさ。あの人顔を見せることはないのかえ。

チルチル いいえ。でもあの人、あんまりはつきり顔を見せると、「幸福」たちがこはがるだらうつて心配してゐるのだよ。

母の愛 でもあの人、わたしたちがあの人ばかり待ちわびてゐることを知らないんぢやないだらう。「外の「大きな喜」たちを呼ぶ」みなさん、いらつしやいよ、いらつしやいよ、皆さん。みんな早くいらつしやいよ。「光」がとう／＼来てくれましたよ。

「大きな喜」たちの中でざわ／＼いふ聲がして、みんな傍へ寄つて来て、「光だよ。」「光だ。」「光だ。」と呼び立てました。

物の分かる喜 「外の人たちを押しのかながら、来て「光」に接吻する」あなたは「光」なのね、わたしたちはちつとも知りませんでしたよ。それで、わたしたちはもう何年も何年もあなたを待

つてゐたんですよ。あなたわたしが分かりますか。わたしはもう長い間あなたをさがしてゐた、「物の分かる喜」でございますよ。わたしたちはそれは幸福ですけど、自分たち以上のものは見えないんですよ。

正義であることの喜 「代つて「光」を接吻しながら」わたしをぞんじですか。わたしはそれは長いことあなたを求めてゐた「正義であることの喜」でございますよ。わたしたちはそれは幸福なんですけれど、やはりわたしたちの影以上のものは見えないんですよ。

美しいものを見る喜 「これも「光」を接吻しながら」あなたわたしを御存じですか。わたしそれはあなたを好いてゐる「美しいものを見る喜」でございますよ。わたしたちそれは幸福なんですけれど、わたしたちの夢以上のものは見られないんですよ。

物のわかる喜 さあ、ねえさま、さあもう、いつまでわたしたちを待たせてお置きになるんですよ。わたしたちはもう十分強いし、十分純潔なのですよ。そのヴェールをおとり遊ばせ、それがわたしたちのために、やはり最後の眞實と最後の幸福とを隠してゐるのですから。ごらんなさい、姉妹たちはみんなお足の下に膝をついて願つてをりますわ。あなたはわたしたちの女王さまで、わたしたちの報酬ですもの。

光 「いよく、堅くヴェールをかぶつて」姉妹たち、わたしの綺麗な姉妹たち、わたしは主のお言

附を守つてゐるのよ。時はまだ来ないのよ。でもきつと今に打つでせう、さうしたらわたしまたもう恐怖も陰影もなしに歸つて来ますわ。さやうなら。さあみんな起きて、もう一度キスをしませうね、再會した姉妹のやうにね。ほどなくあらはれる明日の日を待ちながら。

母の愛 「光」を抱きながら」あなたはわたしの子供たちに、それは御深切でしたのね。

光 わたしは愛し合ふ人たちには、いつでも深切にいたしますわ。

物のわかる喜 「光の方へ行きながら」どうぞ最後のキスをこの額にね。

「二人は長い接吻をしあひました。やがてはなれて、顔を上げますと、二人とも目の中に涙が光つておきました。

チルチル 「びつくりして」どうしてあなた泣いてるの。「外の「喜」たちを見ながら」おや、みんな

も泣いてゐるんだなあ。でもどうしてみんな目の中に一杯涙をためてるの。

光 黙つて、いい子だから。

——幕——

——第五幕——

第十景 未來の王國

瑠璃のお宮の廣大な廣間です。——そこにはこれから生れる筈の子供が澤山待つてゐます。何處までつづくか見通しのつかないほどサファイヤ(青玉)の圓柱が並んでゐて、トルコ玉の圓天井を支へてゐます。そこにあるものは光でも、瑠璃を疊んだ敷石でも、最後の迫持が盡きてぼんやり光つてゐる遠景でも、それは極く小さなものまでも、現實の世界から遠ざかつた魔の國めいた、それは強い青色をしてゐました。たい圓柱の臺石と、柱頭と、要石かたわしと、二三脚の床几と、圓い腰掛だけが、眞白な大理石や雪花石で出来てゐるのが目立ちました。右手の方に圓柱と圓柱との間に大きな猫眼石の扉がいくつもありました。この扉はこの幕がおしまひ頃になると「時」がすつかり押し開けますが、扉の彼方は現實の人間世界に通ふ曙の港になつてゐます。

廣間のどこにもこゝにも、青色の長い着物を着た子供たちが行儀よく群がつてゐます。遊んでゐるものもあり、あちこちと歩いてゐるものもあり、話したり、夢を見たりしてゐるものもあります。大抵は眠つてゐますが、また圓柱の間で未來の發明のために働いてゐるものも澤山あります。子供たちの使つてゐる細工用の道具器具、組立ててゐる機械類、培養してゐる木や花や果實なども、お宮

の空氣と同じに不思議なきら／＼しい青色のものばかりでした。子供たちの中に交つて、もつと青白くて、もつとすきとほつた色の着物を着た、脊の高い人の姿がいくつか動いてゐました。その威厳をもつた、無言の美しい姿は天使のやうに見えます。

左側からそつと忍び込むやうにして、チルチルと、ミチルと、「光」とが、前の方の圓柱と圓柱との間をぬけて出て來ました。三人が出て來ると、青い子供たちの中がざは／＼し出して、みんな四方からよつて來て、見なれない客をとりまいて、物珍らしさうにその様子をながめてゐました。

ミチル お「砂糖」と「猫」と「パン」はどうして。

光 あれはこゝには入れないのさ。未來のことを知ると、言ふことをきかなくなるから。

チルチル それから「犬」は。

光 「犬」もやはり先々のことが分かるといけないのだからね。それでみんなお寺の穴倉に閉め込んで來ましたよ。

チルチル こゝは何處なの。

光 未來の王國へ來たんですよ。まだ生れない子供たちの國へ來たんですよ。ダイヤモンドのお蔭で、人間の目にかくれてゐる所をはつきり見ることが出来るのさ。青い鳥も多分ここにゐるでせう。

チルチル こゝに居るものは何でも青いから、鳥もきつと青いかも知れないなあ。「そこらを見

まはしながら」やあ、何もかも随分綺麗だなあ。

光 駆けてゐる子供を御覽よ。

チルチル みんなおこつてゐるのかしら。

光 そんなことはないのだよ。ほらみんなニコ／＼してゐるでせう。たゞびつくりしたのさ。

青い子供達 「段々と多く集まつて來て」生きてる子供たちだよ。來てごらんよ、生きてゐる

子供たちを。

チルチル 何故わたしたちを生きてる子供だなんていふの。

光 あの子たちはまだ自分が生きてゐないからさ。

チルチル ではあの子たちどうしてゐるの。

光 生れる時を待つてゐるのだよ。

チルチル 生れる時ですつて。

光 さうさ、地の上に生れてくる子供はみんなこゝから來るのだよ。みんな生れる日を持つてゐるのだよ。おとうさんやおかあさんが子供がほしいと思ふと、あすこにそら、右の方にあるあの大きな扉が開いて、そこから子供たちが出て行くのですよ。

チルチル まあ随分澤山ゐるんだなあ。随分澤山ゐるんだなあ。

一五〇

光 まだくたんとゐるんだけれど、すつかり見えないのですよ。何しろ時のおはりまで續いて生れるほどゐるのだからね。それはとてもかぞへきれないほどゐるんだよ。

チルチル それからあの脊の高い人、あれは誰なの。

光 誰もよくは知らないがね。何でもあれは守護の天女でね、人間の世がおしまひになつた後で、地の上に下りて行くのださうだよ。けれど物を聞いたりはいけないのだよ。

チルチル どうしていけないの。

光 それは地の祕密なのだから。

チルチル 外の小さい子供たちとはお話してもいいの。

光 いいともね。お友達にならなくてはいけませんよ。ごらん、あすこに外の子供たちよりも餘計物珍らしさうに見てゐる子がある。あの子のところへ行つて、お話をして御覽なさい。

チルチル 何といつたらいいでせう。

光 何とでも好きなことをお言ひな。いつもお友達に話をするやうに。

チルチル 手を出してもいいの。

光 いいともね。何も悪いことしやあしないよ。まあそんなに堅くならない方がいいよ。わたしは、はなれてゐませう。お前たちだけの方が氣樂でいいだらうから、それに。わたしはあの脊の高い青い人に話もあるから。

チルチル 「青い子供のところへ行つて手を差しのべながら」今日は。「指で子供の青い着物にさはりながら」これ何。

子供 「勿體らしくチルチルの帽子に手をかけながら」それぢや、これは。

チルチル これ。これ、僕の帽子です。君、帽子持たないの。

子供 ええ。これ何にするものなの。

チルチル これはね、「今日は」をいふときにも……それから、寒かつたりするときにも使ふのさ。

子供 寒いつてどんなことなの。

チルチル こんな風にぶるぶるつて震へる時さ。両手に息を吹きかけて、腕をこんな風にして歩くの。「力を入れて両腕を振る」

子供 地の上つて寒い。

チルチル あゝ時々冬になつて、火がないとね。

子供 どうして火がないの。

チルチル なか／＼費えだし、薪を買ふにはお金が要るから。

子供 お金つて何。

チルチル それでお拂ひをするのさ。

子供 へえ。

チルチル お金を持つてる人と持たない人とあるんだよ。

子供 どうして持たないの。

チルチル だつてお金持でないからでせう。君お金持ちなの。君、年は幾つなの。

子供 僕もうちき生れて行くのだよ。十二年のうちには生れるのだよ。生れるつていゝこと

かしら。

チルチル あゝあゝ、それはおもしろいよ。

子供 君どうして生れたの。

チルチル 思ひ出せないや。ずつと前だもの。

子供 地の上も、生きてる人間も、みんな綺麗だつてね。

チルチル あゝ、わるくはないよ。鳥もゐるし、お菓子も、おもちゃもあるからね。それをみ

んな持つてゐるものもあるし、ちつとも持たないものでも、ひとのをながめることだけはできるんだからね。

子供 おかあさんたちが扉口に立つて待つてゐるんだつてね。おかあさんたちいゝ人なの。

チルチル あゝさうだよ。世界中で一番いゝんだよ。それからおばあさんも、けどおばあさんたち、ちき死んで行つてしまふんだもの。

子供 死ぬんだつて。それは何のこと。

チルチル おばあさんたち晩に出て行つてしまつて、歸つて来ないんだよ。

子供 どうして。

チルチル どうしてだか知らないや。きつと悲しくなるんだらう。

子供 君ん所のも行つてしまつたの。

チルチル 僕のおばあさんがかい。

子供 おかあさんだかおばあさんだか、そんなこと知らないけれど。

チルチル うゝん、おかあさんとおばあさんとはちがふんだよ。おばあさんが先に行つてしまふんだよ。それは随分悲しいよ。僕のおばあさん、それは深切だつたんだよ。

子供 君の目どうしたの、眞珠が出来たの。

チルチル うゝん、眞珠ぢやないよ。

子供 ぢやあ何なの。

チルチル 何でもないんだよ。あんまり何もかも青いので、目がくらんだものだから。

子供 それ何ていふもの。

チルチル 何とは。

子供 それさ。その落ちてるもの。

チルチル 何でもないよ。小さな水だよ。

子供 それ目から出るの。

チルチル あゝ、人が泣くと出るよ。

子供 泣くつて何のことだらう。

チルチル 僕泣きはしないんだ、けど青いもののせゐなんだよ。けど泣く時もやつぱり同じ

だよ。

子供 人はよく泣くの。

チルチル 男の子はさう泣かないけど、女の子はよく泣くよ。こゝでは誰も泣かないの。

子供 いゝえ。僕泣くつてどんなことだか知らない。

チルチル さう。今におぼえるよ。君何をおもちやにしてゐるの。その大きな青い羽何なの。

子供 これ。これ、今に地の上へ行つた時に發明をするためなんだよ。

チルチル 何の發明なの。君、何か發明をしたの。

子供 さうさ。まだ聞いたことなかつたの。僕、地の上へ行つたらみんなを幸福にするものを發明するんだよ。

チルチル おいしいものなの。音のするものなの。

子供 だめだ。君何にも知らないんだよ。

チルチル 困つたなあ。

子供 僕、毎日それにかゝつてゐるの。もう大抵出来上がったのだよ。見せて上げようか。

チルチル あゝどうぞ。何處にあるの。

子供 こゝから、そら、この柱と柱との間から見えるよ。

もう一人の青い子供 「チルチルの側へ駈けて来て袖をひっぱつて」君、僕のも見て呉れるかい。

チルチル ああ、それは何なの。

第二の子供 人間のいのちをのばすための三十三通りの薬だよ。ほら、この青い塚の中に入つてゐるんだよ。

第三の子供 「群集の中から進んで出て」僕は誰も知らない光を見せて上げよう。「自分の體をすつかり非常な光の炎で光らす」随分不思議だらう。えい。

第四の子供 「チルチルの腕を引つばつて」来て、僕の器械を見て御覽。羽がなくつても鳥のやうに空を飛んで歩ける器械だよ。

第五の子供 うん、うん。僕の方が先だよ。月の中にかくれた寶を見つけるのだよ。

青い子供等 「チルチルとミチルのまはりに群りながら叫ぶ」うん、うん、僕の方へ来て御覽よ。……だめだ、僕の方がすつといふんだよ。……僕の方が立派な發明なんだよ。……僕のはお砂糖で出来てゐるんだよ。……あの子のなんかちつともめづらしかないよ。あの子は僕の考をとつたのだよ……。

此の大騒ぎの中に生きてゐる子供二人は青い工場の方へ引張つて行かれました。そこで小さな發明家達が一人々々理想の器械を動かして見せました。青色に廻る車輪、圓板、節動輪、起動輪、滑車、調革及び其の他の奇妙な、まだ名のついてゐない品物が幻のやうな霧の中で動いてゐました。めづらしい不思議な器械が澤山かたまつて飛び出して、天井の上へとび上がつたり、柱の下をはひまつたりしました。子供達は地圖や設計圖を展げて見せたり、本を開いて見せたり、青色の像の被ひをとつて見せたり、サファイヤ(青玉)やトルコ玉でこしらへたかと思はれるやうな、おそろしく大きな花やめづらしい果實を持つて來たりしました。

青い子供の一人 「大きな青い雛菊をかついて、はあくいひながら」僕の花を御覽よ。

チルチル 何だらう。分からないなあ。

青い子供 雛菊だよ。

チルチル おどろいた。車の輪位あるんだなあ。

青い子供 いゝ匂ひだらう。

チルチル 「匂を嗅ぎながら」すてきだなあ。

青い子供 僕が地の上に行けば、雛菊の花があんなに大きくなるんだよ。

チルチル それは、いつなの。

青い子供 五十三年四箇月と九日あと。

二人の青い子供が、一本の柱にぶらさげた枝燭臺のやうな形をして、とてもそれらしくない大きな葡萄の房をはこんで來ました。その實は梨よりも大きいのでした。

子供の一人 「葡萄の實を運びながら」僕のこしらへた果物はどうだい。

チルチル 梨の房だね。

子供 うそだよ。葡萄だよ。僕が三十になる時分には、葡萄がさうなるんだよ。僕はその方法を考へたのだから。

もう一人の子供「瓜の大きさほどのある青林檎を籠に入れてひよろ／＼しながら」それから僕のも、僕の林檎を見てくれたまへ。

チルチル だつてこれ、甜瓜ぢやないか。

子供 うゝん。うゝん。これは林檎だよ。しかも一番いゝんぢやないんだ。僕が生れると、林檎があゝなるんだよ。僕法式を考へたんだから。

もう一人子供「西瓜よりも大きい甜瓜を入れた青い手押車を押しながら」僕の小さな甜瓜を見てくれたまへ。

チルチル だつてこれ西瓜ぢやあないか。

甜瓜を持った子供 僕が地へ下りて行くと甜瓜がこんなにすばらしくなるのだよ。僕は九つの

惑星の王様の園丁になるんだ。

チルチル 九つの惑星の王様だつて。それは何處にゐるの。

九つの惑星の王「威厳のある様子で前へ出て来ました。まだやつと四歳位で、曲つた足でやつと立つてゐるやうに見えました」こゝにゐるよ。

チルチル へえ。君、大きないんだな。

九つの惑星の王「勿體りしく宣言でもするやうに」わたしのこしらへるものは大きいのだ。

チルチル 何をこしらへるの。

九つの惑星の王 わたしは太陽系の惑星の總聯盟をこしらへる。

チルチル「おどろいて」へえ、ほんたうに。

九つの惑星の王 法外な、測りしられない遠方にある土星と、天王星と、海王星だけは別として、あとはのこらす聯盟に入るのだ。「また威厳を見せて退きました」

チルチル おもしろいなあ。

青い子供 それから、君あれを見たの。

チルチル どれさ。

甜瓜を持った子供 ほら、あすこに柱の下で眠つてゐる子供があるだらう。

チルチル あゝ、あれか。

甜瓜を持った子供 あの子はね、地球の上に純粹の喜を持つて行くのだよ。

チルチル どういふ風にして。

子供「初めてチルチルと話した子供」まだ誰も持つてゐない考へで。

チルチル それからもう一人指を鼻の穴につゝ込んでゐる肥つた子供は、あれは何をするの。

子供 あの子は今に太陽の光が薄くなつた時に、地球を暖める火を發明する人だよ。

チルチル それから男の子と女の子と二人手を取り合つて、しよつちゆうキスしてゐるのは、あの人達、兄妹ではないの。

子供 うゝん、あれはをかしの奴らだよ。「仲好し」といふんだとさ。
チルチル なに、それは。

子供 僕知らないよ。「時」がさう云つて、からかつてゐるんだよ。あいつらは一日中お互ひに顔を見合つて、キスし合つたり、さよならを言ひ合つたりしてゐるんだよ。
チルチル 何故なの。

子供 お互ひに離れることができないらしいんだよ。

チルチル それからむづかしい顔をして、指をしやぶつてゐる薔薇色の顔の子供がゐるね。あれは誰なの。

子供 あの子は地の上から不正を無くさうと考へてゐるらしい。
チルチル へえ。

子供 それは随分大變な爲事なんだつて。

チルチル それからあの小さな髪の毛の紅い子供が、どこへ行くのか自分でも知らないやうな風をして歩きまはつてゐるのは何。あの子盲目なの。

子供 まだ盲目ぢやないよ。でも今にさうなるんだよ。よくあの子を御覧。あれは死を征服する役らしいのだよ。

チルチル それはどういふこと。

子供 僕よくは知らないよ。けれどそれは大變なことなんだつて。

チルチル 「柱の下や階段や腰掛などに眠つてゐる子供達の群を指しながら」それから、あの子供達みんな眠つてゐるんだね。随分澤山眠つてゐるんだなあ。みんな何にもしないの。

子供 何か考へごとをしてゐるんだよ。

チルチル 何を考へてゐるの。

子供 まだ自分でも分からないんだよ。でも地の上へ何か持つて行かなければならないんだからね。僕達は空手でこゝから出ることはできないんだからね。

チルチル 誰がさう云ふの。

子供 扉のところに立つてゐる「時」がさう云ふのさ。今に扉を開けると姿が見えるだらうが、それは随分退屈してゐるんだよ。

一人の子供 「廣間のうしろから駆けて来て、眩で群を押し下げながら」チルチル、今日は。チルチル おや。あの子、どうして僕の名を知つてゐるんだらう。

子供 「其の時駆けて来てチルチルとミチルをしたまかに接吻して」今日は、君どこも悪かないの。さあ僕をキスして下さい、ミチル、あなたもね。僕、にいさん達の弟になるんだもの、名前を知つてるのは不思議ぢやないでせう。みんながにいさん達こゝに来てゐるつて教へてくれたの。僕ちやうど部屋の向ふの隅にゐて考へごとをしてゐたの。おかあさんにさう云つて下さいな。僕いつでもいゝんだつて。

チルチル え、何。君、僕の所へ来るんだつて。

子供 あゝ、來年の復活祭の前の日曜日だね。僕小ちやいうちは、あんまりいちめちやいやだよ。僕にいさんたち二人の額にキスするのが大好きさ。おとうさんに搖籃のつくろひをしておいてもらつて下さい。内の人いゝ人なの。

チルチル いゝとも。おかあさん、それは随分やさしいよ。

子供 それから食べるものは。

チルチル 時によるさ。時によるとお菓子だつてあるもの。ねえ、ミチル。

ミチル お正月と七月十四日には、おかあさんがこしらへてくれるわ。

チルチル その袋には何を入れてもつてるの。何か僕たちにもつて来てくれたの。

子供 「高慢らしく」僕三つの病氣を持つてるの。猩紅熱と百日咳と麻疹と。

チルチル おやく、それだけかい。そしてそのあと、どうするの。

子供 それからあとは。さよならをするのさ。

チルチル ぢやあ生れたつてつまらないぢやないか。

子供 だつて自分でどうにもならないもの。

此の時、長く引いた、強い透きとほるほどの震動のやうなものが起つて、ひろがつて行きました。それは圓柱と猫眼石の扉から出てくるやうに見えました。その扉は今までよりはずつと鮮かな光をうけて來ました。

チルチル あれは何。

子供 あれが「時」だよ。扉を開けようとしてゐるんだよ。

大きな激動が青い子供たちの群におこりました。大抵は器械と爲事を捨てるし、眠つてゐた子供達も目をさまして、みな猫眼石の扉の方に向つて行かうとしました。

光 「またチルチルと一緒になつて」わたしたちは柱のうしろにかくれよう。「時」に見附けられるといけないから。

チルチル あの音は何處からくるの。

子供 曙が上がりかけてゐるのだよ。今日生れる筈の子供が地の上へ降りて行く時間になつたのだよ。

チルチル どういふ風にして降りて行くの。梯子があるの。

子供 御覽。「時」が門に手をかけてゐるから。

チルチル 「時」つて誰なの。

子供 地の上へ出て行く子供たちを呼び集める役をする人だよ。

チルチル いけない人なの。

子供 うん。けど何にも聞いてはくれないんだよ。どんなに頼んだつて、順番が来なければ、いくら行かうとしても、押し戻してしまふんだよ。

チルチル みんな行きたがつてゐるの。

子供 あとに残されるのはつまらないもの。でも行くとなると悲しいよ。ほら／＼扉を明けてゐる。

大きな猫眼石の扉がそろ／＼と蝶番で開きました。地の上の物音が遠い音楽のやうに聞えて来ました。紅と緑の光が部屋の中に入つて来ました。「時」は脊の高い、長い鬚を腮に垂らした老人で、鐘と砂時計を持つて、戸口にあらはれました。曙の蒼蒼色の霧でできた波止場のやうなところに繫いである大船の、白と金色の帆の端が見えました。

時 「闕際で」時の鳴らされた子供たちの用意はいゝか。

青い子供達 「臂で押し分け押し分けして方々から駆けて来て」こゝです。こゝです。こゝです。

時 「自分の前を通つてかまはず外へ出て行かうとする子供たちに向ひ荒つぽい聲で」一度に一人づつだ。また要るだけより人数が多い。いつでもかうだ。わしの目をくりますことは出来ないうぞ。「一人の子供を押しかへして」お前の番ではないぞ。かへれ。明日まで待て。お前もだめだ。入れ入れ。十年立つたらやつて来い。十三人目の羊飼だと。十二人あれば用は足りるのだ。テオクリットやヴィルジルの時代とはちがふんだ。餘計に行く必要はない。まだ醫者があると。駄目だ。澤山行きすぎてる。多すぎて、地の上でももてあましてゐるのだ。それから技師は何處にゐる。正直な人間がほしい。たつた一人でも、幻のやうに現れて欲しいのだ。正直な人間はゐないか。ふんお前か。「子供、さうだとうなづく」可なり瘦せつこけてゐるやうだな。長生はできさうもないな。こらく、そこへ行く子供。そんなに急いではないかん。急いではないかん。それからお前は何を持つて来た。何にもない。空手だと。では行くことはならないぞ。何かもつて来い。都合次第大きな犯罪でもいゝ。ひどい病氣でもいゝ。何を持つて行かうがおれはかまはないが、空手ではならない。何かもつておいで。「一人の小さな子供が、出るのをいやがつて反抗する。それを皆してむりに押し出さうとしてゐるのを見附けて」これ。お前はどうしたのだ。時が迫つてゐるのだぞ。世の中の不正不義に對して闘ふ英雄を求めてゐるのだ。お前がそれだ。お前は是非行かなければな

らなう。

一六六

青い子供達 この人行きたがらないんですよ。

時 何だと、行きたがらないのだと。この小化物め、何を考へついたので。背くことはならん。時がないのだ。

子供 「押し出されて」 いやだ、いやだ。僕行きたくないんだ。生れたくはないんだ。いつまでもこゝにゐたいんだ。

時 そんなことは取り上げられん。時が来れば行くのだ。これ、早く出る、出る。

一人の子供 「前へとび出して」 ねえ。僕をやつて下さい。僕代りに行きませう。僕のおとうさんとおかあさんが年をとつて、一日も早く僕の来るのを待ちこがれてゐるんですつて。

時 そんなことはならん。お前はお前の行くべき時がある。いち／＼言ふことを聞いてゐたら際限がない。一人は行きたいといふ、一人はいやだといふ。一人は早すぎるし、一人は遅すぎる。「閩際に押し込んで来た五六人の子供をつきかへして」 側へよるな。子供たち引込め、うるさい奴等だ。出かけないものはこゝに用事はない筈だ。今こそわい／＼出かけたがつて騒ぐが、いよく／＼番がくるとこはがつて尻込をする奴等だ。見ろ、あすこに木の葉のやうにふるへてゐる四人の子供がゐる。「閩を越えかけてふと引返した子供に」 くら、何だ。ど

うしたといふのだ。

子供 僕は匣の中に、僕の犯す筈の二つの罪を置き忘れて来ましたから。

もう一人の子供 それから僕は太勢を賢くする考へを入れた瓶を忘れました。

第三の子供 僕は一番い／＼梨の接枝を忘れました。

時 早く行つてとつて来い。もう六百十二秒しか時間がないぞ。曙の船は帆をばたく／＼やつて催促をしてゐる。遅れると生れられないぞ。早く船にのるのだ。「時の股の間をすりぬけて波止場に行かうとする一人の子供をつかまへて」 これ／＼お前はならないぞ。番も来ない中に、そつと生れようとしてもだめだ。これで三度目だ。此度もう一度こんなことをして見ろ、おれの妹の「永遠」と一緒にいつまでも待たなきやあならないぞ。それがどんなに面白くないことだか知つてゐる筈だ。さあみんな席についてゐるか。「波止場の上に列んでゐる子供や、もういち早く舟に乗り込んでゐる子供たちを一通りしらべて見ながら」 まだ一人足りない。隠れてもだめだ。太勢の中にもぐつてゐるな。おれの目をくりますことは出来ないぞ。これ／＼「仲好し」と名のついた小つぼけな奴。女の子にお別れをして早く出て来い。出て来い。

「仲好し」と呼ばれてゐる男の子と女の子との二人の子供は、何もかも忘れて抱き合つてゐましたが、呼ばれて眞着になり、がっかりした顔をして「時」の處へ出て、其の前に膝をつきました。

第一の子供 「時」のをぢさん。あの子と二人跡にのこれるやうにして下さいな。

第二の子供 「時」のをぢさん。あたしとあの人を一緒に行かして下さいね。
時 ならん。さあもう二百九十四秒だぞ。

第一の子供 そんなら僕生れない方が優しです。

時 自分の勝手にはならんぞ。

第二の子供 「拜むやうに」「時」のをぢさん。あたし随分おくれて生れるのねえ。

第一の子供 あの女の子の生れて来る時分には、僕もうゐなくなつてしまふ。

第二の子供 あたしもうあの人に逢ふことはできないのだわ。

第一の子供 僕たちは世界で一人ぼつちだ。

時 そんな事はおれの知つた事ぢやない。そんな願ひは「生」に頼んで見るがいよ。おれは言ひ
附けられた通り、合せたり、分けたりするだけだ。「子供たちの一人をつかまへて」さあ行け。

第一の子供 「もがきながら」いやだ、いやだ。あの子も一緒によう。

第二の子供 「第一の子供の裾にすがりながら」あの人置いといして下さい、置いといして下さい。

時 これ／＼死に行くのではない。生きるのだぞ。「第一の子供を引きずつて行きながら」さ

あ行け。

第二の子供 「氣ちがひのやうになつて、連れて行かれる子供の方に手をのばしながら」しるしを下さ
い。せめてしるしを。此度こんどどうしてあなたを見つけ出させよう。

第一の子供 僕、いつまでもお前を好いてゐるよ。それがしるしだ。

第二の子供 あたしは世界中で一番悲しい身の上になるでせう。それであなたはあたしが分か
るでせう。

女の子は倒れて地べたの上に這ひつくばつてしまいました。

時 もつといよものを望んだらよささうなものだが。さあそれで皆だな。「砂時計を見ながら」
しよ／＼六十三秒だ。

別れて行く子供と、跡にのこる子供との間に最後の一さはぎがあつて、みんないそがしい「さよな
ら」を交換しました。「さよならビエール。……さよならジャン。……要るものは皆持つたの。……僕の
考へを公表して下さい。……君は忘れたものはないかい。……また僕を思ひ出すやうにしておくれ。
……僕も君を見つけるから。……君の考へをなくしちゃいけないよ。……あんまり宇宙のことばかり
考へすぎない方がいよ。……めづらしいことは知らしておよこしね。……だめだつてさ。……でも
やつてごらん、やつてごらん。……いよことがあつたら知らせるやうにしておくれ。……僕は君を迎
へに行くよ。……僕は王様の位に生れるんだ。……」

時 「鐘と鎌をふりまはして」もういよ、もういよ。さあ錨が上がるぞ。

舟の帆は動き出してだん／＼見えなくなりました。舟の中の子供たちの聲だけがいつまでも遠くに聞えました。「地だ。……地球だ。……見える。……見える。……随分綺麗だなあ。……随分明るいなあ。……随分大きいなあ。」やがてふと深い深い谷の底から沸き上がつてるやうに、極く遠くの歡喜と待望の歌がきこえて來ました。

チルチル 「光」に ああの聲何なの。あれは子供達が歌つてゐるんぢやない。何だか外の聲のやうだな。

光 さうですよ。あれは生れて行く子供たちを迎へる地の上のおかあさんたちの歌ですよ。

かう言つてゐる中に、「時」が猫眼石の扉を閉めました。「時」は最後に一通り廣間を見まはしました。そして、ふと、チルチルと、ミチルと、「光」とを見つけました。

時 「呆れてたけり立てながら」何だ、何だ。貴様たちはこゝで何をしてゐるのだ。誰だ、貴様たちは。どうして貴様たちは青くないのだ。どうしてはひり込んで來たのだ。「大鎌をもつて脅しながらやつて來ました」

光 「チルチルに」返事をおしでないよ、青い鳥はわたしがもつてゐる。外套の下に隠してあるからね。逃げよう。ダイヤモンドをお廻し。さうすれば跡方も見えなくなるのだから。三人は前景にある圓柱と圓柱の間をぬけて左の方へ出て行きました。

——幕——

——第六幕——

第十一景 わかれ

舞臺は小さな扉のついた壁の前です。日の出。

チルチルとミチル、「光」、「バン」、「水」、「砂糖」、「火」、「乳」が出て來ました。

光 今何處にゐると思つて。

チルチル 分かるもんか、僕知らないんだもの。

光 あの壁と扉に見おぼえはないかえ。

チルチル 赤い壁に、青い小さな扉さ。

光 それでも思ひ出せないの。

チルチル さういへば、「時」が扉を見せたことをおぼえてゐるけれど。

光 夢を見てゐる時人間つて妙なものだね。自分で自分の手が分からないのだから。

チルチル 誰が夢を見てゐるの。僕なの。

光 わたしかもしれない。そりやわからないがね。でもこの壁の中には、お前が生れてから何度も何度も見た筈の内があるのですよ。

チルチル 生れてから何度も見た内ですつて。

光 さうだともさ、おねぼけさんねえ。一年前のちやうど今日わたしたちが出て来たのは、この内ではなかつたかえ。

チルチル ちやうど一年前に。おや、それぢや。

光 まあ〜。そんな青玉の洞穴のやうな目をおしでない。これだよ。これがお前たちの大事なおとうさんやおかあさんのお内ですよ。

チルチル 「扉の方へ行きかけながら」でもさうかしら。あゝほんたうだ。さうらしい。この小ぢやな戸だ。サルがある。とうさんたちこゝにゐるんだな。かあさんの傍へ来たんだな。すぐ入つて見たいな。すぐかあさんにキスしたいな。

光 少しおまち。みんなよく寝てゐるからね。いきなり目をさまさせてはいけませんよ。それに時計のうつまで戸はあかないのですよ。

チルチル 何時を打つと開くの。たんと待たなければならぬの。

光 なあにさ。ほんの二三分。

チルチル 歸つて来てうれしかないの。ねえ、どうしたの。すつかり蒼い顔をして、病氣のやうですね。

光 いゝえ、何でもないので。いよ〜おわかれをするので、少し悲しくなつただけですよ。

チルチル おわかれですつて。

光 さう、おわかれしなければね。わたしはもうこゝに用はないのですよ。あれから一年立つたから。妖女がまた青い鳥をもらひにくる時分ですよ。

チルチル でも僕、青い鳥とれなかつたでせう。思出の國でとつたのは、色が眞黒に變つてしまつたし、未來の國のは眞赤になつたし、夜の國のは死んでしまつたし、森の中ではとうとれなかつたんだもの。鳥の色が變つたり、死んだり、逃げたりしたのは、僕がわるかつたんでせうか。妖女はおこるかしら、なんていふかしら。

光 わたしたちは力の及ぶだけのことはしたのだからね。どうも青い鳥はまるでゐないものなのか、さもないければ籠に入れると、色が變つてしまふものらしいのね。

チルチル 籠はどうしたらう。

光 こゝにありますよ。坊つちゃん。この長い危険な旅の間わたしは一生懸命大事にして

持つて歩きました。今日でいよいよわたしも御用済みになりましたから、只今そつくりおあづかりした時のまゝお返し申しますよ。「辯士のやうな口調で」そこで此の際一同の名に代り、附けて一言申し上げたいのであります。

火 誰があいつに演説を頼んだのだ。

水 静かに。

パン 賤むべき敵、嫉妬ぶかき競争者の悪意ある妨碍も「聲をはり上げて」わたくしの義務を最後まで遂行することを妨げ得無かつたのであります。で、こゝに一同に代りまして……。

火 おらあ、たのまないぞ。おれには舌があるんだ。

パン え、一同に代りまして、抑制せられたる、しかも眞實にして深厚なる熱情を以て、お二人の選ばれたるお子さんたちが、今日その高き使命を果されましたについて、一言お別れの御挨拶を申しのべたいのであります。今や、お互ひの敬愛より生じまするすべての哀情を以てお別れいたしますについては……。

チルチル 何だつて。お前も僕達にさよならを云つて居るの。お前も行つてしまふのかい。

パン あゝ悲しむべき事ですが、わたしはお別れをしようとしてゐます。本當です。尤もそれは外観みかけだけですが、もはやあなた方はわたしの言葉をお聞きになる事はないでせう。

火 ちつともこまりやしないぞ。

水 おだまり。

火 貴様が鐵瓶の中や、井戸の中や、小川や、瀧や、呑口の中でぶつ／＼云ふのをやめたら、おれもだまつてやるわ。

光 「火」と「水」を杖で制しながら」もうお止し。お前さん達はほんたうに皆喧嘩好きだねえ。

お別れが近づいたので面白なくなつて、それでこんなに尖りたがるのだよ。

パン 「大それた威嚇で」それはわたしには関係のない事だ。わたしのいつたのは、あなた方がもうわたしの言葉を聞かないだらうといふことです。わたしの生きた形を見ないだらうといふことです。あなた方の目はわたしの見えない生活にむかつては、堅く閉ぢられるだらう。けれどもわたしはやはりパン鍋の中にも居れば、棚の上にも居るし、テーブルの上にも、スープ皿のそばにもゐるでせう。そこで言ひうるならば、わたしは人間のために最も信義ある伴侶にして、且最も古き友人であることである。

火 ふん。それではおれはなんなのだ。

光 まあ／＼時間がたつよ。わたし達がまた沈黙に歸らなければならぬ時が迫つてゐるのだよ。早く行つて子供達にお別れのキスをおしなさい。

火 「前へ飛び出して」 おれが先だよ。おれが先だよ。「亂暴に子供達を接吻しながら」さよなら、チルチルさんに、ミチルさん。さよなら、坊つちやん方。これから何かで火を使ふことのあるたんびに、いつでもわたしを思ひ出して下さいよ。

ミチル うん、うん。熱いよ。

チルチル うん、うん。あいつ僕の鼻をこがした。

火 これ／＼「火」や、夢中になつてはいけないよ。煙出しの中にあるのとはちがふよ。

水 なんて馬鹿だらう。

パン 何しろ、そだちの悪いやつでね。

火 ぢやあこのとほり手はかくしに入れますよ。だがわたしを忘れずに居て下さい。わたしは人間の友達です。わたしはいつでも竈の中や爐の中に居ます。あなた方が寒かつたり悲しかつたりするときには、いつでも出かけて来て、赤い舌を出してあげますよ。冬になると部屋の中を暖めたり、栗をやいたりしてあげますよ。

水 「子供達のそばへよつて」坊つちやん、わたしはおけがをさせないやうに、やさしくキスしませうね。

火 お氣をおつけなさい、びつしよつりにされますよ。

水 わたしはやさしくつておとなしいんですよ。わたしは人間に深切なんですからね。

火 それから人を溺らせます。

水 井戸をかはいがつて下さい。小川の音を聞いてやつて下さい。わたしはいつでもそこにゐますよ。

火 あいつは何處でも洪水にしてしまひますよ。

水 夕方泉のそばに坐つておいでのときにはね。それは森の中には方々にありますが、その泉が何をいはうとしてゐるのか聞いて下さいね。わたしは何にもいへません。涙で息がふさがりさうですわ。

火 一向さうらしくもない。

水 水壘を 覽になつたらわたしのことを考へて下さい。わたしはその中でたゞ黙つてゐるばかりですけれど、わたしの心はいつでもあなた方のことを思つてゐますのよ。それからまたわたしは甕かみの中にも、漏斗の中にも、水槽の中にも、呑口の中にも居るんですよ。

乳 「おづくそばへ寄つて来て」それからわたしは乳壺ちよつぽの中に。

チルチル なんだねお前もかい、そんなにはにかみやで人のいゝ「乳」までもかい。みんな行つてしまふんだね。

砂糖 「生れつきの偽善者めいたべたくした調子で」 あなたの御記憶の片隅にわづかなすきまでも残りますやうでしたら、時々はわたしといふものの居りましたことが、つまり、あなた方には良かったとお思ひ出しになつて下さい。これだけがわたしの申し上げることです。涙はわたしの性分にはあひません。涙が足許に落ちるとひどいけがをいたしますから。

パン ジェシュイット教徒め。

火 有平め。砂糖漬め。キャラメルめ。

チルチル それはさうとチレットやチローはどこへ行つたんだらう。何をしてゐるんだらう。

この時「猫」のするどい叫び聲が聞えました。

ミチル 「びつくりして」 泣いてゐるのはチレットだわ。いぢめられてゐるのよ。

「猫」が毛をさか立て、もちやくな着物と、びり／＼にさかれたハンカチで腮をゆはへて、齒のいたむ時のやうな形をして出て來ました。あとから追ひかけて來た「犬」にさん／＼かみつかれたり、打たれたり、蹴られたりして、いよくおこつて、すごいなり聲を立てました。

犬 「猫」を打ちながら」 そら、これでこたへたらう。もつとしてやらうか。そらく／＼。

光、チルチル、ミチル 「かけよつて二人をかき分けて」 チロー、チロー、氣が違つたのかえ。こらよせ。およしつたら。よさないか。まだするの。まあさ。まあさ。

やつとのことと「犬」と「猫」とを引き分けました。

光 なんだね。どうしたといふのだね。

猫 「しゃくり上げながら目をこすつて」 「光」の奥さん、皆、あいつです。あいつが人に無法をしかけたんですよ。わたしの食べものの中に釘を入れたり、わたしの尻尾をひっぱつたり、わたしを打つたりしたんですよ。それでもわたしはもうまるで、何にも／＼手出しはしなかつたんでございますよ。

犬 「眞似をしながら」 もうまるで何にも／＼手出しはしなかつたんでございますよ。「顔中口にして、馬鹿にしたやうに笑ひながら」 かまふもんか。やられたらう。やられたらう。もつとやつてやらうか。

ミチル 「猫」を腕にだきしめながら」 チレットや、かはいさうに、あいつにどこを痛くされたの。わたしも泣きたくなつたわ。

火 「犬」に向つてきびしく」 お前のしわざは時が時だし、餘計悪いことですよ。わたし達がこの坊つちやん達といよくお別れをして行かうと云ふ、それでなくつても悲しくつてしかたのない時ではないか。

犬 「急にはつとしたやうに」 え、坊つちやん達とお別れするんですつて。

光 さうさ、お前の知つてゐる筈の時が來たのだよ。わたし達は沈黙に還るのだよ。またもう物がいへなくなるのだよ。

犬 「急にしん底から絶望のうなり聲を出し、子供達の上に飛かかつて、亂暴に、さうくしく、撫てたりだきついたりしました」 いやだ、いやだ、わたしはいやだ。わたしはいつまでもお話しませうよ。ねえ、坊つちやん。今わたしのいふことが分かるでせう。分かるでせう。ねえ。ねえ。ねえ。だからわたし達、なんでも、話しませうよ。そしてわたしはごく善い犬になりますよ。それから、わたし達は讀むことだの、書くことだの、ドミノをすることまで覺えますよ。それからわたしはいつでも體を綺麗にしてゐますよ。臺所で決してぬすみ喰なんかしませんよ。びつくりする程面白い藝をして見せませうか、猫をキスしてやりませうか。

ミチル 「猫」に」 それからチレット、お前は、お前は。何にもいふことはないのかえ。

猫 「氣どつた謎めいた調子で」 あなた方お二人ともおかはいと思ひますよ。なにしろいゝお子さんですからね。

光 さあ、此度はわたしがお別れのキスをする番ですよ。

チルチルとミチル 「光」の着物にぶらさがりながら」 いやだ、いやだ。ねえ「光」さん、わたし達

といつまでも一緒に居て下さいよ。とうさんなんともいやあしない。かあさんには、どんなに「光」さん深切だつたか、僕たち話をするから。

光 でもねえ、だめですよ。この扉はわたし達が入れないやうにしまつてゐるんだからね。

チルチル みんな一人ぼつちになつて、どこへ行つちまふの。

光 そんなに遠くではないのよ。つひそこの「萬物の沈黙の國」へ行くだけですよ。

チルチル だめだ、だめだ。行かしやしないから。僕達も一緒に行くよ。かあさんにさういつてね。

光 お泣きでないよ、いゝ子だからね。わたしは「水」のやうに聲は出ないし、「光」だけでは人の耳には聞えないだらうね。けれどわたしは人間の世がおしまひになるまで、始終そばについてゐてあげるんだよ。お忘れでないよ。何處でも月の光の一ばいさした所にも、星がちかく笑ふ所にも、毎朝上がる曙の光にも、もえるランプの光にも、それからお前達の心にいゝ考へや明るい考への浮かぶ時にも、いつもわたしがお話してゐることを忘れないで下さいよ。「壁の奥で時計が打つ」ほら時計が打つてゐる。さよなら、もう戸が開くよ、お入り、お入り。

「光」が子供を扉の中におし入れました。扉が半分開いて、子供が入ると、すぐあとはしまりました。

「パン」はそつと涙をふきました。「砂糖」、「水」その他はすつかり涙にひたつたまゝ、そこ／＼にか
くれて、舞臺の兩袖に分かれて入つてしまひました。「犬」は舞臺のかげで吠えてゐました。舞臺は
しばらく空になつて、やがて壁と小さい扉を見せた道具が眞中から割れて最後の場がそこにあらは
れました。

第十二景目 醒め

初めの幕と同じ飾附の部屋ですが、壁からそこらの様子一體がくらべものにならない程に、魔法の
力で變へられたやうに、生き／＼と笑つてゐるやうに、幸福さうに見えてゐます。朝日の光は樂し
さうに閉めた窓の鎧屏のどれからもさし込んでゐました。

奥の右手の方にチルチルとミチルとが、小さな寢臺の上にごつすりと寝てゐました。犬や猫、その
外いろ／＼の品物は、總べて初めの幕で妖女の來ない前と同じ場所にゐました。
そこへかあさんのチルが入つて來ました。

かあさん 「機嫌よく叱るやうな聲で」 さあ／＼お起き／＼おねぼうさん。極りが悪くはないの
かい。もう八時を打つて、お日さまが森の天邊まで上がつてしまつたよ。おや／＼よくね
てゐること、ねてゐること。「腰をかゞめて子供たちに接吻して」二人とも眞赤な顔をして。チ
ルチルはラヴァンドの匂がするし、ミチルは鈴蘭の香がするよ。「二人をまた接吻して」ま
あ子供つて、可哀いものねえ。でもお晝まで寝かしてはおけまい。なまけものに育つて

しまつてはならないから。それに體のためにもよくないだらうからねえ。「やさしくチルチルをゆり起して」お起き〜、チルチルや。

チルチル 「目を醒ましたながら」なあに。「光」かい。「光」はどこへ行つたの。いやだ、いやだ。行つてしまつてはいけないよ。

かあさん 光だつて。光のさすのは當り前だよ。扉が閉つてゐたつて、もうお晝のやうに明るいのも。おまち、いま扉をあけるから。「窓の扉を開けると、まばゆいやうな日の光が部屋の中に入り込みました」ほら御覽。お前どうおしだえ。まるで目が見えなくなつたやうだね。

チルチル 「目をこすり〜」かあさん、かあさん。かあさんだつたのか。

かあさん だつて、さうさ、わたしだよ。誰だと思つたの。

チルチル かあさんだ。さうだ、さうだ。かあさんだ。

かあさん さうだとも、さうだとも。かあさんですよ。昨夜とちつとも違つてゐやしないよ。どうしてそんなにびつくりしたやうな顔をして見るのさ。わたしの鼻が逆さにでもついでゐるかい。

チルチル まあ、かあさんに逢へて僕うれしかつた。久しぶりだ、ほんとに久しぶりだつた

ね。僕すぐにキスしなきゃならない。もう一遍、もう一遍、もう一遍。それに僕の寢姿いゝ心持だなあ。僕内へ歸つて來たんだ。

かあさん どうしたんだらうね。どうしてお前目をさまさなかつたの。加減が悪くはないかい。ちよつと、舌を見せて御覽。さあ起きて、着物をお着更へな。

チルチル おや〜僕シャツを着てるね。

かあさん さうさ、着てゐるよ。ズボンとジャケットをお着。ほら、あそこの椅子の上にあるから。

チルチル あれ僕が旅に着てゐた着物かしら。

かあさん 何の旅に。

チルチル 何つて、去年のさ。

かあさん 去年だつて。

チルチル だつてさうぢやないか。クリスマスだつたよ、出かけて行つた時は。

かあさん 出かけて行つた時だつて。お前こゝから外へは出やしないぢやないか。わたしは昨夜お前たちを寢床に入れてやつて、そして今朝お前は目をさましたんだよ。お前みんな夢だよ。

チルチル でもかあさんには分からないんだ。去年だったよ。僕がミチルだの、妖女だの、「光」だのと一緒に出かけに行つたのは。「光」はどんなに深切だったろう。それから「パン」と、「砂糖」と、「水」と、「火」も行つたんだ。みんなは喧嘩ばかりしてゐたよ。僕のことおこらないで下さい。かあさん大變さみしかつたかい。とうさん何ていつたの。でも僕豚だつていへなかつたんだもの。だから僕、書置をして行つたんだ。

かあさん お前何の話をしてゐるんだねえ。きつとお前加減が悪いか、さもなければまだ目が醒めずにゐるんだよ。「やさしく體をゆすぶりながら」さあ目をおさまし。ほら、少しはよくなつたかい。

チルチル だつてかあさん、僕ほんこのことをいつてゐるんだもの、まだ目が醒めないのはかあさんだらう。

かあさん 何だつて。わたしがまだ目が醒めないでゐるんだつて。とんでもない、わたしは六時から起きてゐるんぢやないか。わたしはもうすつかり臺所をしてしまつたし、火も焚きつけたのだよ。

チルチル ぢやあミチルに、ほんたうだかうそだか、聞いて見るといゝや。あゝ、僕どんなにいろいろな目にあつたらう。

かあさん え、ミチルだつて。それはどうしてさ。

チルチル ミチルも一緒に行つたんだもの。僕たち、おぢいさんとおばあさんにも逢つて来たんだもの。

かあさん 「ますくびつくりして」おぢいさんとおばあさんだつて。

チルチル あゝ、思出の國でね。往く途中だったものだから。二人とも死んでゐるけれど、達者だったよ。おばあさん、僕たちにうまい梅のタルトをこしらへてくれたよ。それから弟たちや妹たちも居たよ。ロペールもゐたし、ジャンもゐたし、獨樂もあつたし、それからマドレーヌにビエレットに、ポーリーヌにリケットに……。

ミチル リケットちゃんたらまだ這ひくしてゐたわ。

チルチル それからポーリーヌは相變らず鼻の頭におできをこさへてゐたよ。

ミチル かあさんにも逢つたわね、ゆうべ。

かあさん ゆうべだつて。あたりまへさ、お前たちを寝かしつけて上げたんだもの。

チルチル うゝん、うゝん。幸福の園だよ。かあさんすつと綺麗だつたけれど、でもよく似てゐたよ。

かあさん 幸福の園だつて、わたしはちつとも知らない。

チルチル 「かあさんをぢつと見て、やがて接吻をして」あゝ、かあさんずつと綺麗だつたよ。でも

あのときよりかもつと好きだ。

ミチル 「同じやうに接吻して」あたしもよ。あたしもよ。

かあさん 「感動はしたものの、餘計不安心になつて」まあ、どうしたんだらうこの子たちは。外の子供のやうに死んでしまふんぢやないのかしら。「はつとして、氣がちがつたやうに叫び立てました」とうさん、とうさん、早く来て下さいよ。子供たちが悪いんですよ。

とうさんのチルが手斧をもつて、極くしづかに入つて來ました。

とうさん 何だ、何だ。

チルチルとミチルはうれしさうに駆けて行つて、父親に接吻しかけました。

チルチルとミチル やあ、とうさんだ、とうさんだ。お早う、とうさん。とうさん、今年はたんと爲事があつたの。

とうさん なんだ、どうしたといふんだ。子供たちはちつとも悪さうぢやない、元氣な顔をしてるぢやないか。

かあさん 「涙ぐみながら」顔附だけでは分かりませんよ。外の子供たちも同じやうだつたもの。あの子たちもおしまひまで随分元氣だつたからねえ。それなのに神さまはつれてお

行きになつたでせう。この子たちは一體どうしたんでせう。昨夜は極くそつと床に入れてやつたんですよ。ところが今朝起きて見ると何もかもだめになつてゐるんですよ。何をいふんだか、かいくれわけの分からないことを口走るんですよ。旅の話をしたり、光を見たの、おぢいさんやおばあさんに逢つたのつて、死んでゐるけれど、達者だなんていふんだもの。

チルチル でもおぢいさん、まだ木の脚をはめてゐるよ。

ミチル それからおばあさん、まだリューマチが痛むんですつて。

かあさん ほら、あの通りですよ。行つてお醫者様を呼んで来て下さいよ。

とうさん なにいゝさ。なにいゝさ。子供たちはまだ死にはしない。まあよく様子を見ることにしよう。「かういふ時表の扉を叩く音がしました」お入り。

隣の家のベルレンゴーのおばあさんが入つて來ました。初めの暮に出た妖女によく似た小さなおばあさんで杖にすがつてゐました。

隣のおばあさん お早う。どなたも、クリスマスお目出たう。

チルチル やあ、妖女のベリリウヌだ。

隣のおばあさん クリスマスのシチウをこしらへようと思つてね、火種を少し頂きに参りま

した。今朝はお寒いことですね。子供さんたち、お早う。御機嫌はいかゞ。
 チルチル ベリリウンヌのをばさん、僕とうく青い鳥が見つからなかつたよ。
 隣のおばあさん 何をいつてゐなさんだね、この子は。

かあさん 聞かずに置いて下さいよ。子供たちは自分にも分からないことをいつてゐるんですから。今朝目が醒めるとあゝなんです。何かよくないものを食べたのかも知れませんが。
 隣のおばあさん だつてチルチルさん、お前ベルレンゴーのをばさんを忘れたの、お隣のベルレンゴーですよ。

チルチル でもをばさん、あなたは妖女のベリリウンヌでせう。をばさん、おこつてるんですか。

隣のおばあさん ベリー……何ですつて。

チルチル ベリリウンヌ。

隣のおばあさん ベルレンゴーさ、ベルレンゴーつていつたのね。

チルチル ベリリウンヌでも、ベルレンゴーでもいゝんです。でもミチルが知つてるんだ、かあさん 何よりも悪いことは、ミチルまでがやはりねえ。

とうさん ふん、ふん。すぐ治つてしまふよ。二つ三つからはしてやりやいゝんだ。

隣のおばあさん いゝえ、そんなことをなさらない方がいゝ。わたしはよく知つてをります。が、これはほんの夢の病ですよ。多分月の光のあたる處でお休みになつたでせう。今ひどくわづらつてゐる内の小さい娘も、ちよいとさういふことがございますよ。

かあさん それはさうと、娘さんはどんなお鹽梅ですえ。

隣のおばあさん まあくでござりますよ。起上がることが出来ませんのでねえ。お医者様は神経だつて仰しやるんですがねえ。わたしは何よりもきつといゝだらうと思ふのは、今朝もあれがクリスマスプレゼントをねだりましてねえ。まああの子の考へですと――。

かあさん ええ、ええ、わかりました。チルチルの鳥でせう。これチルチルや、お前どうしてもあれを可哀さうな娘さんに上げないかい。

チルチル なに、かあさん。

かあさん お前の鳥さ。あれはお前には要らないのだから。今では見てもやらないのだから。それなのに娘さんは長い間あれをほしがつて、死にかけてゐなさんだからね。

チルチル おやさうだ、僕の鳥はどうしたらう。あゝ、あそこに籠があるよ。ミチル、お前あの籠をごらん。あれは「パン」が持つてゐた籠だぜ。さうだ、さうだ、同じものだ。け

れど中には鳥が一つゐるきりだ。外のは「パン」が食つてしまつたのかしら。おや／＼まあ、この鳥は青いよ。でもあれは僕の雉鳩だ。でも出て行く前よりかすつと青くなつてらあ。何だ、あれが僕たちのさがしてゐた青い鳥なんだ。僕たち随分遠方まで探しに行つたけれど、ほんたうはこゝにしよつちゆうゐたんだな。だが不思議だなあ。ミチル、お前鳥を見たかい。「光」が見たらなんといふだらう。僕籠を下してやらう。「椅子の上のつて鳥籠を下して、それを隣のおばあさんの前へ持つて行きました」さあ、ペルレンゴのをばさん、これです。まだほんとに青くはないんですけれど、今にだん／＼青くなりますよ。早く娘さんの處へ持つて行つておやんなさい。

隣のおばあさん まあさう。本當に下さるの。さうやつてすぐと、たゞ貰つてしまつていゝかしら。ありがたう、ありがたう。あの子がどんなに喜ぶでせう。「チルチルを接吻しながら」キスをさせて貰ひますよ。では早速に。早速に。

チルチル さう／＼早くおいでなさい。中には色のかはるのがあるから。

隣のおばあさん 娘がこれを見て何といひますか、また上がつてお話いたしますよ。

おばあさんは出て行きました。

チルチル 「しばらくそこらを見まはした後で」とうさん、かあさん、この内どうかしたの。みんな

先の通りだけれど、ずつと綺麗になつてゐるねえ。

とうさん 何だ、ずつと綺麗になつたと。

チルチル あゝさうだよ。何もかも塗りかはつて、新しく見えるし、何を見ても綺麗に磨き上げたやうだよ。去年と違ふねえ。

とうさん 去年だと。

チルチル 「窓の方へ行きながら」それから森の方を御覽よ。まあ随分大きくつて立派だねえ。

みんな新しくなつたと思ふよ。僕こゝにゐると随分愉快だなあ。「パン鍋の所へ行き蓋を開けて見ながら」「パン」はどうしたらう。「パン」の奴みんな馬鹿に静かだなあ。それからここにチローがゐらあ。おい／＼チロー、チロー、今日は。ねえお前随分よく闘つたなあ。森の中のことお前覚えてゐるかい。

ミチル それからチレットも。チレット、わたしをよくおぼえてるのよ。でももうお話ししないのね。

チルチル 「パン」君。「額をさはつて見て」おや／＼ダイヤモンドがなくなつてしまつた。僕の青帽子を誰が持つて行つたらう。いゝや、僕もういらないんだ。あゝ「火」だ。あいつはい奴だつたよ。「水」をおこらせてはばち／＼いつて笑つてゐたなあ。「呑口の方に駈けて行

つて」それから「水」だ。お早う、「水」さん。何いつてるんだらう。「水」はやつぱり話をし
てゐるんだけれど、もう何をいつてゐるんだか分からなくなつた。

ミチル お「砂糖」が見えないわ。

チルチル あゝうれしいな。僕、愉快だ、愉快だ、ほんとに愉快だ。

ミチル あたしもさうよ。あたしもさうよ。

かあさん まあお前さちは何だつてそんなにぐる／＼まはりをしてゐるんだね。

とうさん かまはずにお置き、心配おしでない。嬉しいごつこをして遊んでゐるんだから。

チルチル 僕は「光」が一等好きだつた。「光」のランプはどうしたらう。あかりがつくかしら。

「またそこらを見まはして」あゝ、あゝ、何もかもほんとにいゝなあ、僕、どんなにうれしい
だらう。

表の扉を叩く音が聞えました。

とうさん お入り、お入り。

するとそこへさつき来た隣のおばあさんが、片手に可哀らしい、それはびつくりするほど美しい娘
をつれて出て来ました。娘はチルチルの雉鳩をしつかりかゝへてゐました。

隣のおばあさん この通り、奇蹟を見て下さい。

かあさん まあおどろいた。歩けるの。

隣のおばあさん 歩けるかつて。どうして、駈けることでも、踊ををどることでも、飛ぶこと
でも何でもできますよ。この子は鳥を見ますとね、明るいとこでチルチルさんの雉鳩だ
かどうだか見るんだつて、あんな風に一ツとびに窓の所へ飛んで行きましたよ。それか
らといふものはまあどうもねえ。天使のやうに往來へ飛んで行つてしまつて、一緒に歩く
のに骨が折れる位でございましたよ。

チルチル 「娘の傍へ出かけて行つて、びつくりして」おやおや。光にそつくりだよ。

ミチル 少し小さいやうね。

チルチル あゝさうだな。だが今に大きくなるだらう。

隣のおばあさん あの子たちは何をいつてゐなさるの。まだよくならないんですか。

かあさん だんだんよくなるんですよ。少しづつ直つて行くんですよ。朝飯を食べたらすつ
かりよくなるでせう。

隣のおばあさん 「娘をチルチルの隣の方へつきやりながら」さあお前行つてチルチルさんにお禮
をおいひ。

チルチルはふとおびえて一足下がりました。

かあさん まあチルチル、どうおしだい。お前娘さんがこはいのかい。さああの子にキスしてお上げ。うんといゝ大きなキスを。いゝえ、そんなのよりもつといゝのをさ。お前一體そんなにはにかみやぢやなかつたぢやないか。それもう一つ。でもお前どうしたんだねえ。泣きさうな顔をしてゐるよ。

チルチルは何だか無器用に娘を接吻してから、しばらくその前に立つてゐました。二人の子供はお互いに見合つて何も物を云ひませんでした。やがてチルチルは鳩の頭をなてゝやりました。

チルチル この位青ければいゝの。

娘 ええ、ええ、これで澤山。

チルチル 僕もつと青いのも見たの。でもほんとに青いのは、どんなにしてみても、とても捕まらないでせう。

娘 かまはないのよ。これで結構なのよ。

チルチル 何か食べさせたの。

娘 いゝえまだよ。何を食べるでせう。

チルチル 何でも。麥でも、パンでも、玉蜀黍でも、こほろぎでも。

娘 どういふ風にして食べるんでせう。

チルチル 嘴で。御覽、して見せて上げるから。

チルチルは娘の手から鳥を取らうとしました。娘はする気もなしに取られまいとしました。そのまわぎにまぎれて、鳩は飛んで逃げて行つてしまひました。

娘 「失望の叫び聲を上げて」 かあさん。逃げてしまつた。「聲を上げて泣き出しました」

チルチル いゝよ。いゝよ。お泣きでないよ。僕また捕まへて上げるから。「舞臺の前の方へ歩いて行つて、見物に挨拶をしました」 あなた方のうちどなたでも、あの鳥をお見つけになつた方は、どうぞわたしたちにお返し下さいまし。あの鳥はいつかわたしたちの幸福のためにいり用でせうから。

—幕—

『青い鳥』の全部は、これをフランス語の原文に據つて翻譯し、更にイギリス語の譯本に據つて四五個所字句の増補を行つた。

大正十一年十月十一日印刷
 大正十一年十月十八日發行
 大正十一年十二月五日版

(定價九拾錢)

◀ 青い鳥 ▶

翻譯者

楠山正雄

發行者

東京市牛込區天來町三番地
 佐藤義亮

發行所

新潮社

東京市牛込區矢來町三番地

電話番町
 八八八
 〇〇〇
 九八七
 番番番

番二四七一(京東)替振

印刷所

東京市小石川區西江戸川町
 電話小石川五九二番

富士印刷株式會社
 印刷者 佐々木俊一

■ 泰西戲曲選集

▼一冊價九拾錢
▼送料一冊六錢

- 第一編 □ ロミオとジュリエット (新刊) シエクスピア作
久米正雄氏譯
- 第二編 □ 青い鳥 (新刊) マアテルリンク作
楠山正雄氏譯
- 第三編 □ 人形の家の家 (新刊) イブセ作
中村吉藏氏譯
- 第四編 □ ハムレット (新刊) シエクスピア作
久米正雄氏譯
- 第五編 □ シラノ・ド・ベルジュラック (新刊) ロスタン作
楠山正雄氏譯
- 第六編 □ ソクラテス (近刊) ストリンダベルク
福田久道氏譯

■ 現代脚本叢書 ■

- (1) 未能力者の仲間 (附) AとB。或武者小路實篤氏著
日の出來事其他
- (2) 飢渴 (附) 饑死。長田秀雄氏著
- (3) 法成寺物語 (附) 春の海邊。十五夜物語。谷崎潤一郎氏著
- (4) 鬮舞 (附) 葡萄棚。犬。小しんと馬。吉井勇氏著
- (5) 阪崎出羽守 (附) 嬰兒殺し。淀見藏。穴。山本有三氏著
- (6) 雨空 (附) 雪。五月盡。暮れがた。久保田万太郎氏著
- (7) 秦の始皇 (附) 芭蕉と遊女。義隆最後。灰野庄平氏著
- (8) 七年の後 (附) 夜の一場。清盛常盤。近藤經一氏著
- (9) 第一の世界 (附) 新緑。俊寛。ベテスマの池。小山内薫氏著
- (10) 茅の屋根 (附) 玄宗の心持。時勢は移る。菊池寛氏著

各冊約二百四十頁 ◆ 價一冊壹圓 ◆ 送料一冊六錢

楠山正雄氏譯 — 全部三冊、完了せり —

近代劇選集

全三冊
▼總洋布最上製
▼一冊約八百頁
▼各貳圓五拾錢
▼送料拾貳錢

全三冊

- ▼第一卷 青い鳥 外八篇(七百七十頁)
- ▼第二卷 シーザーとクレオパトラ 外五篇(八百十頁)
- ▼第三卷 幽霊 外五篇(七百六十頁)
- ▼第三卷附録 近代劇概説 百六十頁

劇壇の權威者によつて譯出せられたる新界空前の大出版は茲に全部の完了を告げたり。收むる所何れも不朽の古典的名篇にして、其の大部分は其れづれの原文より譯出せるものにかゝる。

ロマン・ロオラン著 豊島與志雄氏譯 — 全四冊 —

ジャン・クリストフ

第二卷
新刊
一冊約八百頁
各貳圓五拾錢
送料拾貳錢宛

ユーゴー著 豊島與志雄氏譯 — 全四冊 —

レ・ミゼラブル

全部完了
出増
來版
一冊八百頁
價各一冊貳圓
送料拾貳錢宛

精到詳密なる近代劇の百科全書出づ

楠山正雄氏著 — 六版出來 —

近代劇十二講

總洋布最上製
定價參圓五拾錢
送料拾八錢

◆四六判七百六十頁——原稿紙にて一千枚を超ゆる大著
ロマン・ロオラン曰く、「近代の不思議は、藝術家が民衆を發見したことである。」と。而して本書の著者楠山正雄氏は、この語に次いで云ふ。「近代劇はこの新しい發見の上に成立つた新しい藝術である。」と。誠に近代劇を云はずして、民衆藝術を云ふ可からず、民衆藝術を措いて、近代文藝のことを語る可きでない。而して、近代劇に關する譯述は、これまでも隨分行はれてゐるか、劇と人とに就いてその全内容を悉くし、劇壇藝術を説いて全細目に及べるもの本書の如きは未だ曾て無い。四部十二講七十餘章、イブセン以降近代劇の作家の作風と思想とを説くこと數百人、代表作の梗概評釋すべて數百篇。複雑多面なる世界近代劇の全景は、著者が透徹せる視力によつて一眸の下にあつめられてゐる。まことに是れ精到詳密なる近代劇の百科全書である。

■泰西名詩選集

小形特製極美本
一冊定價壹圓宛
郵送料金六錢宛

第一編 ■ハイネ詩集 生田春月氏譯

第二編 ■ホイットマン詩集 白鳥省吾氏譯

第三編 ■ゲエテ詩集 生田春月氏譯

第四編 ■アルレエヌ詩集 川路柳虹氏譯

第五編 ■トラウベル詩集 福田正夫氏譯

第六編 ■カアペンタア詩集 富田碎花氏譯

第七編 ■現代佛蘭西詩集 柳澤健氏譯

現代詩人叢書

【第一編】沈黙の血汐 野口米次郎氏著

【第二編】蠟人形 西條八十氏著

【第三編】預言 川路柳虹氏著

【第四編】田舎の花 室生犀星氏著

【第五編】季節の馬車 佐藤惣之助氏著

【第六編】青き樹かげ 三木露風氏著

【第七編】炎天 千家元麿氏著

【第八編】澄める青空 生田春月氏著

【第九編】風車 百田宗治氏著

【第十編】愛慕 白鳥省吾氏著

◆定価一冊六拾錢 送料一冊六錢 一冊六拾錢 送料一冊六錢
紙數一冊六拾 頁數一冊六拾

集全フネエゲルツ

▼第十編 貴族の家 布施延雄氏譯(壹圓參拾錢)

(1)	■ 獵人日記	生田長江氏譯	▼定價貳圓 ▼送料拾貳錢
(2)	■ ルーチン	田中純氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料八錢
(3)	■ 初恋	生田春月氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料八錢
(4)	■ その前夜	田中純氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料八錢
(5)	■ 煙	大貫晶川氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料八錢
(6)	■ 父と子	谷崎精二氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料八錢
(7)	■ ブーニンとバフリン	布施延雄氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料八錢
(8)	■ 處女	田中純氏譯	▼定價貳圓 ▼送料拾貳錢
(9)	■ 春の波	生田春月氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料拾貳錢

(附)餘計者の日記、ミシヤ等

(附)彼等の手紙

戀

生田春月氏譯

▼定價壹圓卅錢
▼送料八錢

田中純氏譯

▼定價壹圓卅錢
▼送料八錢

大貫晶川氏譯

▼定價壹圓卅錢
▼送料八錢

谷崎精二氏譯

▼定價壹圓卅錢
▼送料八錢

布施延雄氏譯

▼定價壹圓卅錢
▼送料八錢

田中純氏譯

▼定價貳圓
▼送料拾貳錢

生田春月氏譯

▼定價壹圓卅錢
▼送料拾貳錢

終